第二章

２０

ダルフェンディアに着いた四人は、恒例のように宿を探すことにした。
「二手に分かれてさっさと探そう。集合はさっきの広場で」
ネッコの提案にロアとアッド、ネッコとメルフィナ、それぞれ二人ずつに別れ、宿を探していた。
「さぁて、宿で休息して、さっさと次の街に向かおうぜ」
「……いや、宿はやめたほうがいい」
アッドがロアの腕を引きながら言った。そのまま建物の影をと身を潜める。
「おいおい、なんなんだよいきなり……」
「……あれを見ろ」
そう言ってアッドは指を差す。ロアがその方向を見ると、神聖騎士団の姿があった。
「お、おいおい、なんで奴らがこんなところまで来てるんだよ」

「……馬をめいいっぱい飛ばしてきたんだろう。見たところ、先ほど到着したようだな」
「さっきって……それじゃあ、街の門とか閉鎖されちゃってるんじゃないの？」
「……そんなことは問題ではない」
アッドが涼しい顔で言う。
「じゃあなんだよ？」
「……あの二人、騎士団に見つからないと思うか？」
アッドの言葉に、あぁなるほどと言わんばかりの顔で、ロアは首を横に振った。

「まずいね」
身を潜めながら、ネッコは冷静に口走った。
「だから僕は反対だったんだ。馬車を使えば、こんな事態にはならなかったのに」
「まぁ、過ぎた事を言っても仕方ないですよ」
「過ぎた事を言わないのは反省のない証拠だ。この教訓を生かして、これからは馬車を使うことにしよう」
「はぁ……まぁ、それはいいですけど、さすがにこれだけの数がいると、迂闊に動けませんね」
メルフィナが建物の影から顔を覗かせながら言う。
「二手に分かれたのは失敗でしたねぇ。ね、ネッコさん」

メルフィナが笑顔でネッコに言う。そう、二手に分かれようと提案したのはネッコだったのである。
「まぁ……過ぎたことを言っても仕方ないよ」
「そうですわね」
「そうそう、そんなことよりもう一つ大きな問題がある」
「問題ですか？」
メルフィナが不思議そうな顔でネッコに尋ねる。
「僕には、あの二人が見つからないでいられるとは思わないけどね」
ネッコのその言葉に、苦笑いを浮かべるメルフィナであった。

「俺たちがさっき通った広場があっちだろ？」
ロアは北を指差しながら言う。
「……あぁ、それで、ネッコ達は西のほうへ行ったはずだ」
「まだ騒ぎが起きてないところを見ると、見つかってないみたいだけど」
「……とにかく、合流するのが先決だ」
「隠れてる奴を探すのは難しいぜ？下手に動けばこっちが見つかるしな」
「……あぁ。だが、西に行けば二人に近づくのは確かだ。騒ぎが起こってからでも近ければすぐに合流できる」

「そりゃそうだ。じゃ、善は急げだ。行こうぜアッド」
そう言って、騎士団の動きを見ながら行動を開始したアッドとロアだった。

「見つからないように東に進めば、アッドさんたちと近づくと思うんですけど……」
「僕は反対だな。さっさと街を出た方がいいはずだ。あいつらもそうしてると思う。外で合流した方が安全だからな」
メルフィナの言葉に反対するネッコ。両者の意見は先ほどから平行線であった。
「でも、この様子だと外に出る方がひと苦労だと思うんですけど……」
メルフィナは辺りの様子を伺いながら言った。
「なんかもう、蹴散らして行った方が早いような気がしてきた」
「こらこら、物騒な事を言うもんじゃありませんよ」
ネッコの意見に、苦笑いで答えるメルフィナ。しかし、ネッコの表情からは、その発言が冗談などではない事が伺える。
「ちょっとした爆発でも起こして、こっちの位置を知らせるとか」
「そんなことしたらリュネットたちにも見つかっちゃいます」
「そんなことわかって……」
ネッコが言いかけたと同時に、大きな爆発が起こる。
「え……?」

メルフィナは反射的にネッコの方を見た。
「ぼ、僕じゃないよ」

「お、おい！　あの爆発もしかして……！」
「……ネッコか！」
ロアとアッドは爆発あったの方へと走り出す。
「……しかし、今のは魔法による爆発じゃないように見えたが」
「ネッコ達じゃないかもしれないってこと？」
「……あぁ、そういうことだ」
「なら、今のうちに二人を捜して街を出ようぜ」
「……そのつもりだ」
二人は西へ向かって走っていった。

一方、メルフィナとネッコは爆発があった付近まで近づいていた。そこには、人の半分くらいの大きさをした虫が数匹、うろうろとしていた。
「でか……」
ネッコがその虫を見て、静かに言う。その虫たちは、少しうろうろした後に目から何かを放って、再び爆発を引き起こした。

「あ、あの虫たちの仕業か！　魔物が街の中に入り込むなんて、衛兵も神聖騎士団もいったい何をやってるんだ！」
「いえ……あれは、魔物ではありません」
「魔物じゃないって？じゃああれは何なんだ？」
ネッコの問いに、メルフィナは答えず黙っている。
「おい、メルフィナ、なんなんだよ？」
「わかりません、ただ、あれからは生が感じ取れないんです。そう、まるで生き物ではなく人形のような……」
様子を伺うメルフィナ達だったが、虫たちはそのメルフィナ達の方へとどんどんと向かってくる。
「まさか……シールド！」
メルフィナが慌ててシールドを展開する。シールドが広がった瞬間、虫たちの目が一斉に光り、シールドの手前で爆発が何度も起きる。
「見つかった！　そんな感じはなかったのに！」
「恐らくこの虫たちはどこからか操作されているのでしょう。操作している本人が、どこからかこちらを見ているのかもしれません」
「狙いは僕たちということか」
「そうとも限りませんよ」

メルフィナがそう言ったとき、街のあちらこちらで爆発が起きた。
「神聖騎士団や、衛兵たちの所でしょう。もしかしたらアッドさん達の所かもしれませんが……なんにしても、この街自体を攻撃してるみたいですね」
メルフィナはシールドを使いながら考えた。
（人形使いの十三使徒……なんて聞いたことないですし、そもそも、この街を攻撃する理由がない。他の国の兵器かなにかか……）

「だぁりゃぁ！」
ロアが叫びながら一体の虫に殴りかかる。鈍い音と共に虫は吹っ飛び、動かなくなる。
「いてぇ、なんだこれ！　鉄みたいに堅いぜ」
そう叫ぶロアの傍らで、アッドは虫の間接部を狙いサクサクと斬り裁いていく。
「……しかし、いったいどこから侵入したんだ？」
「空から降ってきたんじゃねぇの？」
アッドの疑問に適当に答えるロア。
「……しかし、これではキリがないな。ロア、ネッコ達と合流しろ。ここは俺がやる」
「あぁ、わかった。あいつら連れてくるまでくたばんなよ！」
「……愚問だな」
ロアは思いっきり地面を蹴る。そのまま虫たちを飛び越え、走っていった。そのロアを見届

け、アッドは次の虫へと斬りかかる。
　ロアは爆発のある場所を頼りに走った。その中で、一際爆発が激しい所が目に入る。激しいと言うより、交互に爆発が繰り返されている。
「ネッコの魔法かな……もしかしたら、あの女の魔法かも知んないけど、とにかく行ってみるしかないな！」
　ロアはその爆発が交互に起こる場所へと向きを変え、走り出した。途中、何匹か虫と遭遇するが、走っている勢いで殴り飛ばし、そのままスピードを緩めず走り続ける。そして、その場所が近くなると同時に、メルフィナとネッコの姿を目にする。
「おーい、ネッコ、メルフィナー！」
「ロア君！」
　ロアの姿を見たメルフィナが叫ぶ。
「無事だったんですね」
「あぁ、それより、あっちでアッドの旦那が虫どもを一人で相手にしてんだよ」
「こっちはもう片づく。すぐに向かうよ」
　そう言いながら、ネッコは最後の虫を葬る。そして、三人はアッドの元へと急いだ。
「この辺のはずだけど……虫は全部片づけてるなぁ。どこいったんだ？」
　ロアが辺りを見回すが、アッドの姿はない。
「少し移動したんじゃないのか？」

「そうかもしれませんね。少し探してみましょう」
三人は、残りの虫たちを葬りながら、アッドを探し続けた。しかし、アッドの姿はどこにもない。
「街の外にでたんじゃないのか？」
「そうかなぁ……」
「そんな勝手な行動をする人じゃないでしょう」
メルフィナがそう言って考え込む。
「神聖騎士団に連行されたんじゃないのか？」
「いや、そこまで大人しく捕まる奴じゃないだろう」
あーだこーだと意見は出るが、事態は一向に進展を見せない。
「とりあえず、もう少し探してみましょう」
メルフィナの意見に皆同意し、アッド探索が開始された。

21

押し寄せる虫たちを切り伏せながら、アッドは西の方で上がる爆音に耳を傾けていた。
「……無事ではいるようだな」
そう呟き、アッドは次々と虫を駆除していく。しかし虫は減る気配をなかなか見せていなかった。
「……きりがない」
そう思い、三人合流しようと、虫たちの囲いを突破しようとしたとき、アッドの身体に衝撃が走る。数匹の虫と一緒に吹き飛ばされるアッド。
「見つけましたよ、あの忌々しい吸血鬼の仲間」
リュネットの朗々といた声が上がる。
アッドは起きあがりながらその声を聞く。
やっかいなのに見つかったといった表情のアッド、対照的にしてやったりリュネット。
「さぁ。あの吸血鬼の居場所を白状して貰いましょうか」
どうやらアッドは虫ごと騎士団の魔法によってふきとばされたらしい。

虫の群れの向うに構える騎士団の壁が見える。
軽く舌打ちアッドは自分の状態を調べる。
さっきの衝撃はさほどのダメージをアッドに与えてはいない。しかし、虫と騎士団を同時に相手にするほどアッドは愚かでもなかった。
「……」
「黙秘ですか？」
ふてぶてしいまでの満足げな表情を浮かべるリュネット。
「ならばいいでしょう。吸血鬼などという忌まわしいものと関わった罪であなたを処刑しましょう」
そう言い放ち、騎士団に合図を送る。
一斉に呪文を口ずさむ騎士団員。
その間にも、虫はアッドに攻撃を仕掛けてくる。どうやら、虫の体液は虫の攻撃対象を決める要素があるようで、騎士団よりもアッドに狙いを付けている。
虫を斬りつけながら、さらに騎士団から飛んでくる魔法を交わすアッド。徐々にその動きに鈍りが見え始める。
「さぁ、もう後がないようね」
勝ち誇った顔のリュネット。
その時。突然リュネットの前にあった騎士団の壁が揺れる。

「どうしたのです！」
状況のわからないリュネットが叫ぶ。それを受けた騎士団員は、
「地面からも虫が！」
「うぎゃぁ！」
「このぉ！」
悲鳴と怒号が辺りに満ちる。
そして、このチャンスを見逃すアッドではなかった。瞬時に周りの虫を切り倒し、屋根の上にまで跳躍する。
「あぁ！　待ちなさい、追え、追うのです」
そのアッドを目撃し、リュネットが指示を出す。しかし、地からの来訪者に混乱し始めた騎士団には、その指示は届かない。
「……残念だったな」
そう言って、アッドは駆け始める。
「待てぇぇ！」
リュネットの叫び声だけがしばらくアッドの耳に届いた。

虫と騎士団の包囲を突破したアッドは、しばらく東、三人のいる方とは逆に走り、東の町は

ずれで一息ついていた。
「……合流しないとな」
そう呟き、西を目指して歩き始めるアッド。一休みしている間に、街での戦闘は終結を向かえたらしく、もう爆音も怒号も響いていない。虫に襲われ、炎上した建物がその炎を燻らせているだけであった。
ネッコの魔法による爆音を当てに彼らを捜すことはできない。
そう考えながら歩いていたアッド。
突然、異変が周りに膨らむ。音が、生き物の気配が突然あたりから消え失せたのだ。
立ち止まり、辺りを油断なく探るアッド。剣の柄にはすでに手がかけられていた。
気が張りつめる……そして、背後に気配が現れる。
一気に剣を抜き、背後の気配を断ち切ろうと振り返りざまに剣を振るアッド。
気配の招待に気付いたアッドは寸前のところで剣を止める。街の住人といった出で立ちの女の子であった。
尻餅をついた女の子に、
「……すまない」
そう言って起きあがるのに手を貸すアッド。
胸を押さえながら、起きあがる女の子。
アッドは申し訳なさそうな顔をしている。

女の子は胸を押さえ、息を整えているようであった。
「……大丈夫か？」
そう問いかけ、肩に手を置こうとした。
「……なっ」
異変に気付き、バックステップで距離を置こうとするアッド。
しかし、肩に置こうとした手には激しい激しい痛みが生まれている。
（利き腕か）
右肩を押さえ、アッドは思考する。
油断してた。明らかに気配があったはずではあるが、今はない。そう目の前の女の子、いや敵には気配がなかった。傀儡、その言葉がしっくりとくる。
無言のまま、敵はアッドに向かってゆっくり歩を進めている。
じりじりと後退し、アッドの後ろには、ナハルの街を覆う壁がその存在を主張する。
（これはマズいな）
傀儡は、手に魔力とおぼしき力を貯め、アッドに向かって歩を進めている。
刹那、アッドは傀儡に向かって駆ける。瞬時に傀儡に接近するアッド。
傀儡が魔力をアッドに向かって放つ。
それを紙一重でかわしながら、アッドは傀儡に蹴りを放つ。
その反動を利用して、壁まで飛ぶアッド。

その背後には、先ほどの傀儡の攻撃によって開いた穴がその姿を浮かび上がらせていた。
「……おしかったな」
誰にともなく呟くアッド。
傀儡が体勢を整えた頃には、アッドはすでに穴の闇へと消え去っていた。

22

「大丈夫ですか？エレイン様」
「ええ……大丈夫……心配しないで」
疲労困憊といった様子で頷くエレイン。額からは滝のように汗が流れている。一方のライオネルといえば全く疲れた様子もなくエレインの後ろを歩いている。
エレインとライオネルはもう何日も旅を続けていた。もちろん、旅なのだから町中ばかりを歩くわけではない。野宿もする、魔物もでる。もっとも魔物が出てもライオネルが一人で楽に倒してしまうのだからエレインは何もすることが無く見ているだけなのだが。しかし、宮廷育ちのエレインにとっては慣れないことばかりで想像以上の体力を消耗していた。
「もう少しでダルフェンディアの町です。がんばってください」
「ええ……がんばるわ……」
エレインは答えるのも辛そうだった。
「疲れました……」

エレインがベットに倒れ込む。ここはダルフェンディアの宿。町で一番高級な宿を取ったエレインは、そのまま部屋に入り休んでいた。
「では、エレイン様。私は食料やその他の物などの買い出しにに行ってきます。一人では危険ですから宿からでないようにしてください」
「私も子供じゃないんですから大丈夫です。それにもう一歩も歩く体力もありません。おとなしくこの部屋にいますから、心配せずにいってらしゃい。くれぐれも町の人にあなたがレオデグランスの護衛隊長などと気づかれないように」
「わかりました」
そう言ってライオネルはエレインの部屋から出て行った。

ライオネルは町を歩いていた。いたるところに剣を差した剣士や魔法使いなどがいる。おそらく勇者募集に参加した者達だろう。しかし、それだけでなく何か町中が騒がしい。鎧を着た町の警備兵達がライオネルの横を走っていく。
ライオネルはその中の一人の兵士を呼び止めた。
「何かあったのか？」
「これは御貴族様。どうやら町中で謎の魔物が複数暴れているようです」
兵士が丁寧な言葉で答えた。まさかライオネルのことは知らないだろうが、服装でライオネルが貴族だと気づいたようだ。

「危険ですので町中をあまり出歩かないようにしてください。では私はこれで」
兵士が敬礼して、ライオネルの前から立ち去った。ライオネルも宿に向かって走り出す。
エレインの部屋にたどり着いたライオネルは中に入る。そこはもぬけの殻。エレインはいなかった。ライオネルの表情に苦悩がありありと浮かぶ。
宿の下の階まで降りたライオネルは宿の主人と掴まえた。
「これはこれは御貴族様。どうかなされましたか？」
「今日、私と一緒に来た女性がどこにいったかしらないか？」
「ああ、あの美しいご婦人ですか。あの方ならあなた様が宿を出られてからすぐにどこかにお出かけになられたようですが」
「行き先は言ってなかったか？」
「存じませんが。何かありましたか？」
「いや、なんでもない」
そう言って、ライオネルは宿の外に出た。エレインを探すために。

「うまくいきました。せっかく町に来たのですから、いろいろ世間を見て回りたいものです。ライオネルがいるとかたぐるしくていけません」
エレインは一人でダルフェンディアの町を歩いていた。物珍しそうに辺りを見回している。

23

多くの犠牲者を出したダルフェンディアの突然の惨事。町議会はまず負傷者の救急治療に当たったがとても人手が足りず、たまたま町にい合わせた医者や回復魔法の使い手をボランティアとして要請し、司祭メルフィナは有無を言わずそれに参加した。

取り残されたネッコとロアといえば、先の戦闘ではぐれたアッドの探索に町を巡っているのだが、その姿形を見受けられないでいた。

「死体でも転がってりゃ安心して次の町に行けるのにな」

「縁起でもないこと言うな」

ロアの言葉に憤るネッコ。しかし、二人が町で見るものといえば、瓦礫、例の虫のようなモンスターの残骸、見知らぬ人間、男、女、老人、子供の死体……ロアがウンザリするのも無理は無かった。

瓦礫に頭を突っ伏して死んでいる青年の肩をぐいっと引き上げるロア。血まみれの顔面はアッドのそれとは違っていた。ロアはネッコの方を見て首を振り、ネッコは惨たらしい死に十字を切る。

今度は虫が這い出てきたために開いた地面の穴を覗き込むロア。
「ここに落ちたんじゃねーだろうな」
ぽっかりと開いた穴の奥はなにも見えない。ロアは試しにそばにあった石を投げ込んでみたが、石が地面に落ちた音はいくら待っても聞こえなかった。
「こりゃ深いな」
「掘りたての地面が柔らかいのかも。クッションになって音がしなかったのかもよ」
「じゃあネッコ、おまえ降りてみるか？」
「いい。服が汚れる」
ふと、数件先の家の影から見覚えのある甲冑がのぞいた。リュネット率いる神聖騎士団の一隊である。彼らの中からも負傷者はもちろん、数名の死者が出たと見え、その無為な最期に集団で祈りを捧げている最中であった。
「ふん、連中も不運な時に居合わせたもんだな」
ネッコが言って振り返ると、ロアはすでに逆方向に向かって早歩きで進んで行くところだった。慌てて追いかけるネッコ。
「おーい、連中もいまは襲ってこないって。きっと」
それでもロアは足を止めない。ネッコは仕方なくロアの行く方向へついて行くことになった。
と、街角を一つ越えたところで、ロアは突然足をとめる。後ろに引っ付いていたネッコは必然的に彼の背中にぶつかるハメになった。

「だっ……なんなんだ、今度は！」
「あれ見ろ」
ロアが指をさししめす方向には見覚えのある二つの顔。片方は毅然とした凛々しい佇まいの騎士で、もう片方は腰に不似合いな長剣を差す気品溢れる少女。それがかのレオデグランス国王女エレインと付き人ライオネルなのだから、ネッコが思わず我が目を疑うのも無理は無かった。
「ふう、せっかく撒いたとおもったのに……」
エレインが愚痴る。
「姫様、勝手に外出なさらないようにとあれほど……」
ライオネルがくどくどとエレインに説教をするが、エレインは真面目に聞いていない。
キョロキョロとおちつかなげに町を見回すエレインが、ネッコとロアを見つけるのは早かった。彼らと目が合うと、ライオネルに耳打ちをし、単身で二人の元へと足を運ぶエレイン。
ネッコは思わず佇まいを正したが、ロアは腰に手をあてて興味深そうにライオネルとエレインの顔を見交わしていた。
「お久しぶりです。ネッコと……」
「ロアだ」
「エレイン姫、どうしてこんなところへ？しかもその剣は……」
ネッコはエレインの腰にささっている剣の柄を見た。勇者アトロの紋章を象った印は、まさ

しく聖剣エクスカリバーのそれである。
「遅まきながら、私も魔王を倒すために旅を」
エレインの言葉を聞いて、ロアは大笑いをする。
「はっはっは！　バカバカしい。これだから窓際育ちの嬢ちゃんは。あっちの騎士も大変だな」
嬢ちゃん、という言葉に一瞬眉を引きつらせるエレイン。
「あら、私の剣技だって捨てたもんじゃありませんわ。剣術指南の先生には筋がいいと褒められるし、実際にキャメロンにやってきた使徒を追い返したのも私ですのよ」
「使徒……？使徒がキャメロンに！？」
予想よりも遥かに早い魔物達の行動に、ネッコは驚いた。
「ええ。それもボールスという名の、使徒の中でも上級の者をね」
心持ち胸をそり返し、得意げに言い放つエレイン。ボールスの名前を聞き、今度はロアの顔が引きつった。
「ボールス」
ぽつりと呟くロア。エレインとネッコはきょとんとした顔で彼を見る。
「……ええ。そういえばあなたはヴァンパイアでしたっけ。吸血鬼の祖であるボールスは、あなたの遠い親戚になるのかしら」
「……」

ロアはエレインの言葉を聞いているのか聞いていないのか、何も答えずに宙を眺めていた。その目つきは険しい。
「ボールスがどうしてキャメロンへ？」
ネッコが言った。
「さあ？己の快楽のため、と言ってましたけど……それより、私の方こそあなた方に訊きたいのです。この町の状況はいったい……もしやここにもすでに魔物が？」
ネッコはエレインにダルフェンディアを襲った悲劇――例の虫について話して聞かせると、少し離れていたライオネルが三人の元へと近づき、興味深げに虫の性質などを訊ね始めた。
「一種のゴーレムみたいなものかな……虫の形はしているけど、有機体ではなかった。僕の仲間がどこかから操られているのかもしれないと言ってたけど、詳しいことはさっぱりだ」
「……そうか」
ライオネルはそう言うと、腕を組んで何事かを考え始めた。
「心当たりでもあるとか？」
「いや、無いこともないが……」
ライオネルはそれきり言葉を続けなかった。不思議そうに顔を見合わせるエレイン、ネッコ、ロアの三人。
「……とにかく、良くないことが起こりつつある……いや、すでに起こっているのは確かだ。それもここレオデグランスだけではなく、人間界全体にな」

それからネッコとロアは、エレイン達を自分たちの宿へと案内した。メルフィナが町の負傷者たちの治療を承っている場所である。

四人は一つのテーブルを囲んで座り、少し離れてメルフィナが負傷者たちの治療を続けていた。エレインはその様子を興味深そうに、また、どこかやるせない気持ちでもって眺めている。

「……襲われたのはきっとキャメロンやここだけではないだろう。ノーススターナイツもいつまでもつか……」

ノーススターナイツとは、人間界と魔界との境界で魔物たちの侵攻を防いでいる騎士団である。主に北西の国パッセの兵隊がその割合のほとんどを占めているが、正確には中立であるサンダルークとペルセンも加わった多国籍軍であり、その戦力規模はかなりのものである。

「へっ。すでに壊滅しているかもしれねーな。レオデグランスの首都が襲われたんだ、無理ないぜ」

ロアが投げやりに言った。が、本当に深刻な状況なのだろう。ライオネルは辛辣な面持ちでテーブルを眺め、治療を続けるメルフィナもちらりと彼らの方に目をやった。

「……ふん、人間だって大人しくしているわけじゃない。聞く所によればペルセンが国をあげて魔王討伐に向かうそうじゃないか。レオデグランスだって世界中から有志を募ってるし、状況は変わるさ」

ネッコはそう言うと、思い出したように言葉を付け足した。

「……ま、魔王を倒すのは僕だけど」
突然、椅子をはじきながら立ち上がるエレイン。ネッコたちだけでなく、離れているメルフィナや彼女に治療してもらっている負傷者たちも、エレインの方を振り向いた。
「エレイン様、落ち着きなさいませ」
ライオネルがなだめるように言う。しかしエレインは構わず、同席の三人の顔を眺めると荒々しく言葉を吐いた。
「世界が徐々に闇に蝕まれようとしているときに……こんなところでぐずぐずしていられません。早く魔王の元へ向かいましょう、ライオネル！」
エレインは拳を握り締めてライオネルに訴えかけた。
「エレイン様……」
「……ま、焦る気持ちはわかるけどよ。嬢ちゃん、あんた一人が魔王に立ち向かったところでどうにもならない事ぐらい……」
「分かっています！　私の力では魔王を倒すことはおろか、奴の元へ辿りつくことすら困難だということも。ですが、アトロの血をひいている以上、私は……」
そこまで言葉を続けると、エレインはうつむき、握り締めた拳を胸に当てた。人間を脅かす魔王に対する憎しみと、自らの宿命にたいする誇り。しかしまた、どうすることもできないちっぽけで非力な自分に対する憤り……それらの感情は、周りで見ているネッコやロア、メルフィナにも痛いほど伝わってきた。

そして誰よりも彼女の気持ちを汲む男、ライオネルもまた、自分の力だけでは到底及ばない目標に不甲斐なさを感じていた。
「……まあ、たしかに」
ネッコが言葉を続ける。
「アトロの血をひくのはエレイン様、あなただけだ。しかし、同じ志を持つ仲間は世界中の至るところにいます。その者達を上手く導くのが、あるいはあなたの役目なのかも」
「志……」
「そうです」
「それは、あなた方もですか？」
きょとんとするネッコ。「余計なことをいいやがって」とでも言わんばかりの表情でロアが睨みつける。
「そうよ、そうだわ！　なにも私たち二人だけが魔王を倒しに行こうとしているわけじゃないのね、ライオネル。このネッコやロアたちだって……」
「ちょっと待て！　俺達は確かに魔王を倒しにいくつもりだが、あんたらとつるむ気は一切無い」
「僕はまあ、どっちでもいいけど」
ロアはネッコにもうひと睨み加える。
「エレイン様、しかしこの者たちは……」

「この者たちは？」
言いたい言葉がすんなりと出てこないライオネルに変わって、ロア本人が答える。
「勇者にしては下品すぎるってか？はっ！　貴族様なんぞこっちからお断りだぜ」
「貴様、口をつつしめ！」
ライオネルとロアが睨み合う。
「いえ、とんでもありませんわ。強力無比なヴァンパイア族に優秀な司祭さん、おまけにヴァンシュタイン家の子息ネッコが加われば、私達の旅も……」
エレインの言葉が耳に入り、メルフィナは驚愕する。
「ヴァ……ヴァンシュタインですって！？　ネッコ、あなたサラブレッドだったのね。どうりで……」
「ふむ、ならば致し方ない。ネッコ殿とメルフィナ殿にだけ助力を頼みましょう」
「待てオッサン」
「ロアは私が監視……いえ、私達の仲間です。離れることはできません」
メルフィナが言った。
「そうですわ。例え口は悪くとも彼はヴァンパイア。きっと私達の大きな力に……」
「だから！　俺はあんたらの仲間なんかに……」
……かくして丸一日をかけて言い争った結果、ネッコ、ロア、メルフィナの三人は、エレインとその護衛ライオネルを連れ立って魔王の元を目指すことになってしまった。

また、アッドの消息は結局わからずじまいで、日は明けてしまう。

24

「やっぱり見つからないな」
夕暮れの中、ネッコがつぶやく。今日も一日ダルフェンディアの町を捜索したが、結局アッドは見つからなかった。集合場所に向かうネッコ。そこにはすでにメルフィナの姿があった。
「駄目だ。見つからなかったよ」
ネッコがメルフィナに向かって言う。
「こっちもです。ほとんど町中探したんですけどねぇ」
メルフィナが言う。
「そう言えば、ロアは？」
「なんか疲れたから先に宿のほうに戻るって言ってましたよ」
「いい加減な奴だな……まあいい。僕らも今日は宿に帰ろう」
ネッコとメルフィナは宿に向かった。

エレインが泊まっている宿。超が付くくらい豪華な宿である。エレインとパーティを組むこ

とになってネッコ達も此方に宿を移した。もちろん、宿代はエレイン持ちである。
メルフィナがエレインの部屋のドアを叩いた。中からエレインの返事がする。
「失礼します。エレイン様」
「ああ、メルフィナ。お帰りなさい。どうでしたか？」
「駄目でした。やはりもう町にはいないのかもしれません」
「そうですか……」
「そういえば、ロアを見ませんでしたか？」
「ああ、あの方ならライオネルと何処かに行きましたよ。すぐに戻ってくると言っていましたが」
エレインがそう言った時、ライオネルとロアが戻っていた。ロアはメルフィナに顔も見せずに自分の部屋に入っていった。
「エレイン様、ただいま戻りました」
ライオネルがエレインに向かって頭を下げる。
「おかえりなさい。何処に行っていたのです？」
「たいした用ではありません。少しロアと話があっただけです」
「ただいま」
声が聞こえて、ロアが部屋に入ってきた。ネッコは顔を上げて読みかけていた本を置く。

ネッコとロアの二人は同室である。
「うわっ、おまえその顔どうしたんだよ？」
ネッコがロアの顔を見て言う。ロアの顔はアザだらけで酷い状態だった。
「ははは、コテンパンにやられた。あのおっさん化け物だわ」
ロアは笑って言う。
「おっさんって、ライオネルのことか。何があったんだ？」
ネッコが聞く。
「なんかこのパーティで、ライオネルのおっさん除けば戦士系俺だけだから、ちょっと俺の実力のほどを知りたかったらしい。裏の空き地で素手の格闘戦やってきた」
「で、負けたと？」
「ああ、完敗だったな。吸血鬼の俺のほうがパワーもスピードもあるはずなのに、まるで歯が立たないんだ。こっちの攻撃なんてかすりもしない。昼間とはいえ、まさか人間に素手で殴り合って負けるとは思わなかったぜ」
「ふーん、魔法使いの僕には素手で殴りあうなんて野蛮な行為にしか思えないけどね」
ネッコが馬鹿らしいといった様子で言った。
「あーあ、動いたら腹減ったな。ちょっと下で飯食ってくる」
ロアはそう言うと、部屋を出て行った。
部屋と出て、長い廊下を歩いているロアに十歳ぐらいの少女が目に入った。その前にはちょ

び髭を生やした貴族風の中年男とこの宿の使用人。何か言い争っているらしい。少し興味を持ったロアはその三人に近づいていった。
「いったいどうなっとるんだ、この宿は。ダルフェンディアで一番の宿と聞くから来てみれば、泊まっているのは素性の知れない下賤な者ばかり。この小娘も私にぶつかったのに謝りもせんのだぞ」
「申し訳ありません」
怒鳴る貴族の男、平謝りに謝る使用人。少女は黙ったままだ。
「あー、どうかしたか？」
ロアが貴族の男に聞く。
「何だ貴様は。平民がわしにタメ口を聞くとはいい度胸だ」
貴族の男がロアを睨む。
「まあまあ、いいから。何があったか話してみろよ、おっさん」
「何がもくそもあるか。この小娘がわしとすれ違うとき、わしのマントに肩が触れたのだ」
「それだけ？」
「それだけだと？下賤な平民の分際で、貴族の服に触れるとは何事か。今ここで手打ちにしてくれる」
そう言うと貴族の男は腰からサーベルを抜いた。宿の使用人は真っ青になっている。
「おっさん、短気だなぁ。カルシウム足りてる？」

「なんだと？それ以上無礼な口を利くと貴様も一緒に斬り捨てるぞ」
「ははは、やれるもんならやってみろ」
ロアが笑って言う。その言葉を聞いた貴族の男は額に青筋を浮き上がらせ、ロアに斬りかかった。
ロアは斬りかかってきた男の手を片手で受け止めると、もう一方の手で男の腰のベルトを掴み、そのまま窓の外に投げ捨てた。ガラスが割れ、下でグシャッって音がした。
「はは、ボケが」
ロアがおもしろそうに言う。使用人がさっきよりもさらに真っ青になっている。
「まずいですよ……」
「大丈夫だろ、ここ二階だし。多分死んでない」
「そうじゃなくてあの人、オクト大臣ですよ」
「大臣？えらいのか？」
「偉いに決まっているでしょうが。こんなことが知れたらあなた間違いなく縛り首ですよ」
「ふーん、そりゃまずいな。まあ、今は腹が減ったから飯を食いにいく」
そう言ってロアが歩き出そうとしたとき、それまで無言だった少女がロアの服を引っ張った。
「ありがとう」
少女が言う。青い髪をしている。

「ああ、お嬢ちゃん。どういたしまして」
ロアが言う。
「一つ聞いていい？」
「うん？」
「ここにエレインって人いる？」
「ああ、エレインならこの廊下の奥から二番目の部屋にいるぞ」
ロアが指差す。
「ありがとう、おじさん」
そう言うと笑って少女は駆け出した。
「変わった子だな」
「そうですね。お客様もずいぶん変わった方ですけど」
「そうか？それよりあんた、早いとこ下に倒れてる男助けてやったほうがいいんじゃないか？」
「そうでした」
使用人はあわてて駆け出す。
「うーん、俺っておじさんって呼ばれる顔かなぁ」
ロアは首をかしげながら、一階のレストランに向かった。

エレインの部屋の前にたどり着いた青髪の少女はドアのノブに手をかける。
「あら、お嬢ちゃん。エレイン様に何か御用ですか」
いつの間にそこにいたのか、メルフィナが少女の横に立って、やさしく微笑む。
「うん、ちょっと……」
そこまで言うと少女はメルフィナから飛びのいた。メルフィナの殺気に気づいたのだ。
「隠してもバレバレですよ。あなた人間じゃないでしょう。もう一度聞きますよ。エレイン様に何の御用ですか」
微笑んだまま、メルフィナが言う。
青髪の少女が不気味にニヤッと笑う。少女のお腹の辺りが急に盛り上がった。
今度はメルフィナが飛びのく。少女のお腹から巨大なワニのような怪物が瞬時に生えて、今までメルフィナがいた場所の壁を大きく食い破った。
「あれ、避けられた」
少女が簡単に言う。
「じゃあ、今度はこの子。タロウ、おいで」
少女が腕を伸ばす。その手が大蛇に変わり、メルフィナに襲い掛かる。今度もメルフィナは間一髪でかわす。それでも執拗に少女の腕から生えている大蛇はメルフィナを追っていく。この狭い廊下でいつまでもかわしきれるものではない。
「ファイヤーボール！」

轟音とともに少女が炎に包まれる。部屋から飛び出たネッコが魔法を放ったのだ。少女はそのまま炎に焼かれ、崩れ落ちた。
「お前が戦ってたからとりあえず魔法放ったけど、あいつなんだったんだ？」
ネッコがメルフィナに聞く。
「さあ、変わった魔物でしたね。エレイン姫を狙ってたみたいですけど……」
「あっけなかったな。魔物とはいえ、子供の姿をした奴を殺すのはちょっと気が引けたけど」
ネッコがそう言って少女の死体を見る。その目が大きく見開かれた。まだ体が燃えたままの少女が立ち上がったのだ。顔や体は燃えて半分溶け掛かっているのに、その表情は笑っている。
「あははは、ひどいなぁ。女の子になんてことするの。もう怒ちゃった。手加減しないよ。くらえ、全員しゅつげ……」
そこまで言った時、少女の体が後ろから真っ二つに切られた。頭から腰まで半分に割れ、今度こそ崩れ落ちる少女。そのまま炎に包まれ、黒い炭と化した。
「頭をつぶされたら、さすがに生きてはいられないだろう」
少女を切った男、ライオネルが静かに言う。その後ろにはエレインが立っている。
「あれ？エレイン様、部屋にいたんじゃなかったんですか？」
メルフィナが聞く。
「ちょっとライオネルといっしょに、一階まで行ってたんですよ」
エレインが言う。

「しかし、エレイン様の居場所が魔王軍に知られているとはまずいことになりました。すぐにこの町を離れたほうがいいでしょう。いつまた魔物に襲われるかわかりません」
ライオネルがエレインに言った。
「でもアッドさんが……」
エレインが答える。
「アッドなら心配いらないと思うよ。あいつはそんな簡単に死ぬ奴じゃないし、探していないって事はもうこの町にはいないんだろ。アッドも僕たちも行き先は一つなんだ。魔王城に向かって旅すればいつか出会うさ」
ネッコが言う。
「ならばすぐに出発だ。エレイン様、よろしいですね？」
「ええ、ライオネル。ネッコ、メルフィナさん、急いで荷物をまとめてください。ライオネルはこれを宿屋の主人に渡してきてください。迷惑をかけたお詫びにと」
エレインが金貨の入った袋をライオネルに渡す。ライオネルはうなずいて一階に向かった。
ネッコは自分の部屋の荷物を急いでまとめ始める。
「あれ、どっか行くの？」
のんきな声がしてロアが部屋に帰ってきた。
「すぐにこの町を出るんだよ」
「なんで？」

「ええい、説明するのが面倒くさい。いいからお前も荷物まとめろ」
ロアは適当に自分の荷物をまとめ始めた。
「なあ、そういやさっき二階ですごい物音したけどなんかあった？廊下は焦げてるし、壁は穴開いてるし、丸焦げの黒い炭の塊は床に転がってるし。消火訓練でもしてたのか？」
「はぁ……おまえぐらい単純に生きられたら楽だろうな」
ネッコはため息をついた。

暗くて広い部屋。モードレッドは相変わらず私室でチェスを打っていた。ドアをノックする音が聞こえる。モードレッドは答えなかったが、ドアが開いて一人の少女が入ってきた。その少女はダルフェンディアでライオネルが斬り殺したあの少女とうりふたつだった。
「あははは、モードレッド様。私のコピーがダルフェンディアで一匹やられちゃったみたいです」
「……」
「すぐに他のコピーも向かわせたんですけど、もう宿屋はもぬけの殻でして」
「……」
「街中も探索させたんですけど、いませんねー。たぶん、もう町の外に出ちゃったのかも」
「……」
「あ、あと追加情報なんですけど、エレインの側にはライオネルって騎士の他に、イーリアス

教関係者ぽい女と若い魔法使いがいましたよ。あ、それと変な吸血鬼」
「……」
「うーん、今回は何でやられちゃったんだろうなぁ。原因としては、やっぱり不意打ちが大きいのかなぁ。　ライオネルの他に護衛がいるとは聞いてませんでしたから、びっくりしました」
「……」
「モードレッド様？聴こえています？」
「……で、ルーテネよ。結局エレイン姫は殺せなかったんだな」
それまで黙ってチェス盤を見ていたモードレッドが静かに言った。
「はい！」
ルーテネと呼ばれた少女は元気よく答える。
モードレッドがパチンと指をならすと、ルーテネの体が黒い炎に包まれる。ルーテネは悲鳴を上げる暇もなく、床に影だけ残して消されてしまった。
部屋が再び静寂に包まれる。モードレッドは再びチェス盤に向かった。
「イヒヒヒ、アハハハ、酷いなぁ、モードレッド様。かわいい部下を殺すなんて、何をそんなにいらだってるんです？もっと人生楽しくいかなくちゃ」
静かだった部屋に少女の声が響き渡る。
「ふん、どうせ私が殺したのはコピーだからかまわんだろう。変わりはいくらでもいる」

モードレッドは静かに答えた。
「そのとおりです。私みたいにね」
柱の影から笑顔のルーテネが現れた。
ルーテネは十三使徒の一人にして偉大な錬金術師ヘンギストに作られたホルムンクスと呼ばれる合成魔獣だ。その特質として、体の中に六百六十六匹の魔獣を飼い、そして時間さえ掛ければ自分のコピーをいくらでも作れる。ヘンギストは過去の大戦で勇者と戦って死んだが、彼女は生き残った。
「なんでそんなにエレインとかいう女にこだわるんです?副王モードレッド様ともあろうお方が。そんなに彼女が怖いんですか?」
「勇者の血を侮るなということだ。ボールスの奴もそれでへまをやった。たいした傷は負ってないようだがな」
「キャハハ、ボールス様も何をやってるのかしら」
ルーテネは相変わらず笑っている。しかし、その笑顔は少しおかしい。何処がおかしいといわれれば困るが、たしかに何かおかしいのだ。そのルーテネの顔を見て、モードレッドは顔をしかめた。
「今度オリジナルに会ったら言っておけ。コピーにコピーを重ねるのは止めろとな。コピーを重ねすぎて情報が劣化している。性格が破綻寸前だ。私の知っているルーテネはもっとまともな性格をしている」

「私自身コピーを作りすぎちゃってね。もうオリジナルがどれだか何処にいるかもわからないのよ。もうとっくに死んじゃってるかもしれないし、どこかでヘンギスト様の残された錬金術の研究を続けているかもしれない。ねぇ、わかる。私と同じハードとソフトを持った私が数え切れないくらいいるのよ。これって結構クレージーでいいわよ。アイデンティーなんか何処にあるかわからないって感じ」
「貴様の事などどうでもいいが、エレインの捜索はそのまま続けろ。でなければ私がオリジナルもコピーも一人残らず殺してやるぞ」
「はぁーい、殺されないようにがんばりマース」
ルーテネは元気よく手を上げて部屋から出て行った。

２４・Ⅱ

「……油断したな」
アッドはダルフェンディアの周囲を取り巻く壁の穴、襲撃者の作った攻撃の跡から町の外へ抜け出した後、少し駆けた所にあった木々の木陰で右肩の応急処置を行いながらそう漏らした。さきほどの襲撃でダメージを受けたのもそうだが、よりによって利き腕にダメージを受けたことが、アッドの独り言を引き出したようであった。

「……」
応急処置が終わり、徐に立ち上がったアッドは腰の剣に手をかける。神経を研ぎ澄まして一閃。
しかし、一振りの半ばで手が止まってしまう。
「つぅ」
剣を鞘に収めながらアッドは右腕の状態を分析していた。
（４５％って所だな、またあの傀儡が出てくるとやっかいだな）
木陰に座り、アッドはこれからの事を思案し始めた。
（町に戻っても厄介だな、神聖騎士団がうろちょろしているだろうし、さっきの傀儡野郎がいるかもしれない……どうするか）
アッドがこれからの行く手を決める上で重要な事象がある。それは彼のパーティとなった三人の仲間たちのことだ。彼らとの合流を図る上では町に戻るのが最上の手であろう。メルフィナは回復魔法が使えるので、傷ついた右腕をすぐにでも癒してもらえるだろう。しかし、彼らも神聖騎士団に追われているはずであったし、彼らには今の傀儡が襲い掛かっていないという保障もなかった。このことから、アッドは行く手をかなり限定され、さらに容易に決めかねる事態に陥らせていた。
（ロアたちに合うまでに襲われても厄介だ。……どうするか）
この数分で何回目の問いかけてあろう。しかし、答えは自分で出すしかないのだ。

（ふむ、仕方がない。次の目的地はカーノスメルテだ。そこにいればあいつらにも合えるだろう。自力で次の町まで行くか）
アッドは最終的にその道を選ぶことにした。一番的の襲撃が予想される町へ戻るのは得策とは思えなかった。そして、彼ら三人が町を出られないという状況は考えられなかった。
（問題児が多いが、なかなか心強い仲間なのかもしれないな）
アッドはそう思いながら町から離れる道のりを歩き始めた。できるだけ敵との遭遇を避けれるように木陰、森など障害物のある道を選んで進んでいった。

アッドの敵の目を眩ませる為のささやかな努力を踏みにじった敵が現れたのは、ダルフェンディアの町の壁が見えなくなってから数時間後のことであった。
アッドが予想していたよりも、敵の襲撃は早かったといえる。その証拠に、アッドの右腕は、まだ応急処置のままで、治療を施した痕が見られなかったからである。
「けーけっけっ」
アッドに耳障りな声が聞こえる。
「おやおや、勇敢な戦士さん？どうやら怪我してるみたいだね」
愉快で堪らないといった雰囲気でアッドに声をかけてくる。
「……」

アッドは無言で声のした方に体を向けた。声のかかる前から敵が潜んでいることには気づいていた。声で気がついたのは、どうやらこの敵がアッドに生理的嫌悪感を抱かせる相手であるということである。
「おや～お怒りかな？ケケケ」
気色の悪い笑い声を上げながらアッドの眺める男。
「……何か用か？」
気色の悪い笑い声に耐えかねたアッドが男にしぶしぶ返答する。
「用？あるぜ、大事な用が～」
トカゲを連想させるような表情で男はそう答えた。それは口から這い出した舌の性かもしれなかった。男は革のような黒い素材で作られ上下一体となった衣服をまとい、頭には新円を描くかのような漆黒の髪がまとわりついていた。
「……」
「お前は選ばれたんだよぉ、栄誉ある俺の戦士狩りの第十号にな、ケケケ」
嫌悪感を全面に押し出しているアッドを無視して男はそう宣言した。
「……戦士狩り？」
嫌悪感を我慢して、アッドは気になった男のセリフを反復した。
「あぁ～そうさ。俺様たち魔族には、人間やらエルフやらの戦士なんぞ束になっても全く問題ないからなぁ～、まぁ一種の遊びってやつだ。人間がよくやってるじゃねぇか、ケケケ」

アッドの前の男は、人間の貴族がやっている動物を狩る遊びの事を言っているようだ。
「……」
無言で男を睨み付ける。対して、男は目をすっと細め、
「気にいらねぇな、俺様に対するモノは、恐怖の表情をしてねぇといけねぇんだよ」
瞳に怒りの色を宿し、アッドをねめつける男。
「……」
「気にいらねぇって言ってんだろうがよ！」
そう叫びながら男は両手を振り上げた。それと同時に四つんばいから両手を挙げた姿勢、蹲踞の体勢になっている。
それを合図に、男の両側で一つずつ影がすっと立ち上がる。
「ケケケ、俺様の愛用のお人形ちゃんだ」
したり顔で語る男。しばらく前に襲われた傀儡はこいつのものだったらしい。
「……」
アッドは無言で柄に手をやった。
「クケケケ、利き腕が怪我してることは知ってんだよ、そんな状態でこのディアブロ様のお人形さんに勝てると思ってんのかよぉ～、気にいらねぇ、気にいらねぇんだよ！」
そう叫び、ディアブロはアッドに向かって傀儡を操作した。
アッドに向かって二つの影が地を蹴った。

激しい爆音とともにアッドが今まで立っていた場所の土がはじけ飛ぶ。
一体の傀儡の攻撃を横に飛んで避けるアッド、そこにもう一体の傀儡が接近してくる。
「甘いぜぇ」
二体の傀儡の後方でディアボロが陰湿に笑う。
接近してきた傀儡の腹を蹴り距離をとるアッド。
しかし、さらに先ほどの一体がアッドに肉薄してくる。
「くっ」
着地する寸前に傀儡が光を纏った手をアッドに向けてくる。
着地の姿勢を崩し、地面に倒れこむアッド、しかし、その瞬間に光の覆っていない腕の部分を掴み、腹に蹴りをいれ、巴投げで傀儡を投げ飛ばす。着地の姿勢を瞬時に崩したことによって可能になったのだった。
「へぇ、やるじゃあねぇか」
「……」
「じゃぁ、こういうのはどうだぁ」
怪しげな笑みを浮かべつつ、傀儡を操るディアボロ。
その手の動きに呼応して、動きを開始する傀儡。アッドの前方に一体、先ほど投げ飛ばした

傀儡が後方に位置取り次第に距離を縮める。
「……」
柄に手をやり、傀儡の動きにあわせる構えを取るアッド。
「おらよぉ」
ディアボロの合図と共にアッドへの距離を一気に縮める傀儡。
前方と後方には微妙な時間差があり、それは最も同時に対応することが難しいタイミングであった。
「くっ」
アッドは少し呻いて、
「ほぉ」
ディアボロはその瞬間アッドの取った行動に感嘆をもらした。
アッドは瞬時に前方の傀儡との距離をゼロにし、その顎を蹴り上げる。傀儡の反応できる速度ではなかったのか、防御もできずに蹴り上げられる傀儡。
その間にも、後方の傀儡はアッドとの距離を縮める。
手を覆った光の塊をアッドの背中へと押し付けようとする。
瞬時にしゃがみ込み、一撃目を避けるアッド。避けられた手をそのまま下、アッドの存在している空間へ振り下ろす傀儡。アッドはその態勢のまま後方へ飛ぶ。
「けへへ、残念」

アッドが後方へ飛んだ瞬間、そう漏らしたディアボロ。その意味をアッドは瞬時に悟った。
着地地点付近に、先ほど蹴り上げた傀儡が両手に光を携えアッドを迎え撃っていた。
そして、交錯。
「なっ！？」
驚嘆の声を上げたのはディアボロであった。
交錯した地点にあるのは、苦痛に顔をしかめるアッドの姿と、二つに分断された傀儡の成れの果てであった。

「フー、フー」
肩で荒い息を付くアッド。
「その腕で振れたのかよ、やるねぇ剣士さんよぉ」
ディアボロが長い下を蠢かせながらそうつぶやく。
そんなディアボロの言葉はアッドの耳には入らなかった。
生命の危機に瀕したアッドに埋め尽くされたのは、自分が唯一持っていた想い。
魔族、いや魔王に対する激しい愛情にも似た憎悪であった。
そう、アッドは思い出していた。ロアたちに出会う前に自分が持っていたもの、自分が唯一持っていたものを。
剣を持つ腕に巻かれた布には赤、深紅の色が滲み出ていた。

「もう、ふれねぇんじゃねぇのかぁ？けひゃひゃ」
そんな様子をみてディアボロは勝ち誇る。
「だけどよぉ、俺の人形をぶっ潰したのは許せねぇんだよ」
握り締めた拳の甲からディアボロの髪と同じ色の金属のような爪が生えてくる。
「このディアボロ様自ら、ぶっ潰してやんぜぇ」
その瞬間、ディアボロの姿が木の上から掻き消え、アッドの右側に現れる。
「死ねぇぇぇぇぇ」
必殺の爪がアッドを左右から挟みこむ。
しかし、凄まじい響きと共にアッドの姿が後方へと流れる。恐ろしい力で大地を蹴ったのだった。
「そうこなくっちゃよぉぉ」
なおも追いすがるディアボロ。
ゆらりと状態を上げたアッドとディアボロの視線が交差する。
「なっ……！？」
とたんにアッドから距離をとるディアボロ。アッドから凄まじいまでの殺気が流れ出していた。
ひるんでしまった自分に歯軋りするディアボロ。
「てめぇ」

自尊に傷を付けられた怒りがディアボロを包む。その姿が奇怪に歪み始め、背中の布がせり出し、髪が顔を包み、黒の服が体にまとわり付いていく。

「……」

その姿を意思の入らぬ瞳で見つめるアッド。しかし、殺気はどんどん増大している。

鋭い金属音のような、空気を切り裂く音と共に、衝撃を伝える風がアッドに向かって流れてる。傀儡が倒れる音がし、アッドの眼前に異形の魔物が姿を現す。下級から中級魔族に見られる魔形と呼ばれる姿。本性と呼ばれるものである。突き出した漆黒の羽は悪魔そのもの、顔があるはずの場所にはのっぺりとした黒い仮面のようなものが覆っており、顔を形成するものは何一つ存在してはいなかった。頭の両側には子供の腕ほどはあるかという角が側面から前方に突き出すように生えていた。

「いますぐ、肉塊にしてやる」

口から発せられたものではなかった。しかし、確実にアッドの耳に届くものであった。

あったはずであるが、アッドには変化が見られない。

空気を切り裂く音がして、ディアボロがアッドに肉薄する。先ほどまでとは明らかに段違いの速度である。

獲物へと直撃した爪の起こす衝撃が辺りを覆う土煙を巻き起こす。

煙が晴れたとき、ディアボロは驚愕の表情、いや雰囲気を醸し出していた。

ディアボロの爪を、アッドは素手で受け止めていた。何人もの人間族を血祭りに上げてきた

一撃をさらに強力にしたものだった。必殺であるはずだった。
しかし、その一撃が避けられるのではなく、受けられているのだ。
「なっ、なんなんだてめぇは！？」
掴まれている逆方向の腕を振ろうとするディアボロを、アッドの恐ろしい殺気が襲う。
その瞬間、生生しい音と共に、掴まれている腕が宙へ飛ぶ。
激しい苦痛の叫びを上げると思われたディアボロは、殺気を膨らませ、アッドを睨み付ける。
「ぶっ殺してやる、ぶっ殺してやる、ぶっ殺……」
ディアボロに目があったなら血走っていただろう。
その殺気を受け、アッドが動きを見せた。
アッドも瞳もまた獲物を狙う獣のように鋭かった。
互いの姿が消え、交錯する。一回、二回。
そして、三回目、弾け飛んだのは漆黒の爪であった。
漆黒の爪を切り裂いたアッドは、そのままディアボロに追いすがり、一閃、下半身を切り飛ばす。
ディアボロの叫びがあたりに木霊する。
「てめぇ、なにもんだ、なにもんなんだよぉぉぉ……」
その叫びは、アッドが下ろした剣によって遮られたのだった。

瞼を開くと、そこには見慣れない少し黒ずんだ白の布が映っていた。
「気がつきました？剣士様」
アッドは少し視線をそらし、その声の主を見て、急ぎ体を起こそうとする。
「くぅっ」
体に走る痛みで、アッドは行動を中断せざるを得なかった。
「いけません、まだ動いちゃ」
その声の主はそう言うと、アッドをそっと横にさせる。
「……君は？」
アッドの声が厳しいものを含んでいなかったのは、相手が少女だからであろう。しかし、アッドにはその少女に見覚えがあった。あの魔族、ディアボロに操られていた傀儡だったものである。
「あっすいません、私の名前はシェリス、シェリス・ホーといいます。剣士様、貴方に助けていただいたんです」
シェリスはそう言い、アッドに深々と頭を下げた。肩でそろえられた茶髪が美しく流れる。シェリスは分類するならば美人の部類に入るであろう人間であった。
「……そんなことはしてない」
アッドには、確かにシェリスを助けた記憶はなかった。

「いいえ、私は魔族に攫われて……気がついたら剣士様がお側に倒れていたんです。腕に大怪我をされて」
そこでアッドは理解した。シェリスはディアボロに攫われ、傀儡にされていたときの記憶がなく、アッドによってディアボロが倒された折に意識が回復したのだ。アッドはディアボロを倒したすぐ後に意識を失い、今に至るというわけだ。
アッドは半身を起こし、
「……シェリス、ここはどこだ？」
そうたずねる。
「はい、剣士様、ここは」
「ちょっと待って、剣士様なんて変な言い方はよしてくれ。俺の事はアッドでいい。『様』もいらない」
「そんな、命の恩人に向かって……」
「……その本人がいらないと言ってるんだから、気にしなくていい」
「そうですか……、ではアッドさん。ここはカーノスメルテの東に位置する小さな村、ココノへ向かう馬車の中ですよ」
「……それで？なんでココノに？」
「私の家があるんです。アッドさんは怪我をしてらしたし、行き先もわかりませんから私の家で治療していただこうかと……」

「……そうか、手当ても君がしてくれたのか、ありがとう」
アッドはそう言った自分に、言えた自分に少し驚いていた。少し前ならば、そんなに素直に感謝の言葉を言うことはできなかっただろう。そう思っていた。
「……だけど、俺には探さないといけないやつらがいるんだ。そいつらを探さないと……」
「そんな体でですか！？」
シェリスはアッドの腕を見てそう告げる。
確かに、アッドの腕は包帯でぐるぐる巻きになっている。何十にも巻かれたであろう包帯、しかしその包帯にも血が滲み出していた。
「……あぁ、大事な事なんだ」
そう、アッドの中では能天気なロア、小生意気なネッコ、物好きな司祭のメルフィナ。彼らが大事な仲間であることを認識していた。
「そうですか……それで、手がかりとかはあるんですか？」
「……ないな」
「ないんですか！？　どうやって探すつもりだったんですか？」
さすがにすぐには言葉をつなげないアッド。
何か考えるような表情になったシェリス。
そして、何かひらめいたような表情になると
「アッドさん、提案なんですけど、私の村に高名な占い師がいるんですよ。その方に占っても

らえば、なにかわかるかもしれませんよ？」
そうアッドに提案してきた。
「……」
アッドはしばらく黙り込み、
「……シェリス、君に任せることにしていいかな？」
「もちろんです！」
そう元気にシェリスは答えたのであった。
その後、シェリスに無理やり寝かしつけられたアッドは渋々ながら、ココノへ着くまでの三日間シェリスの手厚い看護を受けるのであった。

ココノへ着いた頃には、シェリスの手当てのおかげか、アッドの腕も幾分回復しており、包帯の上にまで血が滲み出るようなことはなくなっていた。エルフの回復量とはすごいものだとシェリスは驚いていた。
「ここが、ココノ村です」
ココノ村は穏やかな雰囲気に包まれていた。辺りには木々が茂り、小鳥のさえずりも聞こえる。魔王軍が侵攻しているという事実を忘れそうになるほど平和であった。
「……平和だな、ここは」
「はい」

アッドの呟きに、シェリスは満面の笑みで答えた。
占い師の家は、村の奥にあるというシェリスに従って歩いていると、アッドの気を引くものがあった。いや、いたと言うべきか。
「……シェリス、あれは？」
そう言ってアッドが指を指したのは、馬小屋の一角、他の馬たちとは一回り大きく仕切られた場所にいる赤毛の馬であった。割り当てられた場所に相応した大きな馬体、その気性は荒そうで、遠めに見ても、いきり立っているのが伺えた。
「あれは、レッドチャリオットという名前の馬ですよ。実は、私の家があそこなんですけど、昔有名だった祖父が乗っていた馬らしいんですが、祖父が亡くなってからは、家族の者ですら懐かない荒くれものなんです」
そうシェリスは説明し、先を急いだ。
「……レッドチャリオット」
そうアッドは呟きながらシェリスの後を追った。
その後ろで、アッドの呟きが聞こえたかのように首をもたげるレッドチャリオットの姿には気づかずに。
「アッドさん、ここが占い師、マーヤの家ですよ」
「……」

アッドが案内された家は、それは年季の入った造りといった趣の家であった。おそらく、柱に拳の一発でも叩き込めば崩れ落ちるであろう。アッドはそう思った。
「グランマ、お客さんよ！」
シェリスは、怪訝な表情をしているアッドの隣で、中のマーヤのことを呼んだ。
しばしの沈黙の後、扉がひとりでに開く。
「アッドさん、入っていいみたいよ。じゃあ頑張ってね」
シェリスはそう言うと、一歩後ずさった。
「……あぁ」
アッドは少し引きつった笑みを浮かべながら中へと入っていった。

「よくきたね」
アッドが中に入って聞いたのは、朗々たる女性の声であった。
「……占い師マーヤさんか？」
アッドはその声に訝しげに問いかけた。
「グランマと呼んでおくれ。そうさ、私がマーヤさ。ともかくもっと奥へきなされ」
そう促されてアッドはさらに奥へと進む。
すると、急に開けたところに出る。
「ようこそ、お若いの」

アッドの目に映ったのは、声とは対応していない、それは占い師の老婆と言ったいでたちの女だった。
「……グランマ、この度お伺いしたのは……」
「いいよ、言わなくても。それが占い師ってもんさ、本物のね」
そうグランマは昔は茶目っ気があったのだろうという笑顔を浮かべた。
「そこへすわんな。すぐに観てやるから」
アッドに席を進め、グランマは自分の前にある水晶球に両手をかざし出した。
「……」
ぶつぶつと呪文のような詞が流れる中、アッドはじっとグランマを眺めていた。
それから十五分ほどが経ち、グランマが覗き込んだ水晶球から顔を上げた。
アッドは十五分の間に、グランマの感嘆や驚嘆の呟きを聞くうちに少し集中が切れ、部屋の中を見回していた。
「さてと、あんたの結果が出たよ」
「……それで」
「先に言っとくよ。占いってのは不安定なもんさ。それほど詳しい事はわからないし、正悪もわからない。ただ、あんたが取るべき道を観てやるだけさ」
「……」
グランマの前置きに黙ってうなずくアッド。

「じゃあ言うね、あんたのこれから進むべき道を」
グランマの周囲に緊張の気配が漂う。
「あんたの進む道。それは三つ、そのうちのどれでも、あんたの運命には影響を及ぼす。まずは、このまま北西に向かう。その道にはあんたの唯一の願いが待っている」
アッドはその言葉を聴き、それが何だか思い当たる気がした。それはアッドが唯一持つ本来の感情、魔王への憎悪。それが待っているとグランマは言うのだ。
「次は、このまま北へ向かう道。そこにはあんたを知っているものがいる」
グランマの言葉にアッドは驚愕の色を隠せなかった。自分を知らないアッドにとって、自分を知っているものの存在はあまりにもアッド自身を揺さぶった。
「最後は、南東。そこにはあんたを待つものがいる。三人ほどかね」
グランマの最後の言葉を聞いた瞬間に、アッドの中にあった驚嘆は弾けとんだ。
「……そうか」
「おや、嬉しそうだね？」
グランマは、アッドにそう声をかけた。先ほどまで硬かった表情が緩んだからであった。
「……そうかもしれないな」
アッドはそう返した。
「じゃあいく道は決まってるんだね」
「……はい、感謝しますグランマ」

そうグランマに告げ、アッドは退出していった。
アッドが退出してしばらくして、
「ヴェネルクス・ガルガンディ。その過酷な運命に潰されないことを私はこの世界に住まうものとして、そう祈るよ」
グランマは誰にともなくそう呟いた。

「どうでした？」
アッドが家を出てくると、すぐにシェリスの質問だった。
「なにかわかりました？」
「……あぁ、シェリスのおかげだ。向かうべき道を教えてもらった」
そういったアッドの表情は晴れ晴れとしたものであった。
「そうですか」
シェリスは少し悲しそうにそう言い、
「頑張ってくださいね、剣士様！」
そう元気に声をかけた。
「……それはやめてくれっと言ったろ？」
そう控えめに返し、アッドはシェリスに向き合った。
「……ありがとうシェリス。君のおかげで本当に助かったよ」

「やめてください、私の方こそ、アッドさんに命を助けられたんですから」
照れながらシェリスは言った。
「……そして、もうひとつ、頼みたいことがあるんだ」
「なんですか？」
シェリスは首をかしげながらそう答えた。
「……馬を譲って、いや貸してくれないか？」
「命の恩人のアッドさんの頼みですもの、喜んで」
アッドの申し出に、シェリスは即答で返したのだった。
「じゃあ、馬小屋に行きましょうか、父に話してみますね」
そういい、シェリスはアッドを先ほどの馬小屋まで連れて行き、アッドを待たせて、家の中に入っていった。
馬小屋は妙に静かで、アッドは違和感を感じる。
先ほど、遠めから見てもいきり立っていたレッドチャリオットが静かに、澄んだ目でアッドを見ていた。
「……」
アッドは黙ったままレッドチャリオットに近づき、その額に手をやった。
レッドチャリオットは、シェリスの言っていた荒くれものとは正反対の態度で、アッドの手を心地よさそうに受け入れていた。

「……アッドさんすごい」
撫でるのに夢中で、アッドはシェリスの声がかかるまで、シェリスが家を出てきたことに気がつかなかった。それほどまでに、アッドとレッドチャリオットの空間にはおっとりとしたものが流れていたのだった。
アッドが振り返ると、シェリスの後ろで、同じように驚嘆の表情を取っている男がいた。シェリスの父であろうことがすぐにわかる。やさしげな顔立ちの男であった。
「アッドさんとか言ったかな。シェリスの命の恩人で、馬を一頭貸して欲しいと……」
「はい、もしよければですが……」
軽い沈黙がその場を支配する。シェリスは二人を交互に眺めながらオロオロしていた。
そして、その沈黙を打ち砕く一声は、とても明るい陽気な声で発せられた。
「もちろんだ。一頭といわず、二頭でも三頭でもと言いたいところだ。だが、もうアッドさんは一頭決めちまったみたいだな。残念ながら、その馬、レッドチャリオットの脚にかなう馬は他にはいない」
「……いいんですか？祖父さんの形見なんじゃ……」
「いいって、いいって。確かに形見かもしれん。しかし、それよりも大事な思い出はちゃんとわし自身が持っておるさ」
「……ありがとう」
そういうシェリスの父に本当の人の優しさ、強さに触れたような気がするアッド。

そこに、
「正直、わしも手を焼いとったしな」
「もう、父さんたら」
三人の間に和やかな雰囲気が流れる。

しばらくたち、アッドの旅立ちの準備も終わり、
「本当にありがとう、もう感謝の意の他には抱けない」
そうホー親子にそう告げた。場所は村の入り口、アッドの横には、大きな赤毛の馬、レッドチャリオットが静かに立っていた。
「アッドさん、私もありがとう」
そうシェリスはいい、顔を俯かせた。
「こいつ、アッドさんが旅立つのが寂しいみ……」
そう言いかけた父のわき腹に、見事な肘撃ちが叩き込まれていた。
微かに笑い、アッドは、用意してあったマントを頭からすっぽりとかぶり、首の前でぴったりと合わせ、結びつけた。
そして、レッドチャリオットに静かに跨る。
「アッドさん……」
シェリスは泣きそうな顔でアッドを見上げる。

「泣かなくていい、シェリス。レッドチャリオットはシェリスたちに借りた馬なんだ。また会る時が来るさ」
そうアッドは呟き、シェリスの頭を撫でた。
「俺の使命が済んだら、またこの村を訪ねよう。そのときには、幸せなシェリスが見れることを期待してる。では」
そう言ってアッドはレッドチャリオットを走らせた。
レッドチャリオットはしなやかに駆け、あっという間にアッドを茂る森の向こうへとやったのだった。
シェリスは泣いていた。幸せな自分は、アッドと一緒ではないことを暗に示されたからかもしれなかった。また、アッドが会いに来ると言ってくれたうれし泣きかもしれなｋった。シェリス自身でも理解していなかっただろう。
しかし、彼女の心からは決して失われないものが今日できた。
シェリスの中の勇者。
その勇者がまた旅立つ、その瞬間の光景を、
彼女は色あせることのないものを胸に抱いたのだ。

25

ロア達が、ダルフェンディアを出発して三日目の夜。彼等はダルフェンディアとカーノスメルテの丁度真ん中に位置する辺りまで来ていた。道中、少し高い段差があるところに、浅い洞穴を見つけたロア達は、そこで休息をとることにした。

その洞窟は、以前何かの動物が住んでいたらしいが、今はどこかに越したのか、あるいは生涯を閉じたのかそこには何もいなかった。三日間、少しの休息と睡眠しかとっていなかった彼等は、そこでゆっくりと横になる……はずだった。だが、洞窟内ではちょっとした話し合いの場がもたれていたのである。

「やはりカーノスメルテに行くのは賛成できませんわね」

メルフィナが真剣な表情で言った。彼等は円を描くように腰掛け、その中心には蝋燭が一本立てられているだけである。そのせいか、メルフィナの表情に微妙に影ができ、真剣というよりももはや恐ろしいに近い形相になっていた。

「カーノスメルテにもあの虫達がいるかもしれませんし、それに、ダルフェンディアでエレイン様暗殺を狙った魔族も、すでに待ち伏せているかもしれません」

「それについては、私も同意見だ」
メルフィナの後に続いてライオネルが言う。
「俺は行くべきだと思うぜ」
「僕もそう思う」
ロアとネッコが立て続けに言う。そのままロアが続ける。
「とりあえず俺は、あったかい、うまい飯が食いたい。街にいかないと食えないじゃないか」
ロアのその言葉を聞いた一同が、一斉に溜め息をつく。
「それは置いといて、僕が街に行った方がいいと思う理由は三つ。一つはロアじゃないけど、やっぱりこのまま樹海に辿り着いても、全員疲労困憊だ。少し町で休息した方がいいと思う。二つ目は、樹海に入る前に、なんらかの準備が必要だと思うからだ。カーノスメルテは大きい街だし、樹海に一番近い街でもある。それなりに何か売っているはずだ。最後の三つ目は、やっぱりアッドがいるかもしれないってことだ。彼がカーノスメルテにいる可能性は高いと思う」
「ネッコ君の言う事はもっともだと思うが、自ら蟻地獄に足を踏み込もうとするのには、賛成できないな」
「魔族がいるって決まったわけじゃないだろう」
「いないとも限らん」
「魔族がいたら、僕が倒してやるよ」

ロア、ネッコ、ライオネルが交互に意見を交わす。
「ではこうしましょう。ここから少し北西に進んだところに小さな村があります。皆さんはそこに向かってください」
メルフィナが三人の中に割ってはいる。
「みんなって？」
「私は一人でカーノスメルテに向かいます。そこで樹海に入る準備と、アッドさんがいないかどうかを見てきますので」
「でも、メルフィナ一人では危険すぎませんか？」
エレインが心配そうに言う。
「私なら大丈夫です。エレイン様達をカーノスメルテに行かすわけにはいきませんし、ロア君やネッコさんにしても、リュネット達がカーノスメルテにいないとも限りませんので」
メルフィナがそう言うと、みなの間に沈黙の間が訪れる。
「わかりました。それでは、メルフィナに任せる事にしましょう」
エレインが沈黙を破る。その意見に、全員が頷く。
「では、樹海の少し手前にある、ホラのゲートに集合でいいですね？」

二日後、メルフィナはカーノスメルテに辿り着いた。ダルフェンディアを襲った虫たちはそこにはいなかったが、メルフィナは異様な気配を感じ取っていた。

（やはり何かいますね……。それに、この気配は以前何処かで……）
そんなことを感じながらも、メルフィナは慎重かつ迅速に準備を進めた。コンパス、解毒剤、保存の利く食料などを買い終わり、アッドを探そうと街を回っていた。
メルフィナが小さな路地に入った時、一人の老剣士と対峙した。二本の刀を腰に刺し、ゆっくりと歩みを進める剣士。
「ラウド……！」
思わず口にしてしまうメルフィナ。老剣士はメルフィナのその言葉に、歩みを止め、メルフィナをじっと睨んだ。
「ドラゴンか……」
ラウドがゆっくりと口を開く。メルフィナとラウドの周りを、重い空気が取り巻く。
「似ている……が、違うな。お前はカオスドラゴンではないな」
「パルミラ……」
「ほう、知っておるのか」
少し目の色を変えるラウド。そのまましばらく、二人は互いを睨み合う。
「十三使徒一の長寿、二刀のラウドがこのような所で何をしているのです？」
「お前のような小娘に話す事などない……と、言いたいところだが、我輩の事を知りながらも、逃げ出すどころか怯えもせずにいる勇気を買って、少しだけ話してやろう」
そう言いながら、ラウドはゆっくりと殺気を静める。

「我輩は今、人間どもや魔族たちになんの興味もない。ましてやドラゴンにもな。我輩は今、ボールス殿の命で動いておるのだ」
「ボールス……興味がないとはどういうことです？」
「現在魔界では、新魔王誕生や、旧魔王復活などで騒いでおるが、そう言ったことはどうでも良いといいことだ。わからぬか？時代は新しい波を迎えようとしているのだ」
「新しい……波ですって？」
「ボールス殿が近いうちにそれを証明してくれよう。さぁ、時間だ。そこを退けい小娘！」
そう言うと、ラウドから凄まじい闘気が放たれる。慌てて後ろへ飛びのくメルフィナ。メルフィナが地面に着地し、もう一度ラウドの方を見ると、そこにはすでにラウドの姿はなかった。
（ボールスの命……という事は、ラウドもエレイン様を狙っていることになりますね）
メルフィナは、じっとラウドがいた方を見つめている。
「パルミラ……あなたは彼に勝てますか……？」
誰に言うでもなく、メルフィナはぽつりとそう呟いた。

26

ほぼ壊滅状態にあるノーススターナイツ・ペルセン方面隊の砦。そこへ向かって、総勢数百にも及ぶモンスターの軍勢が今まさに攻め入ろうとしていた。

一人の老兵士が城門に立ち、その圧巻たる光景を眺めている。指揮官、オートニー将軍である。オートニー将軍が長い溜息をつき、ゆっくりと後ろを振り返ると、そこには長きに渡る戦いに傷ついた兵士達が、尚も自らの責務を果たさんと整列する姿があった。あるものは死に、あるものは絶望の前に逃亡し、総勢数千名はいたはずの栄えあるノーススターナイツ・ペルセン隊が、残すところここに整列するわずか九名のみに成り果てていた。

「前方には数百の魔物の軍勢、こちらはわしを入れてやっと九名……おまけに援軍の見込み無し」

オートニーが呟くと、苦悶の表情をうかべる兵士達。

「……もはや、これまでか」

オートニーの言葉を遮るように、一人の兵士が前に出る。

「終わりではありません。このままでは……死んでいった同士に顔向けできません！」

「そうですとも！　オートニー将軍、いまこそ最後の特攻をかける時です」
同じくまた一人、オートリーに向かって声をあげた。その言葉を聞き、オートニーは白い顎鬚をさすり、眉間に皺を寄せる。
ノーススターナイツは、パッセ、ペルセン、サンダルークの三国の多国籍軍であり、様々な人種が混在している。見かけ上は来る魔物の進撃に備え、人間たちが力を合わせる連合軍という触れまわしであったが、実際は三つの国同士の中立を保つために体面を取り繕った、いわば仲良しのフリをするために設けられた政策上の軍隊であった。しかしそんな贋物の軍隊に本気で力を注ごうという国は無く、揃うのは正規の訓練もまともに受けていない新米兵や、脱走兵、思想上の問題などで罰として送りこまれてきた兵ばかりで、統率力は無く、数に見合うだけの実力を伴っているとは言えなかった。しかしその程度の軍力で、魔王復活の噂と同時に士気を盛り上げた魔王軍をここまで持ちこたえたのは、あるいは奇跡というべき偉業だったのかもしれない。それは、歴戦の勇士オートリー将軍の采配と統率力の賜物であったのだろう。
オートリーはゆっくりと八名の兵隊を見回していく。
「諸君らは……このノーススターナイツが三国同盟のための生贄だと思うかね」
老将軍の言葉に、思わず苦々しい表情を浮かべる兵士達。オートリーは続ける。
「世間の評判がどうかは知らないが……私はこの軍団に一つの可能性を見つけた。水と油を混ぜ合わせたようなぎこちの無い軍隊が、魔物という共通の敵を前に国や人種を超えた本当の団結を見せた……これは誇るべきことだ」

お互いの顔を見合わせるパッセ、ペルセン、サンダルークの勇士たち。
「君たちのような部下を持ってここまで戦うことができたこのオートリー、それだけで身に余る光栄だよ……また、君たちの誇りはこんなところで失うべきではない」
「将軍……！」
「……引き返そう。苦渋を舐めて生きる勇気をもつんだ。生きていれば、無謀な特攻などではなく本当の意味での敵を討つチャンスだって、かならず巡ってくる」
「しかし将軍……」
「我々はもうすでに果てる覚悟なのです」
死に急ごうとする若者達をじろりと睨みつけるオートリー。兵士達は自らの軽々しさを恥じたが、それでも決意は変わらなかった。半ば国に見捨てられ、いまさら帰る所も無い。帰ったところで待っているのは、魔物を食い止められなかった責任と、苛む人々の目。それならいっそ同士と同じくして誇り高く死ぬべきだ……オートリーの部下たちは皆そう考えていた。
なんとか彼らを救ってやりたい……そんなオートリーの思いも虚しく、運命の時は残酷に訪れてしまう。
「……はっ、あれは！」
兵士達の顔つきが一斉に変わるのを見て、オートリーは振り返る。砂漠の丘にひしめき合い、まるで波打つ絨毯のような魔物の軍勢は、もはや目と鼻の先まできていたのだった。
「……どうやら、遅すぎたようだな」

オートリーは諦めたように、ゆっくりと腰の剣を引き抜いた。残りの兵士も続いて剣をとる。
「いえ、将軍。これでよかったんです。死して初めて果たせる誇りもあります」
「そうです、そのとおりですよ！」
「魔物ども、ノーススターナイツの意地を見せてやる！」
兵士同士の活気付けを、オートリーは寂しげな顔できいていた。
（死して初めて果たせる誇り……か。そんなものがいったい、なんになると言うのだ……）
刻一刻と迫り来る魔物の軍勢は、にじり寄るように進軍し、やがて砦のわずか数歩を隔てたところにまで辿り着いた。ノーススターナイツの誰もが自らの死を覚悟したその瞬間、魔物軍は突然足を止める。
「と、とまれ、とまれーい！」
将軍らしきモンスターが叫び声をあげる。その怯えた視線は、オートリーたちのはるか後方に向けられていた。
その真に迫った剣幕につられて振り返るノーススターナイツの兵士達。
「……あ、あれは！」
その目に映ったのは、総勢一万名のペルセンの兵隊……王子ヤクシャ率いる魔王討伐の大行進であった。
「まさか……！」
オートリーは自分の正気を疑った。助けを乞うあまりに見えた幻覚であろうか？

「……者ども、ノーススターナイツの生き残りか？よく生きていたな」
ヤクシャの凛としたよく通る声が、はるか遠方からオートリーに向かって放たれた。オートリーは初めて、この光景が現実のものだと知る。
「ご苦労だった、もう自国へと帰っても良いぞ。魔物は我が軍が片付けよう」
進軍の号令とともに、地鳴りのように響く軍靴の音。オートリーは神に深く感謝した。
「ひ、ひけーい！　ひけひけーい！」
慌てて後退し始める魔物軍。しかし、慌ててまったく指揮系統のとれていない魔物軍を、数時間後にはまるで押しつぶすかのようにヤクシャの軍勢が殲滅した。
かくして、オートリー達ノーススターナイツ・ペルセン方面の生き残りはかろうじてその命運を繋ぎ、ヤクシャ率いる魔物討伐の大部隊はついに、魔界へと突入していったのである。
――ペルセン最北の地であり、魔界最南の地、黒砂の砂漠。
そのはるか上空で、総勢一万の兵士が織り成す大部隊を眺める一匹の悪魔がいた。リリパットという名の一匹の使い魔である。茶色の髪に少し浅黒い肌、紅潮した頬。一見、まったく普通の人間の少年のような容姿をしているが、コウモリのような黒い翼を使って広大な砂漠の上空に浮かんでいる姿は、悪魔以外の何者でもない。
「す、すっげえ数のゴミ人間どもがわんさかと……」
ぽかんと口を開けて目の前の光景に見入っていたリリパットだが、やがて気を取り直して自らの責務を思い出した。

「ヴァ、ヴァジュラに報告しないと！」
言うや否や恐ろしい速度で自らの主の元へと飛んでいく。風を切り裂く音とともにあっという間に地平線へと少年は消えていった。

――使徒ヴァジュラの住処、羅漢洞。
羅漢洞と呼ばれる洞穴で座禅を組み、静かに瞑想をする使徒、ヴァジュラ。炎のように逆立った髪に屈強な体付きはまるで仁王を想像させるが、その顔は怒りというよりももっと静かで深い“飢え”に満ちていた。
ヴァジュラは、ただ強さと戦いのみを求める一心で使徒と成り果てた格闘家である。長い年月をただ無意義、無差別（自分の配下のモンスターだろうが強ければ関係無く）に殺戮を繰り返していた彼であったが、ここ数年は近く起こりうる大戦乱を予期して殊更自らの修行に励んでいた。魔王の復活が噂され、人間との戦いはもちろんのこと、どうも使徒同士にも意見の食い違いと対立が起こりつつあるらしい。そうなれば、使徒と使徒との戦いも起こりうる。最高とも言える獲物の巡りあわせに、ヴァジュラは静かな、しかし燃え滾るような興奮に自らを押さえていた。
と、その時。羅漢洞の入り口から覗く空から小さな点のようなものが迫ってきたと思いきや、ものすごい風圧を伴ってそれは飛び込んできた。使い魔リリパットである。
「はぁ、はぁ……に……人間だ！ ヴァジュラ、人間がやってきたぜ！」

息を切れ切れに自らの主人に報告するリリパット。思わず面食らったヴァジュラだったが、それは人間が来たという事実よりもリリパットの剣幕に対してである。
「……人間って……黒砂の砂漠にか？」
「ったりめーだろぉが！　でなきゃどうしてお前に報告すんだよ！」
声を荒げるリリパット。その態度には主従関係という言葉がまるで虚しい。
「……リリパット、あのなぁ、一応お前は俺の使い魔だぞ……？」
リリパットは「知ったことか」とでも言わんばかりに、どしんと胡座をかいて腕を組む。もはや諦めているのか、ヴァジュラは溜息を一つついて深くは追求しなかった。
「で、人間って？四人か？十人か？どっかの騎士団か、それとも例のキャメロンで集められた勇者きどりの連中か？」
「い、いや、そんなんじゃないって。とんでもない数なんだ。多分、千とか二千とかじゃねぇよ。一万ぐらいいたんじゃないかな……？ほら、あの砂漠の国の……ペルセンだっけ？あそこの連中が、きっと総力あげて進軍してきやがったんだ！」
リリパットの話を聞くにつれ、ヴァジュラの瞳に残虐さが宿る。飢えた狼の目つき。普段、彼に対して不遜な態度をとっているリリパットですら、この目には身震いを起こす。
「へえ、一万ね……いきなり御馳走じゃねーか。人間との戦いは始まったばかりなのに、さっそくそんなに喰らっちゃって良いのかね？」
「い、良いも悪いもねーだろ！　ここの管轄はお前だって、モードレッドに言われてるんだ

ろ？……で、こっちは何匹ぐらい連れてくんだ？一万か？二万か？トロロークならたっぷり繁殖済みだぜ。ただ、数は集めることができても時間がかかるな。なにしろ火急の……」
組んでいた足を崩し、黙って立ち上がるヴァジュラ。拳にゆっくりとバンテージを巻きはじめる。その怠慢な動きに、リリパットはもどかしそうに立ち上がる。
「……ヴァジュラ、のんきしてたらまたモードレッドのおっさんがうるせえぞっ。何匹連れてくんだ？なんならデーモンや上級モンスターの要請しとくか？」
「……いや、俺一人で十分だ」
一瞬、ヴァジュラの言った言葉の意味がわからず、唖然とするリリパット。
「……あのなぁ。いまは冗談言ってる時じゃ……」
しかし、ヴァジュラはリリパットの言葉にまったく取り合う様子が無い。
「じゃあ、ちょっといってくるから、留守番頼んだぞ。退屈だったらトロロークだろうがなんだろうが勝手に集めてくればいい。もっとも、部隊集めたころには人間どもはみんな死んでるだろうけどな。へへ」
「へへっ、て……お、おい、ヴァジュ……」
「あばよ」
爆発音のような轟音をたてて床を踏み割り、羅漢洞を飛び出すヴァジュラ。リリパットはまたもぽかんと口をあけたまま放心していた。
やがてそんなことをしている場合ではないと気づき、慌ててモンスター達の招集をかけ、魔

物の大部隊を結成した。

一方、ネッコ、ロア、メルフィナ、エレイン、ライオネルの五人は、無事だと分かったカーノスメルテに到着していた。さっそく宿を借りて昼食を済ませ、一行は町の散策に出ている。

「うーん、潮の香りがするなぁ」

腹もふくれてご機嫌のロアが、満悦そうに言った。

「海が近いですからね。何と言ってもここはレオデグランス最大の港町ですから。特に隣国サンダルークとの交易には欠かせない町……でしたね？ライオネル」

エレインが地理の授業に習った知識を、ライオネルに確認する。

「その通りですエレイン様。しかし……魔王軍が隆盛になってからは、海が危険になってあまり遠くまで船がだせず、国同士の交易はパッタリと止まってしまっています」

ライオネルの言葉に、メルフィナが続ける。

「私たちも海路を絶たれたためにこうして遠路はるばる大陸を歩いているのですから、やっかいな魔物ですわ」

「……どうしたネッコ。なにか探してるのか？」

落ち着かない様子で辺りをきょろきょろと見回すネッコを見て、ロアが訊ねた。

「え？いや、別に」

そう言いつつも、やはり忙しく周りを見渡している。どう見てもなにかを探しているようにしか見えなかった。
「悪い、ちょっと用事。宿でな」
ネッコはそう言い残すと人ごみを掻き分け、そそくさと何処かへ去って行った。
ロアとメルフィナが顔を見合わせる。
「……怪しい」

エレインをライオネルに任せ、ロアとメルフィナはネッコを追いかけた。ネッコは途中、何度も後ろを振り返って誰もついてきていないか確認していたが、自分を追いかける二人の存在に気がつく様子はまったくなかった。
「うーん、さすが俺たち。完全尾行だ。スパイに向いてるかもな」
（……というか、ネッコが気づかなさ過ぎのような気が……）
やがてネッコは裏路地に入った。ひしめき合っていた人ごみもまばらになり、やがて一般人の姿は無くなって、冒険者や盗賊、海賊風の男、怪しげな商人たちの姿が目立ってきた。
「なんか、どんどん物騒なところに入っていくぞ」
倉庫のような建物の裏口に、屈強な男が立っていた。ネッコがその男に話し掛け、なにかを渡す仕草をすると、そのまま中に入っていく。
「ここは……？ネッコはいったいなにを渡したんでしょう？」

訝しげに建物を眺めるメルフィナ。
「……あー、俺、なんとなく分かってきた。メルフィナ、俺たちも入ってみるか？」
ロアは隣のメルフィナに訊ねた。メルフィナは多少不安そうな様子だ。
「入るって……この倉庫に？大丈夫ですか？」
「確かめないと気になるだろ」
「それは……しかし……」
「ほら、行こーぜ」
どうも乗り気でないメルフィナを半ば強制的に引っ張っていくロア。倉庫の裏口にたどり着くと、門番の男がじろりと二人を睨んだ。
（この人、絶対カタギじゃない……）
メルフィナは思った。
「おい、こん中に入りたいんだけど」
ぶっきらぼうに訊ねるロア。しかし、男はメルフィナの方を疎ましく睨みつける。
（……私、ここにいるとなにかマズイのかしら？）
（ちっ。ここに司祭はまずかったかな）
「……こいつは大丈夫だ。入れてくんな」
ロアがそう言っても男はなかなか気を許さなかった。
「さ、いいだろ。入れてくれ。いくらだ？」

「……二人で一万ギルだ」
男はロアに強引に詰め寄られ、しぶしぶ答える。
「よし、一万だな。メルフィナ、もってるだろ？」
「え！　私が払うんですか？」
「ちょっとの間だけ立て替えといてくれよ。帰ったらすぐ返すから」
絶対返さないな、と思いつつも、ここまできて後にはひけないメルフィナはしぶしぶ一万ギルを男に払った。財布の軽くなる感触に、言い知れぬ寂しさを覚える。

倉庫の中は、巨大な市場だった。しかし、ただの市場ではない。そこに並ぶのは闇ルートから流れてきた本来ならありえない安さの武器防具、また、法律で禁止されているアイテム、麻薬、奴隷などが店頭に並んでいる。昼間というのに窓は締め切っており、薄暗いランプの明かりが只ならぬ雰囲気の空間を作っていた。
「これって……」
呆気にとられるメルフィナ。
「ブラックマーケットさ。俺もよく盗んだ宝物をこういう場所で捌くから、ピンときたぜ」
ロアはきょろきょろと辺りを見回すと、赤い宝石のようなものを荷台一杯につんだ店の前に見慣れた青年を発見した。まさしく、ネッコ当人である。
「いたいた」

ネッコは宝石を一つ摘んでは、ランプの光に照らして鑑賞し、気に入らない様子で別のをとる。ロアがその背後へそっと忍び寄る。
「おいこら犯罪者」
「うわ！」
ネッコが手にとっていた宝石を驚いて落っことすと、ネッコを含め、周りの客や店のオヤジたちが一斉に身を屈める。
「……なんだ？」
びくびくする連中を不思議そうに眺めるロア。やがて荷台の宝石の一つを手にとると、納得した様子だった。
「おお、魔石じゃねーか」
「魔石って……あの魔法放射線を発する魔石ですか？」
メルフィナが訊ねる。屈んでいたネッコは怒りに震えて立ち上がった。
「そうだよ！　魔石だよ！　あの魔力の無い者にでも簡単に爆発が起こせる世界一デリケートな石でそれこそガラスの芸術作品や生理中の女なんかよりもずっとデリケートに扱わなきゃいけないあの魔石だよ！　おどろかせやがって！　バカ野郎！」
ネッコがロアを怒鳴りつける。周りの客たちは魔石を落として自分たちの命を危険に晒したネッコ達を睨んでいた。
「はっはっは！　悪い悪い。こんなところでもし一つ爆発したら、誘発してとんでもないこと

になるよな」
「……笑い事じゃないぞ、おい」
「……ええ、確かに笑い事じゃありませんね」
メルフィナが深刻な顔で呟くように言った。
「魔石といえば、人体に悪影響を及ぼす魔法放射線を放つ自然石。個人の所持は国際協定で厳重に禁止されているはずです」
「ここはそういうものばっかり扱う場所さ。それに、人体に悪影響を及ぼすのは純度が九十％を超えた、濃縮魔石の話だ。これは大丈夫だよ」
ネッコが事も無げに言う。
「大丈夫って……しかし、犯罪ですよ！？」
「ちっ……ったく、やっぱ司祭さんなんて連れてくるんじゃなかったな」
めんどくさそうに頭をかいて、ロアは続けた。
「メルフィナさんよ、条約も法律もクソも無い連中が人間界に攻めて来ようとしてるご時世だぜ？おおめに見てくれよ。それともなんだ、あんたの言う法律が魔物から人間を救ってくれるのかい？」
にらみ合うメルフィナとロア。
「法は、神の定められた道徳観から生まれたものです。それを破って人間としての尊厳を失っては魔物となにも変わりありません」

「……やれやれ。ぬくぬく育ちの司祭様には尊厳もクソもない極限状態ってのがわからねーんだろうな」
「知った上でなお守り抜いてこその尊厳です！」
「だから、クソ法律だかクソ尊厳だかがどうしたってんだ！　へっ、いまどき犬のエサにもなりゃしねえってんだ」
「少しは言葉を慎んではどうなんです！」
火花が散るようなやり取りを二人が行っている間、ネッコは魔石の鑑賞を続けていた。
「うーん、やっぱりこっちとこっちとこっちだな。オヤジ、三つで幾らかな？」
「三千ギルだ。くれぐれも取り扱いには注意しなよ。さっきみたいに落として爆発しても、責任はとれんからな」
商品を受け取ると、ネッコは大事そうにそれを腰の巾着袋にしまう。
「よし、あとは古文書と特殊アイテムと、それにいいかげん新しい杖も……」
ふと、ネッコは隣の客からただならぬ雰囲気を感じ取り、言葉を詰まらせる。それは以前どこかで味わった感覚であった。デーモンと人間の気が歪に交じり合った、禍々しいオーラ……。
（これは……ナハルの自然公園で出くわした……禁術の娘と同じ……！）
振り向くと、そこにいたのは一人の男と一人の少女であった。男は四十か五十がらみの中年の魔法使いで、首から下をすっぽりと黒いローブで覆っていた。その憎しみに満ち満ちた蛇のような目つきに、そして体中からかもし出される魔法使いとしての破格の力量に、ネッコは思

わず足がすくんだ。
（こいつ、とんでもない力をもっている……なにものだ？）
「……！」
隣にいた少女が、ネッコの顔を見て驚いた。男に圧倒され、しばらくの間そちらに気をとられていたネッコも、あからさまな驚嘆の表情を浮かべる彼女の存在にようやく気が付いた。
「む……君はやはり自然公園の」
それは、ナハルで出会った、目に禁術を施された例の少女だった。フードは取っていたものの、さすがに赤い瞳が目立つとまずいのか、片目を布で覆って隠している。男はネッコをちらりと見ると、少女に訊ねた。
「……知っているのか？」
少女は返事をせず、ただ黙って首を横に振った。腑に落ちないネッコ。
「そんなはずはない。僕とナハルであっただろう？」
しかし、少女はネッコのことなどついぞ知らぬような顔をしている。
（人違い……か？しかし、それにしては……こんな分かり安すぎる子を忘れるはずは……）
「ナハルにいたおっさんじゃねーか」
ロアが素っ頓狂な声をあげ、ネッコは慌ててそちらを振り向く。
「な、なんだって？」
「このおっさんと一度ナハルで会ったんだよ。デーモンでも人間でもない、ただならぬ気配を

感じたんだが……今思うとこの間お前が話してた禁術ってやつだろ？まったく、馬鹿げた力を秘めてやがるな」
うっとおしそうな顔をする禁術の男。本人にとっては、あまり大っぴらにしてほしくない事情である。
「……行くぞ」
男が少女を促して、その場を立ち去ろうとしたその時だった。
「ん？横の女の子からも似たような気配を感じるな……ネッコ、ひょっとしてお前がナハルで会ったっていうのは……」
男はぴたりと足を止めてロアとネッコの方を振り向く。
「……いま、何と言った？」
「ん？……おっと、こういうことはあんまり公言しない方がいいのかな。悪いね、おっさん」
「違う。隣の魔法使いの名だ」
男はネッコの方を向いて改めて訊ねた。
「貴様、名をなんと言う？」
気を許せばたちまち飲み込まれてしまいそうな気迫に圧されながらも、ネッコは精一杯に虚勢を張り、自らの名前を答えた。
「……ネッコ・マズルカ・ヴァンシュタインだ。僕になにか用か？」
「……っ」

その時、あからさまに少女が顔をしかめるのを、ネッコは見た。……なにか名乗るとまずいことでもあるのだろうか？不思議に思ったネッコだったが、そんな疑問は次に男が発した言葉を聞いた瞬間、どこへやらと吹き飛んだ。
「私の名はゼム・ロックだ。ルドヴィヒの孫よ」
突然現れた祖父の宿敵を前に、ネッコは驚愕した。
「ゼム……ゼムだって！？」
咄嗟に身構え、先ほど購入したばかりの魔石をぎゅっと握り締めるネッコ。
途端に張り詰める空気。ロアとメルフィナはもとより、周りの客もその只ならぬ雰囲気に注視し始める。
「……早まるんじゃない、ルドヴィヒの孫よ。こんなところでそんな物騒なものを爆発させて、いったいどうするつもりだ？」
取り乱したネッコには周りの客など眼中に入っていなかった。ゼムの言葉を聞き、ようやく魔法使い同士が戦うには到底不向きな場所であると気づき、握り締めていた魔石を手放す。
「……ゼム、外に出ろ！」
「貴様が私に恨みをもつ気持ちはわかるが……生憎、私の方から君にはさらさら興味が無いのでね」
ルドヴィヒは嘲るようにそう言い放つと、さっと踵を返した。
「なに……？」

ゆっくりと、その場を離れていくゼム。少女はちらりとネッコの方を振り返ると、そのままゼムのあとについて行った。
「ま、待て、ゼム！」
「待たぬよ。どうしても相手をしてほしければ、ほら、いつでも背後から襲いかかってくるといい。もっとも、我が身が可愛ければよした方が良いだろうが……ふふ……」
静かにネッコのもとを離れていくゼム。ネッコは自分に言い聞かせる。どうして奴を追わないんだ？祖父の宿敵を討ち取るチャンスじゃないか！　……しかし、彼の足はまるでさび付いたかのようにその一歩を踏み出せなかった。
（畜生、なんだってゼムの奴が目の前に……それもこちらに背を向けているのに……僕はこんなところでボサっと突っ立っているんだ！　事なきを得て、あいつが去って行く姿を見て、僕は安心しているのか？情けない、情けないぞネッコ！　それでも男か！？　……行くんだ、あいつを討ち取るだけの力が、僕にはきっとある。いや、あるはずだ！　僕は誰の孫だ？あいつを討ち取って、父さんやじいさんに認めてもらうんだ、畜生！）
およそやけっぱちの感情がようやく一歩を踏み出させようとしたそのとき、彼を制止するものが一人。司祭、メルフィナである。
「よしなさい、ネッコ」
メルフィナは険しい表情で言った。
「あれは人の敵う相手ではないわ」

「うっがーー！」
宿の自室につくなり、椅子を持ち上げて床に叩きつけるネッコ。たまたま部屋の前を通りかかったライオネルが、慌てて中を覗きこむ。
「何事だ？」
ネッコはライオネルに気づいてか気づかないでか、もう一度、椅子を持ち上げて床に叩きつけた。椅子は不規則に跳ね返って、ライオネルの足元に転がっていく。
「おっと……やめないか、ネッコ君！」
「人を散々コケにしやがって、畜生め！」
「どうしたというのだ？落ち着きたまえ」
しばらく肩で激しい息をしていたネッコだったが、やがてライオネルの方を振り返ると、どっさりとその場に座り込んだ。
「ライオネル、僕は宿敵を前に逃げ出したんだ。背を向けて立ち去る相手を、止めようともしなかった……！」
悔しさに俯くネッコを、黙って見ているライオネル。
「……次に会ったときは、この命を金繰り捨ててでもやってやる……そうさ、僕は大魔法使いルドヴィヒの孫だ。敵前逃亡なんて、僕の誇りが許さない」

ネッコはじっと俯き、悔しさに耐えていた。その様子を静かに眺めるライオネルは、ただただ無表情に見える。
「……昔、私も一山幾らの兵隊だったとき、そうやって死に行く同士を何人も見てきたよ」
ライオネルが語りかける。
「しかし私は……そんな同士を尻目に、何度も生き恥を晒して、ようやくここに立っている」
ネッコは不思議そうに顔をあげた。
「恥ずかしくはないのか？」
その言葉は、決して侮蔑を含んだものではなく、いたって純粋な疑問から発せられた言葉だった。ライオネルは目を伏せ、かすかに笑った。それは自嘲的でもあるし、ネッコのほほえましい若さに対するものにも見えた。
「ライオネルー、どこへ行ったのです、ライオネル！？」
開け放たれたドア越しに、上階のスイートルームから階段を下りてこちらへやってくるエレインが見えた。床に座り込んだ無様な姿を見せまいと、慌てて立ち上がるネッコ。
「あら、こちらへいらしたのですか。ごきげんよう、ネッコ。ところでライオネル、日が暮れるまでに一つ剣の稽古をつけて下さいませんか？」
ライオネルは黙ったまま、エレインにゆっくりとおじぎをする。彼の改まった態度に、エレインはきょとんとした表情を見せた。
「たった一人のちっぽけな死などでは、到底守りきれないものもある。いまの君には、それが

おありかな？」
「……」
「君が守りたいのは、しょせん自分自身だ。それはあまりに孤独だとは思わないかね？」
ライオネルは優しい口調だったが、それはまるで氷水のようにネッコの頭上へ降り注いだ。
「……違うかな？」
状況が今一つ飲み込めないエレインは、黙ったままの二人の顔をかわるがわる見つめていたが、やがて不満そうに言葉を放った。
「……もう、ライオネルったら！　誰彼かまわずに説教をするのはいい加減お止めになさったら？」
「はは、これは、痛み入るご忠告。ですがエレイン様、剣の稽古をつけろというその向上心はご立派でございますが、淑女が口にする言葉ではありませんな」
「ほら、また始まった！　あなたはなんでもかんでもそうやってすぐに説教に繋げようと……」
ばたん、という乾いた音とともにドアが閉まる。ライオネルとエレインが立ち去り、何も無い静かな部屋にぽつんと取り残されたネッコ。ドアの前に無様に転がる椅子が、余計に侘しい感情を彼に与えた。

メレアガンスは黒馬をに乗って魔界の大地を駆けていた。信じられない速さで黒馬は走っている。すごいスピードで周りの景色が変わっていった。やがて壮大な砦が見えてきた。魔王軍の居城の一つ、アストラト城だ。メレアガンスの馬が近づいていくと、巨大な砦の門が開いていく。メレアガンスが砦内に入ると数千の魔物が隊列をなしていた。メレアガンスに気づいた魔物達が歓声を上げる。幾千もの咆哮が大地を揺るがすように魔界の空に響いた。それを見たメレアガンスは顔をしかめてそのまま通り過ぎた。黒馬を降り、城内に入っていくメレアガンス。城内は血臭と殺気に満ちていた。至る所で兵士が走り回り、何かを指示している。

メレアガンスはやがて一つの部屋にたどり着いた。扉を開け中に入る。部屋の中では一人の女性が兵士に何か命令をしていた。彼女は十三使徒の一人、トゥオン。黒く長い髪に真っ赤な瞳、軽装の鎧を身に纏っているが何より目立つのは、手に持った彼女の身の丈をも越える巨大な鎌だ。まさに死神といわれるトゥオンにふさわしい武器だ。

「すぐに先遣隊五千を向かわせろ。遠慮はいらん……おおメレアガンス、ちょうどいい時に帰ってきてくれたな。部下に探させいたところだ」

メレアガンスに気づいて、向き直るトゥオン。
「……悪いがトゥオンと二人で話したい。他の者は下がれ」
メレアガンスがそう言うと、部屋にいた兵士達はトゥオンとメレアガンスに頭を下げて部屋から出ていった。
「トゥオン、何があった？外の軍勢は何だ？」
「どうもこうもない。昨日、刺客に襲われた。魔族のな」
「おぬしがか？」
「ああ。かなりの腕の相手だったため、生かして捕まえることができず殺してしまった。だが、誰の差し金かはわかっている。モードレッドだ。暗殺とは相変わらず陰湿な奴だ。あっちがその気ならこちらも遠慮することはない、正面から攻め入って奴の息の根を止めてやる」
トゥオンとモードレッドの仲の悪さはもう数百年に及ぶ。魔王モートの生前はそれでもなんとか表立って争うことはなかったが、魔王モートの死後はあからさまに対立してそれぞれ軍を起こし、それが旧魔王軍と新生魔王軍と呼ばれている。
「だがモードレッドだという証拠は何もないのだろう？」
激昂しているトゥオンとは対照的に落ち着いて話すメレアガンス。
「他に誰がいるというのだ！」
「落ち着け。仮に暗殺の首謀者がモードレッドだとしても、それはおぬしを誘い出す挑発だ。易々とそんな策略に乗るな」

「しかし……」
「考えてみろ。今ここでモードレッドと全面戦争になどなっても勝ち目はないぞ。ただでさえ奴はこちらの数倍の軍を有しているのだからな。それに証拠もない不十分な名分では日和見していた他の十三使徒もモードレッド側につくだろう。なにしろ、モードレッドは副王という我々十三使徒の筆頭に当たる男なのだからな」
「……」
「今は自重しろ。偉大なるあのお方さえ復活なさればすべては収まる」
「……わかった。軍の出陣は取り止める」
トゥオンはしぶしぶ頷いた。
「そうしてくれ。十三使徒同士で争っても利はない。それとおぬしには一度魔王城を訪れて、正式にモードレッドに会って欲しいと思っている。人間が国を挙げて我々の魔界に攻めてこようとしている時に、これ以上互いに争っている場合ではない。魔界の二大勢力のトップが会えばそれで魔界の混乱は収まる」
「馬鹿な！　敵の居城に出向いていくなど罠に掛かりに行くようなものだ。モードレッドがどれだけ腹黒い奴かは、お前だってわかっているだろう。殺してくれと言っているようなものだぞ」
「私が側にいる。モードレッドが何を企んでいたとしても、十三使徒二人に手出しはできんだろう。モードレッドには私から話しておく」

トゥオンはそれを聞くと考え込んだ。やがて顔を上げて、
「……メレアガンス、お前の顔を立てて考えてはおくが期待はするな。だいたい奴の顔を見ただけで、私はキレて奴を斬り殺してしまいそうだ」
そう言ってトゥオンは巨大な鎌を軽々と振り回した。出陣を取り止めて鬱憤がたまっているのだろう。トゥオンの体中から切れるような殺気が発せられている。
「今日の用件はそれだけか？」
「ああ。これからすぐに会談の提案にモードレッドに会ってくる。私の愛馬なら魔王城まで飛ばせば数時間で着くからな」
「モードレッドには気をつけろ。あの男だけは油断ならないからな。口ではなんと言っていても腹の中では何を考えてるかわからん奴だ」
トゥオンが言った。
「心配無用だ。私は『不死の騎士』メレアガンスだぞ。そう簡単に死ぬような男ではないことは君が一番知っているはず」
メレアガンスはそういうとトゥオンと別れ、再び黒馬に乗って魔王城に向かった。
「ということなのだが、貴公にトゥオンと会う気はあるかな。立会人はこのメレアガンスが務めさせてもらう。言うまでもないことだが、たとえどちらであれ会談上でよからぬ事を企んだ場合、私が相手になる」

メレアガンスがモードレッドに言った。
「もちろん異存はない。トゥオン嬢が私に会いたいと言うなら、同じ十三使徒の同士として断る理由はないからな」
モードレッドが笑いながら言った。
「了解した。場所はこの魔王城でいいだろう。日取りは追って知らせる。それと……」
「何かな？」
「……先日、よからぬ事態が起こった。トゥオンが魔族の刺客に襲われたのだ」
そう言うとメレアガンスがじっとモードレッドの眼を見つめた。モードレッドは平然としている。
「そうか、それは心配だな。しかし、トゥオン嬢のことだ、傷一つ付かなかっただろう」
「ああ、彼女は無事だ。最も刺客は死んでしまって誰の差し金かわからなくなってしまったがな。念のために聞いておくが、貴公に刺客の心当たりはないかな？」
「あるわけがない。おおかた、どの勢力にも属さない魔界の異分子の単独犯行だろう。気にするほどのことではないと思うがな」
「おそらくはな。貴公に心当たりがないならそれでいい。では私はこれで……」
メレアガンスが部屋を出て行こうとするとモードレッドが呼び止めた。
「まあ、待ちたまえ。異存はないが、少し私に提案がある」
「……」

「珍しく私とトゥオン嬢が会うのだ。こんな機会は滅多にない。どうせなら久しぶりに十三使徒を全員召集してみてはどうかな？さしだめ、魔界首脳会議といったところか。私とトゥオン嬢が二人だけで会うより、そのほうがより現状の魔界の混乱を収められると思うが」
「悪くない提案だが、貴公は十三使徒全員の所在を把握しているのか？」
「もちろん全員の位置を把握しているわけではない。大戦で死んでしまった奴もいるしな。だが、何人かは知っている。呼び出すのに時間はかかるがな」
「……素直に来るとは思えんな。我々十三使徒には魔界の情勢になど興味の無い者も多い。偉大なるあのお方がいた頃は、それでもなんとか組織としてまとまってはいたがな」
「ボールスやヴァジュラの様な連中のことか？まあ、何とかするさ。アルアルパッゾの様な奴は問題外だがな。それには異存はないだろう？」
「アルアルパッゾか……あのような裏切り者、見つければ私が切り捨ててやるところだ」
「ふふふ、それを言えばボールスも怪しいものだがな」
「ボールス卿が？」
「私が小耳に挟んだ事だが、ラウドとつるんで何かよからぬ事を企んでいる様だな。何を企んでるか詳しくは知らないが……」
その時、部屋に一人の男が入ってきた。白髪をオールバックにして長身で体格のいい、漆黒のマントを纏った男だ。
「おやおや、久しぶりに旧友に会いに来てみればずいぶん悪口を言われているようだな」

白髪の男、ボールスがマントをなびかせ笑いながらゆっくりと歩いてくる。
「ボールスか。久しぶりだな」
「ああ、モードレッド。メレアガンスもここにいるとは意外だったが、君ともずいぶん久しぶりだな」
ボールスがメレアガンスに言う。メレアガンスは黙って会釈をする。
「ボールス、お前が自らここにくるなんてどういう風の吹き回しだ？」
モードレッドが言う。
「なにただの気まぐれさ。魔界の情勢もだいぶ混乱してきたようだし、一度君に会っておこうと思っただけだ。私は十三使徒同士の争いになど巻き込まれたくないからな」
「争いなど起きぬ」
メレアガンスが力強く言った。
「そうとも、私もトゥオン嬢もモート陛下をお慕いしているということでは同じなのだ。少し性格が合わないだけでね。そんな些細ないざこざは会えばすぐに消える」
モードレッドが笑って言った。本気で言っているようには思えない。
「だといいがな。まあ、いざという事になったら私はどちらにもつかないから、放っておいてほしいものだ」
そう言うとボールスはきびすを返して歩き出した。
「聞きたいことがあるのだが、ボールス卿」

メレアガンスがボールスを呼び止めた。
「何かな？」
「先ほどモードレッド殿から貴公がラウドと何か企んでいると聞いたが、それは真実か？」
「くだらん詮索だ。私が何をしようと君達には関係ないはず。モート陛下のいない今、副王モードレッドといえども私に命令はできない。十三使徒に命令できるのは偉大なる魔王モートその人だけのはずだからな」
「確かにな。しかし、それがモート陛下と魔界のためにならんとわかったら、私は貴公を殺さねばならん。そうならんことを祈るが」
そう言って、メレアガンスは剣の柄に手を当てた。ただそれだけの動作で、辺りの空気が一変する。
「ふふふ、怖い怖い。気をつけておこう」
ボールスは笑いながら、メレアガンスに背を向け立ち去った。
「さて、私もそろそろ行くか」
ボールスが部屋から出て行ったのみて、メレアガンスが言う。
「ふむ、他の十三使徒には私から招集をかけておく。もっとも会談が実現するとしてもずいぶん先になるだろうがな」
「わかった。では私はこれで」
メレアガンスはそう言ってモードレッドの部屋から出て行った。

「ルーテネ。ボールスが何を企んでいるか本当に知らないのか？」
メレアガンスが部屋から出て行ったのを確認して、モードレッドが言った。
「知りませんよー。あのオジサンをこっそり監視してますけど、いつもうまくまかれるんですよね」
部屋の調度品の陰から、ルーテネが現れた。ずっとそこに隠れていたようだ。
「エレイン姫の所在は？」
「それも調査中でーす。コピーを三百体動員してますが、なかなか見つかりませーん」
「……引き続き、そのまま操作を続行しろ」
「イエッサーです」
ルーテネはモードレッドに敬礼をして、部屋を出て行った。
「ふん……もう少し踊らしておくか」
独りきりになった部屋でモードレッドは呟いた。

魔王城の薄暗い廊下をボールスは歩いていた。
「メレアガンスがいたのは失敗だったな。あいつがいなければモードレッドの奴をけしかけてやるつもりだったのだが……」
ボールスが独り言をつぶやく。だがそれは独り言ではなかった。いつのまにか彼の横には幼い青髪の少女がいる。ルーテネだ。

「そうね。メレアガンスのおじさん、まさに『悪・即・斬』って感じで怖いもんね」
ルーテネが言った。
「私の見る限り、口ではなんと言おうとモードレッドの奴はトゥオンとの和平など考えてはいない。奴は頭がいいから私の考えていることを少しは推察しているだろうが、それでもトゥオンを殺せるなら私の策略にあえて乗ってくるだろう。トゥオンの小娘などは直情的で動かすのは簡単なのだが、メレアガンスが側にいる限りそう簡単にはいかないだろうな」
「私、トゥオン様きらいー。だってあの人、規律がどうのこうのってうるさいんだもん」
「新生魔王軍と旧魔王軍が激突して共倒れしてくれたら、私も少しは動きやすくなるんだがな。二度とかつてのモートの時代のように型苦しいのはごめんだ」
「でも今のままじゃ、間違いなくモードレッド様のほうが圧勝しちゃうよ。戦力差ありすぎてあんまり両者の戦力減少ってことにはならないんじゃないかな？」
「それは私とラウドがうまくトゥオンのほうを助けてやればいいのさ。あくまで裏からだがな」
「それにはメレアガンスのおじさんが邪魔？」
「そうだ。いっそ殺してしまうか」
「殺しちゃえ、殺しちゃえ。でも、ボールス様にできるー？メレアガンスのおじさんは物理的な戦闘能力だけなら十三使徒の中でも一、二を争うっていわれてる人だよ」
「私一人で真っ向から戦ったら、勝ち目は五〇パーセントあればいいところだろうな……だが

こちらにはラウドもいる。ラウドと私が不意を付けば間違いなく勝てる」
「トゥオン様が怒るだろうなぁ。あの人は魔界でナンバー二の軍も持ってるし、多勢に無勢でボールス様殺されちゃうよ？」
「だから、モードレッドのせいにしてしまえばいいのだ。それなら両者の激突は避けられん」
「アハハハ、そううまくいくかな？」
「まあ、どちらにしてもすべてはエレイン姫を手に入れてからだ」
　ボールスはそう言って薄気味悪く笑った。
「ルーテネ、君は賢い。モードレッドやトゥオンに義理立てしたところでいいことなどないからな。私についたのは正解だ」
「でもモードレッド様にばれたら私殺されるわ」
「ふふふ、誰も君を殺せない。殺しても殺してもいくらでもコピーがいるのだからな。君みたいな奴を本当の不死と言うのかもしれないな」
「ヒヒヒ、ボールス様だって吸血鬼だからほとんど不死みたいなものじゃない」
「私は仮そめの不死だよ。普通の人間より少しばかり死ににくいってだけでね。気の遠くなるような時間、私は錬金術によって不死を研究してきたが行き着いたものはこの程度のものだった。それを考えたら君を作ったヘンギストはうまくやったものだ。彼は私の友人にして最も身近なライバルだった。同じく不死を研究した者としてね」
「でもヘンギスト様は先の大戦で死んじゃったよ。いくら不死の研究がうまくいっても死ん

じゃったらおしまいだよねー」
「本当にヘンギストは死んだのかね？」
「さあ？勇者アトロに殺されたって聞いたけど？何でそんなこと聞くの？」
「……まあ、いいさ。それよりエレイン姫の監視を続けろ。モードレッドが彼女の命を狙っているようだが、殺されてしまわんようにな」
「はい、はーい。わかってまーす」
「私は居城に戻る。まだエレインにやられた傷が完全に治ってないからな。何か動きがあったら連絡しろ」
そういうとボールスは霧のように消えてしまった。
「アハハハ、私って忙しいな。モードレッド様にはいい顔しなきゃならないし、ボールス様の命令は聞かなきゃいけないし。またコピー増やそうかな」

28

世界の南東に位置する大陸に、ミルチアという巨大な国がある。かつては最強の騎馬兵団を有し、機動力最強説を説いていた強国であったが、二年前に王が変わり、今では何処の国とも接触のない鎖国として佇んでいた。

ミルチア大陸の中心にある第一ミルチア城内部。一人の男が王の間へと向かって歩いていた。階段を登り、最上階にある扉を開いて、彼は王の間へと入る。

「閣下、ダルフェンディアの報告に参りました」

「アルテオム・アルテスか」

王は彼の名を呼び、少し顔を上げて彼の方を見る。アルテオムは、その姿勢のまま続けた。

「テスト用の戦闘とはいえ、簡単にやられてしまいました。どうやらダルフェンディアに衛兵以外の者がいたようです」

「そうか……だがアルテオムよ、いつまで人形遊びをしているつもりだ？我が国にはエーデルリッターもおるのだぞ」

エーデルリッターとは、ミルチアが誇る騎馬兵団の名称であり、ブラックナイツ、ホワイト

ナイツ、ルビーナイツなど複数の小隊の集合をそう呼ぶ。
「彼等は所詮人間。人間には限界というものがあります」
「だが、そのために十三使徒と手を組むのはどうかと思うがな……」
「閣下、世界が混乱している今がチャンスなのです。ミルチアの力を世に知らしめるのは今しかないのです。それに、奴らとは手を組んでいるわけではありません。奴らとはただ、互いの研究資料を交換しているだけで、その表現は間違っておられる」
「……まぁ、お前に任せる。しかし、あまり表立った行動は取るな。民の目があるということも忘れてはならぬぞ」
「御意……」
アルテオムは、最後にそれだけ言い、王の間を後にした。
彼は階段を降り、通路をしばらく歩き続ける。しかし、途中でぴたりと歩みを止めた。
「私は人間だ。後ろに立つのはやめてくれないか」
アルテオムはそう言いながら後ろを振り向く。そこには、いつの間にかラウドが断っていた。
「素晴らしい熱弁だった」
「フ……あのような老いぼれ、丸め込むのは簡単な事だよ。それで、私に何か用か？」
「貴様が人形遊びばかりしていて、あっちの方の研究はどうなっているのかと思ってな」
「心配はいらん。あちらの方も進んでいる。それに、あれは私にとっても興味深いものだからな」

アルテオムはにやりとしながら言った。
「しかし、貴様も変わった奴よ。先にミルチアの政権を握れば、もっと動きやすいものを……」
「今閣下を暗殺すれば、真っ先に疑われるのは私だ。それだけは避けねばなるまい」
「まぁ、貴様の好きにするがいい」
そう言うと、ラウドは闇へと消えた。アルテオムが再び歩き出そうすると、前方から黒い鎧を纏った女性が駆けてくる。
「アルテオム殿、王はおいでか？」
「ブラックナイツ隊長、コーデリア・レキか。王に何の用だ？」
「レオデグランスより援軍要請だ。王に取り次いでいただきたい」
「……わかった。私が王に話しておこう。貴公は命令に備えて待機してろ」
「わかった。よろしく頼む」
コーデリアは一礼し、来た方向を戻っていく。
「……フン、何が援軍だ」
アルテオムは一人呟き、王の間には戻らず、そのままの方向を歩き続けた。

「レキ隊長！　どうでしたか？」
コーデリアが待機室に戻ると、兵達が一斉にコーデリアへと詰め寄った。

「あぁ、アルテオム殿に、王に取り次いでもらえるように頼んでおいた」
「アルテオム殿にですか……」
その言葉を聞き、兵達は静かに元の位置に戻る。
「奴からはいい噂を聞きません」
「確かにな……ミルチアの科学発達のためとは言え、あのようなどこの馬の骨ともわからぬものを参謀になどするとは」
「先代のオイフェ様が亡くなって二年……クラモリ様に王政が変わってから、ミルチアがおかしくなってきてます」
「いや、クラモリ様に変わってからではなく、あのアルテオムという男がきてからのような気がします」
「なんでも魔族と内通しているなどとの噂もたってますよ」
兵士達が次々に言葉を交わす。コーデリアは椅子に腰を掛け、黙ってそれを聞いていた。
「レキ隊長！　我々はこのままでいいんでしょうか……？外では他の国の勇士達が魔族と日々戦い続けているというのに……」
「民からも不満の声が出ています。レキ隊長……ここはやはり、あのアルテオムを……」
「まぁ、皆落ち着け。私だってアルテオムについては皆と同意見だ。が、証拠がない。証拠がなければあの男を逆賊として討つ事はできんよ。民や他のエーデルリッターを動かすのにも、証拠は必要だ。今はしばらく待つしかない。奴が尻尾を出すまでな……」

29

ペルセンから遥か北、黒砂の砂漠。そこは魔界の領地である。永遠に続くような黒い砂の大地……それはまさに、この世のものならぬ光景である。

遥か古の時代に黒く巨大な蛇が死に、その亡骸が黒い砂となった。砂はどんどんと他方へ侵食して行き、健全な大地を同じ黒い色へと染め上げていって……その結果がこの広大な砂漠の正体だと言われているが、本当のことは誰も知らない。

風一つ吹かない、強烈な日差しの黒い砂漠を黙々と歩くペルセン魔王討伐隊。

「静かだな」

ペルセン王子であり、討伐隊総司令官のヤクシャが言った。この砂漠の黒い砂は、体の弱い者なら数時間も経たないうちに絶命しうるほどの猛毒なので、普通の動植物や生命力の弱い魔物はその存在すら許されぬ場所である。ペルセンの兵隊達は魔法で加工された特殊なマスクを装備し、黒い砂の影響を受けずにすんでいるため、彼らの部隊以外に砂漠にはまったく生き物の気配が無かった。

「この分だと大した被害を出さずに黒砂の砂漠を渡れそうですな」

副司令官がヤクシャに言った。ヤクシャは男たちが運ぶ台座の上で、玉座に全身を預けている。怠惰とも言えるその姿はかえって彼の威圧感を引き立て、兵たちの恐怖心と忠誠心を煽る手助けをしていた。
「しかし、右を向いても左を向いても黒い砂が延々と……まるで悪夢でも見ているかのようだ。このような場所、さっさと抜けてしまいたいものだ」
ヤクシャが誰とも無く独り言のように呟くと、副司令官がそれに答える。
「この砂漠はいま現在も凄まじい速度で全世界に広がりつつあります。魔界を統一なさったあと、まずやらねばならないのはこの砂漠の処理でしょうな」
「可能なのか？」
「サンダルークの魔法錬金術を利用すれば、恐らく」
「ふん、結局は他国の力か……魔法ではサンダルークに負け、軍事力ではパッセに劣り、ミルチアにいるような駿馬は一頭もおらず、レオデグランスの町一つ分ほどの経済力すらない。我が国の取り柄といえば、大量に採れる魔石ぐらいのものだ」
「……」
俯き、押し黙る副司令官。ヤクシャは続ける。
「しかし、我が国が世界を統一するには、神への絶対帰依、このたった一つで十分なのだ。わかるな？」
副司令官は胸に手を当て、こう言った。

「は。全ては、アル・ハーリク神の意のままに」
ヤクシャは考えた。
（そう、我が国には信仰しかない。しかし、なにも無い我が国だからこそ得ることのできた揺るがぬ信仰心だ。過酷な生活環境の中で、我々には神以外に頼る者はいないからな。見ていろ、魔王、そしてレオデグランス。信仰心がどれほどの武器になりうるか……見ているがいい）

……それから数時間が過ぎた。ヤクシャたちはようやく砂漠の四分の一は来たかというところで、遥か遠方から奇妙な音が近づいてくるの聞きつけた。まるで耳元を通り過ぎる矢のような、空気を切り裂く甲高い音。
「……ん？」
「いったい、なんの音だ？」
顔を見合わせて不審がる兵隊たち。
「あれは……！？」
ヤクシャが遥か前方の頭上を指差す。そこには、猛烈な勢いで空を舞う巨大な怪鳥の姿があった。上半身は鷲、下半身には獅子の体をもった奇妙な鳥。それが、伝説の魔獣グリフォンであると彼らが気づいたかどうか、それは定かではない。あまりに恐ろしい速度で飛ぶグリフォンを、彼らはその目で追うのがやっとだった。
「こっちに向かってくるぞ……撃ち落せ！」

慌てて矢を放つヤクシャの部隊。しかし、怪鳥には一本たりとも命中しない。怪鳥が部隊の前方をツバメのように急降下すると、その背からなにものかが飛び降りた。着地と同時に巻き上がる黒い砂塵。砂の毒を封じるために、ヤクシャたちは思わず目を閉じる。

「全軍待機！　体内に砂が入らないよう注意しろ！」

怪鳥はそのままどこかへ飛び去って行った。砂塵がおさまるのを待つペルセンの部隊達。やがて、晴れた景色の向こう側に立っていたのは、一人の屈強な若い男だった。腕を組み仁王立ちで部隊を眺める姿からは、凄まじい覇気が立ち込めている。

「……貴様、なにものだ？」

ヤクシャが訊ねる。

「魔王モートの使徒ヴァジュラ。ここからは一歩も通さん」

使徒、という言葉を聞き、怯え始める兵士達。動揺を隠し切れず、互いに顔を見合わせる。しかし、ヤクシャだけは違っていた。

「ふん、誰かと思えば……魔王の番犬ではないか！　貴様たち使徒のことなら文献で読んだことがある。その中でも、ただつわもののみを求め、戦いに飢える狼ヴァジュラ……魔王と勇者の対戦から三百年の時を経て、まだ生きていたとはな！」

ヤクシャは台座から飛び降りると、全部隊の前に立った。

「ちょうど退屈していたところだ。齢数百年の老人相手に一万名の兵が襲い掛かったとなれば、ペルセンの名に傷がつく。私一人でお相手しよう！」

「しかし、王子……」
「……私の腕を疑うつもりか？かまわぬ。黙ってみておれ！」
ヤクシャを制止しようとする副司令官を一喝すると、ヤクシャは腰からファルシオンを抜き、正面に構えた。太陽にぎらつく銀の刃。後方に備える兵たちが息を飲んで、戦いの成り行きを見守る。
「行くぞ！」
掛け声とともにヴァジュラに襲い掛かるヤクシャ。ヴァジュラは仁王立ちのまま、微動だりしない。あっというまに詰まる距離。ヤクシャが太刀を振り下ろす。
「はは、鈍間め！」
ヴァジュラの眉間に鋭い刃が迫り、誰もがヤクシャの勝利を確信したそのとき……ヴァジュラは持ち前の反射神経で、ファルシオンの刀身を両手の掌で挟みつけた。
「なにいっ！？　しらは……」
ヤクシャが言葉を言い終わる前に、ヴァジュラの放った拳は彼の頭部を粉々に打ち砕いた。まるで高い建物から落としたリンゴのようにあっけなく潰れるヤクシャの頭を、呆然と眺めるペルセンの部隊。
「俺が白刃取りして折れなかったのは、この剣が初めてだな。良い剣だ、貰っとくぜ」
そう言うと、ヴァジュラはファルシオンの切っ先を兵士たちの方へ向けた。
「どうした？こいよ」

放心状態の副司令官が我に返り、大部隊に号令をかける。その途端、総勢一万の兵が、たった一人の使徒に向かって突撃した。次々に襲い掛かる兵士達。しかし、常人を逸した使徒の身体能力を前に兵隊たちはまるで泥人形のように破壊されていく。

それは殺戮ではなく、もはや単なる破壊とよぶべきものであった。ヴァジュラがファルシオンを一振りすれば、装着している武具ごと四、五名の兵の体を上下に分断し、拳を放てば独特の炸裂音とともに肉と骨が砕け散る。兵士達は断末魔の叫び声すらあげずに、朽ち果てていった。

「ひぃ……」

「ば、バケモンだ……」

ヴァジュラが放つストレートパンチは、その衝撃波で後方数名の兵士にもダメージをあたえる。一人の兵士がヴァジュラの背後を切りつけたが、薄皮一枚切れた手ごたえも無い。カウンターを食らい、弾けとぶ兵士の顎。

「はっはっはっは！　一万いようが十万いようが、お前達が俺に一度に襲い掛かってこれるのはたった四人か五人が限度だ。人一人を囲めるのは、せいぜいそんなもんなんだよ。絶対的な力を前に、たった五匹のザコがなにをできる？」

使徒ヴァジュラにその圧倒的な力を見せ付けられ、戦慄する副司令官。

「これが……これが使徒……か。致し方あるまい。最前列の者ども、なんとしてでも奴の動きを止めよ！」

副司令官が指示を出す。するとヴァジュラのすぐ近くにいる兵士達は武器を放棄し、ヴァジュラを無理矢理押さえつけ始めた。
「お、なんだ？」
不思議に思いながら、自分の体を押さえつけようとする兵士の腕を草の根のように引きちぎって脱出しようとするヴァジュラ。しかし、肉の壁はつもりつもって、とうとう彼の体は埋まってしまう。
「むう……どけ！　出さねえか、畜生！」
「よし、いまがチャンスだ！　濃縮魔石をもつ者は、これより使徒ヴァジュラに向かって自爆を敢行せよ！　ヤクシャ王子の敵討ちだ！　残りのものは早急に撤退！　三百メートル離れて対魔法放射線防御！」
副司令官の号令とともに、数名の兵士達がヴァジュラの埋もれる肉の山に特攻した。
「アル・ハーリク神、万歳！　我が身よ永遠なれ！」
兵士達は口々に叫ぶと、自らの魔力で濃縮魔石を発動させる。刹那、巻き起こる大爆発。ヴァジュラを止めていた味方もなにも関係なく、爆発は全てを消し飛ばして広がっていった。逃げ遅れた兵隊たちが次々に爆発に飲まれていく。吹き荒れる黒い砂の嵐。魔法放射線の紫色の輝きがぎらつき、砂漠を包み込む。
……数分の後、爆心地は半径数十メートルの巨大なクレーターと化し、そこにはペルセン兵の姿も使徒の姿もなにもなかった。

「……や、やったか？」
副司令官がほっと溜息をつく。
「使徒……か。恐ろしい相手だ。たった一人を相手に濃縮魔石まで使うことになるとは……お陰でこの地は魔法放射線まみれだ。もう当分のあいだ生物は住めんな……ん？」
そのとき、自分の足をなにかが掴んだことに副司令官は気が付いた。
「……なんだ？」
下を振り向いた瞬間、彼の体は砂の中へと一気に引きずり込まれていく。
「う……おぉぉぁぁぁ！」
周りの兵士達が慌てて引きずりだそうとしたときには、副司令官の全身はすっぽりと地中に埋まってしまっていた。妙な静けさに顔を見合わせる兵士達。
「……ま、まさか」
「生きているのか！？　奴は！？」
兵士たちの不安は的中した。彼らのど真ん中で立ち上がる砂の爆煙とともに飛び出した一匹の影。使徒、ヴァジュラが飛び出す。混乱する兵士達。
「やってくれんぜ……人間ども」
しかし、ヴァジュラも無事というわけではなかった。その左肩から指先までが、黒焦げになってしまっていた。
「あちちち……くそっ。正直、自爆までやるとは思ってなかったぜ。恐るべきは絶対的な神へ

の信仰……だな。だが、生憎俺にも絶対的に信頼の置けるものがあるんだよ。俺自身のこの両腕、両の拳だ……片方はてめーらに黒焦げにされちまったけどなぁ……！」
左腕が使えずとも、その戦力差は圧倒的だった。むしろ、頭を叩かれて統率力をなくしたペルセン部隊の方が、不利な状況に陥ったようにも見える。無謀な特攻をつつける兵隊たちの命を、悪夢のような強さで掻き消していくヴァジュラ。
「腑詰めのゴミどもがっ、この腕の代償は高くつくぞ！」
そのとき、黒砂の砂漠の遠方から、一匹の悪魔が飛んできた。しかし、死闘の渦中にいるペルセン兵たちは、その存在にすら気づいていない。
悪魔……ヴァジュラの使い魔リリパットは、大軍勢にたった一人で立ち向かう主人を見つけた。
「うわ、バカだ！　マジで一人でやってるし」
リリパットはヴァジュラの頭上で呟くと、飽きれた表情で主人を見下ろした。
「おい、伝言だぞ、ヴァジュラ！」
聞こえるはずもなく、ヴァジュラは戦いを繰り返す。
「おーいっ」
やはり気づかない。
「おいこら、使い魔様が来てやってるんだ。聞こえてね―のかぁ」
ヴァジュラにはまったく聞こえていない。

「やれやれ……緊縛の術！」
リリパットが叫ぶと、ヴァジュラの筋肉はまるで石のように固まり、その動きを止めてしまう。
「うおっ、なんだ？緊縛の術……リリパットか？なにしやがる！」
身動きのとれないヴァジュラに襲い掛かるペルセン兵。そこらへんの刀では皮膚すら切れないヴァジュラの鋼の肉体も、もう一度魔石でやられるとマズイことになる。精神統一をし、必死に緊縛を振りほどこうとするヴァジュラ。
頭上から、リリパットが叫んだ。
「モードレッドのおっさんから非常召集かかったぜ。すぐさまここから離れて、あとは俺が連れてきた魔物軍勢に任せるか、もしくはそのまま死んでくれ。お前を連れてこなけりゃ俺の責任問題になっちゃうからさ、それなら死亡報告するほうがマシだなー」
「わ、わかった！　行く、行くってば！　おい、マジでやばいぞ！」
リリパットが指を鳴らすと、ヴァジュラの緊縛が解ける。自分の周りの兵を即座に二、三名叩きのめすと、軽やかに飛び上がって混戦から脱出するヴァジュラ。口笛を鳴らすと、彼を連れてきたグリフォンが飛んできて、ふたたび彼を背に乗せた。
「逃げるか、卑怯者！」
「王子の敵……待てぇぇ！」
口々に叫ぶペルセン兵だが、グリフォンに乗って天高く飛び上がったヴァジュラには、彼ら

はなす術もなかった。
ぱたぱた飛んでいるリリパットの前まで来ると、ヴァジュラは彼を睨みつける。
「……お前なぁ」
「いや、今回の召集はマジに行った方がいーんだぜ、ヴァジュラ。トゥオン様も来る」
「トゥオンが？モードレッドのところに？」
領くリリパット。
「……そうか。あとは任せたぞ、リリパット」
言うが早いか、グリフォンを駆ってその場を立ち去るヴァジュラ。目標は、魔王軍の総本山アストラト城である。
「トゥオン様とモードレッドが顔を合わせるってことは……このまま魔界で内乱も起きかねないよなぁ……そうなったらヴァジュラの奴、一体どっちにつくつもりなんだろうなぁ」
ポツリと呟くリリパットだが、下方から飛んできたペルセン兵の放つ矢が身をかすめ、慌ててその場を逃げ出す。
「うわあ、アブねぇ！　……そうだそうだ、俺は俺で仕事しなきゃ。リリパット特設モンスター軍団、カームヒアーーー」
やがて、ペルセン部隊とリリパットの魔物部隊が大合戦を繰り広げ、疲弊しきったペルセン軍を魔物軍が圧倒することになる。
こうして、ペルセン国の命運をかけた魔王討伐の代進軍は、大失敗に終わったのだった。

――ダルフェンディアにて。
復興活動もとりあえずは一段落ついたダルフェンディアの町に、リュネット率いる神聖騎士団はいまもまだ滞在していた。例の虫の穴の調査である。
一人の兵がリュネットの前に現れ、一礼をする。
「リュネット様、先ほどの調査部隊が戻ってまいりました」
「む。それで？」
「……長く複雑な洞窟になっておりまして、とても一日や二日で調査できる規模では無いようです。恐らく、例の虫どもの手によって掘られたのでしょう」
「長いって、どのぐらい？」
「かなりの遠方にまで続いているのは分かりますが、それがどこまでかは分かりません。ヘタをすれば国外にまで到達しうるものかと」
「ふむ……魔物達の侵攻だろうか？いや、それにしては例の虫……妙に小細工じみているな。人の手によるものだと思えるが……」
「しかし、魔物たちの中にも高い知能をもったものはおります。特に、使徒の中には人知を遥かに超えた錬金術を操る者もいるとか……」
「うーん……推測ばかりでは何も始まらないわ。よし、探索の準備！」

「……は？いや、しかし……」
「洞窟を探索だ。私はこれを見捨ててはおけない」
「ですが……この軍勢で洞窟探索ですか？」
リュネットは百に近い神聖騎士団を見渡し、しばらく唸った後、こう言った。
「仕方ないわね。探索に必要な人員を除いて、あとは置いていきます」
リュネットの言葉に猛反発する兵士達。
「そ、そんな！　……ぶっ」
「あんまりですリュネッ……ぶはっ」
「これは我々の仕事ではありません！　完全に教会の管轄外……あうっ」
口答えをする兵の頬をばしばしと張っていくリュネット。
「きぃーーーっ！　だまらっしゃい！　レオデグランスの危機は教会の危機！　教会の危機は神の危機！　神の危機は人類、私たちの危機！」
リュネットは後ろを振り向き、自らの拳を握り締めた。
「……ふふ、これはレオデグランスの防衛線の脆弱性を指摘するチャンス……そうよ！　王家の贅沢三昧から疎かになった国防力を指摘して、たらふく軍備に回してもらうんだから……切っては、今回の虫騒動で活躍した私リュネット率いる神聖騎士団にね。ああ、なんて素晴らしい！　ばか王女のおこづかいがみんな私の軍に回されるんですから！　今に見てなさいよ、ばかエレインのばか王女……」

「リュネット様、頭の中身もれてま……はうっ」
発言した兵士を振り向きざまに張り倒すリュネット。
「うるさい！　さあお前達、この洞窟の探求作戦に志願なさい」
不服そうにお互いの顔を見つめあう兵士達。
「……どうした？不満でもあるのか？」
（不満以外ねーよ……）
そんな兵士たちの胸中をよそに、リュネットはその場に腰をかけ、志願兵が定員に達するまでは一歩も動かないことを宣言した。しぶしぶ諦めて、数名の兵士が挙手し始める。
「ひいふうみい……まだ四人しかいないわね。あと三、四名は欲しいわ。誰か！」
「おや、リュネットさんじゃないですか」
聞き覚えのない声が背後からして、リュネットは振り返った。
「お前は……誰だ？」
そこには一人の男が立っていた。しかし、どうにも思い出せないリュネット。男は少し困った顔で答えた。
「はは、参ったなぁ……ロットですよ、ロット・スティルバン。キャメロンで一悶着あったときの……」
「おお、ロットか。よくぞ良いところに！　さあ、あなた方も志願するのです！」
ぽかーんと口をあけるロットと、パーティメンバーであるエリック、ルーシィ、ガウェイン。

「……すまない、話が見えんのだが」
ガウェインが訊ねると、リュネットは事情を説明し始めた。この町が虫に襲われたこと、その穴の先を探索しないと、レオデグランス、しいては全世界が危機に陥る（誇張）こと。
「ふむ……」
「いかがです？英雄騎士ロット。そなたのお力添えがあれば、私どもも大変心強いというもの」
リュネットの言葉を聞いて、しばらく腕を組んで黙っていたロットだったが、やがて意を決して二、三度頷いた。
「……そうですね。では、私たちも……」
「待てよロット」
ロットが承諾の返事をしようとしたとたん、エリックが口を挟む。舌鼓をうつリュネット。
「俺たちの使命は魔王を倒すことだろう」
「エリック……だが、僕はレオデグランスに……祖国に危機が忍び寄っているとあっては、見捨ててはおけない。魔王ももちろん放ってはおけないが……やはり、小事は大事だ」
「はう……ロット様、ご立派です」
隣でうっとりするルーシィ。
「話にならんな。ガウェイン、貴様も同じ意見か？」
「私はロット殿についていくだけだ」

自分に同調しない三人をいまいましげに睨みつけるエリック。
「ふん……さては、魔王に怖気づいたな！　貴様らの意志はそんなものだったか！」
「なぜそうなる」
ガウェインの言葉も耳に入らない様子で、エリックは一人で踵を返した。
「エリック、待つんだ！」
「臆病者の勇者のパーティなんぞに加わることはできんな。あばよ、ロット」
言い放つと早々にロット達の元を離れたエリックだったが、罪悪感に苛まれるロットをよそにルーシィとガウェインはせいせいした様子だった。エリックは一度も振り返らず、遠ざかっていく。
「エリック……」
ロットが呟いた。
「落ち込むことありませんよ、ロット様」
「そうそう、前からあいつは気に入らなかったんだ。かえってせいせいしたぜ」
しばらくエリックの背中を見つめていた三人だったが、リュネットが咳払いをすると、そちらに向き直る。リュネットは満足そうな顔だ。
「それではロット、お力添え感謝いたします。さっそく明日にでも出発いたしましょう」
こうして、リュネット率いる洞窟探険隊に、ロット一行が加わることとなった。

――精霊の樹海を目指してカーノスメルテを発つエレインたち五人。
肩を並べて、五人は踏み鳴らされた道をゆっくりと歩いていた。半里ほど離れて、平野の彼方に小さくなったカーノスメルテを、ネッコはじっと見つめる。その視線はどこか未練がましく、口惜しげである。
「……ネッコ殿、やはり諦めきれぬか」
ライオネルがポツリと呟く。ネッコは視線を町にの方角へやったままだ。
「……分からない。ライオネルに言われたことは正しい気がする。僕は自分自身が大事なだけなんだ……けど、だからと言って僕自身が本当はどうすればいいのか、ちっとも分からない。ただ自分を正当化して、逃げているだけなのかもしれない」
「復讐は復讐を生む。君は、ゼムの孫に命を狙われたいか？」
「……」
「少なくとも、これはこれでよかったのだ。自分を恥じる必要などないよ」
「……」
「そうそう。ゼムが殺されちゃ、横にいた女の子がかわいそうだぜ。ひょっとするとゼムの娘かもよ」
二人の会話を聞いていたロアがどうでもよさげに言った。しかし、言った本人がどうでもよさげでもネッコの心にはチクリと響く。

「……たまにはお前も良い事をいうものだな」
ライオネルがロアに言った。しかし、ロアはやはりどうでもよさそうだった。
「そうだろそうだろ。なあ、誰かビスケットもってねーの？」
一行は精霊の樹海を目指し、歩きつづけた。

30

魔界の中心にそびえ立つ魔王城。数百年前に魔王モートが何百万という奴隷を使って建設したその壮大な城は、幾度の大戦でかつてのその栄華な姿は色あせ、陰気で恐ろしいまさしく魔王の城と呼べるたたずまいとなっていた。

その魔王城の一室、円卓の間と呼ばれる部屋に、円卓を囲み数名の魔族が集まっていた。集まった魔族の名前は、トゥオン、ヴァシュラ、ラウド、メレアガンス、ネヴィーナ、ボールス、かつて世界の支配者達だった者達だ。

十三ある円卓の席のいくつかは空席だった。そのせいだろうか、部屋には張り詰めた空気が流れていた。

「しかし、おせーな。呼び出した張本人のモードレッドの奴はどこにいってるんだ？」

ヴァシュラが静寂を破るように声を上げた。大声が部屋に響き渡る。

「相変わらずうるさい筋肉馬鹿だ。ここは我等が主の御城だぞ。少しは静かにしていろ。場が穢れる」

トゥオンがヴァシュラをジロリと見た。

「その主がとっくに死んじまったんだからしょうがねえだろ。今じゃモードレッドの私城だからな。しかし、意外だったな。おまえさんがモードレッドの呼び出しに尻尾を振ってホイホイ出てくるとわ」
「もう一度言ってみろ。その首が飛ぶぞ」
トゥオンが椅子に立てかけてあった大鎌を手に取る。
「おもしれぇ。やってみろよ」
ヴァシュラが笑って言う。ほんの先ほどまでペルセン相手に殺戮をしていたからだろう。笑った顔にも殺気が宿っている。
「やめろ、トゥオン。おぬしもだヴァシュラ」
目を閉じたまま静かに座っているメレアガンスが言った。
「相変わらず仲がいいな、お前ら。何なら二人そろって相手してやってもいいぜ」
「……」
ヴァシュラの挑発にもメレアガンスは目を閉じたまま無言で閉じて応じない。
「しかし、六人とは案外集まったものだな。我々十三使徒には身勝手な奴が多いからな。特にネヴィーナ。お前など絶対来ないと思っていたが」
ボールスがニヤニヤ笑いながら言った。
「ヴェネルクス・ガルガンディが来てないかと思ってね……」
ネヴィーナが静かに答える。

「そういうおっさんこそ、来るとは以外だな」
ヴァシュラが今度はボールスを向いて言った。
「私か？私のはただの気まぐれだ」
ボールスが笑って答える。
メレアガンスがゆっくり目を開いた。
「無駄口はそこまでだ。モードレッド殿が来たようだ」
ラウドが凛とした声でそう言った。
部屋の扉が開いてモードレッドが入ってきた。服装は相変わらず黒で統一された豪勢なもので、その裾の長い服を地面に垂らしながらゆっくりと円卓に歩いてくる。
「諸君、よく集まってくれた。残念ながら生死や所在不明の者もいるが、我々だけでもここに三百年ぶりにこうしてまた集まることができたことをうれしく思う」
円卓の席に着いたモードレッドが言った。
「今日集まってもらったのは、今起きている魔界の混乱と人間界の情勢についてだ。残念ながらこの三百年間、我々は纏まることなく各自勝手にに行動してきた。今まではそれでよかった。しかし、最近になって人間界に動きがあった。人間やその他の種族が団結して、この魔界に攻め込もうとしている」
「人間なんていくら集まっても別にたいしたことじゃないだろ。現にさっき少しばかり殺してきたばかりだ」

ヴァシュラが言った。
「そうかもしれない。しかし、かつての勇者アトロの例もある。油断しないに越したことはない。それにモート陛下が消えて三百年、そろそろ復活なされてもいい頃だ。陛下が復活なされた折、魔界が今のように混乱した状態では陛下のお怒りをかうことは目に見えている。そうならぬよう、陛下が復活なさる前に我々が協力してこのアトラースの世界を再び我々魔族の手で統一しておくべきだと思う」
「われらの主が生きておられるという根拠は？不幸な事だが完全にお亡くなりになられているかも知れん」
ボールスが言った。トゥオンがピクリと眉を動かす。
「偉大な魔王モート陛下が勇者アトロごときに殺されるお方でないことは、我々十三使徒が一番よく知っているはず。世界を覆いつくすほどの魔力を持たれたお方だ。例えどのように深い傷を負っていてもやがては復活なさる」
モードレッドが当然のように言った。
「軍の統率については偉大なるモート陛下に副王をたる権限を与えられたこの私が執らせてもらう。異存ある者はないと思う。これはすべてモート陛下のためであり、私の案に反する事は、モート陛下に弓引くことと同じことだからな」
「異存は大有りだ」
トゥオンが席を蹴って立ち上がった。

「何がモート陛下のためだ。貴様の企みはわかっているぞ。モート陛下のいない間に己の権力を拡大させ、モート陛下に取って代わり新たな魔王になろうとしているのだろう。私がそうはさせん！」
トゥオンがモードレッドに向かって怒鳴った。
「何を根拠にそんなことを言うのだね、トゥオン嬢。それに私が世界を統一しようと思えば、この三百年のうちにとっくにやっている」
モードレッドが言った。
「貴様が三百年も動かなかったのはモート陛下が生きているか死んでいるか不安だったからだ。もっとも軍は裏で増強し続けていたようだが。そして三百年たって貴様はモート陛下の死を確信した。だから今になって己の野望のままに動き出したのだ」
「何を馬鹿なことを。他の諸君はどう思うかね？」
モードレッドがトゥオン以外の物に向かって言った。
「別にモードレッドの意見が間違ってるとは思えんな。遅かれ早かれ世界は我々魔族によって統一されればならんのだ。そして今、モードレッドは世界を再び統一できるだけの軍勢を擁している。モードレッドの先導で世界を統一できるなら、これに越したことはない。私はモードレッドに賛成だ」
ボールスが言った。
「我が輩もだ。世界の再統一はモート陛下の悲願でもあられるだろう。そのためにはそれがし

も助勢する所存」
　ボールスに続いてラウドが言った。
「俺も別に反対する理由はねえな。この三百年、退屈しきってたところだ。久々に人間相手に大暴れしてやろうぜ」
　ヴァシュラが言う。
「メレアガンスはどうかね？お前はトゥオンと仲がよかったが」
「……」
　メレアガンスは答えない。
「ふふ、沈黙か。それも賢い選択の一つだ」
　モードレッドが笑う。そして、ネヴィーナの方を見た。
「私はどうでもいいわ」
　まったく興味なさそうにいうネヴィーナ。そこまで聞いていたトゥオンが怒りを爆発させた。
「話にならん！　そろいもそろって逆賊モードレッドに加担するとは。十三使徒としてのお前達との縁もこれまでだ。これからは私は一人の魔族として勝手にさせてもらう」
　トゥオンは大鎌を手に円卓の間を出て行こうとする。そのトゥオンをモードレッドが呼び止めた。
「いいのか？これは我々魔王軍十三使徒としての決定だ。その決定に賛同しないということは、逆賊として我々はお前を討たねばならないが？」

「何が逆賊だ。たとえ一時何と呼ばれようと、私はモート様のために戦うまでだ。お前と私、どちらが正しいかはモート様が復活なされた時わかるだろう」
「だといいがな」
モードレッドがニヤリと笑う。トゥオンは顔をしかめて再び扉に向かって歩き出した。
「待て。トゥオン」
それまで黙っていたメレアガンスが言った。トゥオンが立ち止まる。
「なんだ！　お前までモードレッドの肩を持つ気か！」
トゥオンが後ろを向いたまま言った。
「……モードレッド殿、一つ聞きたい。貴公に一人でアストラト城に来る意思はあるかな？」
「どういことだ？」
モードレッドが尋ねる。
「この会合は十三使徒の会談だが、別の見方をすればモードレッドとトゥオン、新生魔王軍と旧魔王軍のトップ同士の会談でもある。その一方のトゥオンが危険を冒して、貴公の居城である魔王城まで出向いたのだ。ならば当然の礼として、貴公もトゥオンの居城であるアストラトまで出向くのがすじというものだろう。そうしてこそ初めて、野に身を潜めて情勢を見守っている魔界の幾多の魔族もようやく魔王軍が一つにまとまったと知って、それで魔界の混乱も収まる。もし貴公がアストラト城まで出向いてくれれば、私が責任を持ってトゥオンを説得して、共に我等が主のために世界の統一に力を貸すと約束しよう」

「……」
「何を言う！　メレアガンス！」
トゥオンがメレアガンスの方を向き直って怒鳴る。
「……それは無理だな。今日の会談で諸君等もわかったと思うが、トゥオン嬢は私のことを相当嫌っているようだ。アストラト城になど行けば私はトゥオン嬢に殺されるだろう」
モードレッドが笑って言う。
「……そうか。ならば私も貴公とは別の道を行かねばならぬようだ」
そう言ってメレアガンスは立ち上がった。トゥオンの横まで行き肩を並べる。
「次に会うときは戦場だ。その時は容赦せん。覚悟しておくことだ、モードレッド」
「……すまん、メレアガンス」
メレアガンスの言葉を聞いて、トゥオンが言う。
「わーはっはっは。こりゃいい、おもしろくなってきたな。こんなにワクワクするのは大戦の時以来だ。やはりこうでなくっちゃな！」
大声を上げて笑うヴァシュラ。
「だが、どうせやるなら今ここでもいいだろ？戦場で兵を指揮しての戦いなんてめんどくさくてごめんだ。なぁ！」
座っていたヴァシュラが一瞬で飛び上がり、天井を蹴ってメレアガンスに襲い掛かった。
メレアガンスの頭上に襲い掛かるファルシオンの刃。ヴァシュラが渾身の力を込めた凄まじい

までの一撃だった。飛び退いて身をかわすメレアガンス。ファルシオンはそのまま床に突き刺さる。雷が落ちたような轟音がして、床に数メートルの亀裂が走った。すぐさまヴァシュラが再び床を蹴る。蹴られた床の石版が割れて石片が飛び散る。凄まじい脚力だった。
一瞬で詰まるヴァシュラとメレアガンスの間合い。再びメレアガンスに襲い掛かるファルシオンの刃。メレアガンスが目にも留まらぬ速さで腰の剣を抜刀する。両者の剣がぶつかり、生まれた衝撃波で部屋の窓ガラスがすべて粉々に割れ散った。
「わはははっ、さすがにやるな。一度てめぇとはやってみたかったんだ。誰も邪魔するなよ」
子供のように嬉々として言うヴァシュラ。トゥオンがメレアガンスに加勢しようと地を蹴る。しかし、そのトゥオンとヴァシュラの間にラウドが割り込んだ。
「手出しは無用だ。貴殿はこのラウドが相手仕る」
「ちっ！」
トゥオンが大鎌を振り回して目の前のラウドに斬りかかる。ラウドは二刀でトゥオンの大鎌を鮮やかに捌いてく。キンキンと音を立てて、目にも留まらぬ速さで火花を散らすトゥオンの大鎌とラウドの二刀。トゥオンがラウドと間合いをとって片手で印を描く。
「業炎粧！」
トゥオンの手から人を丸々飲み込むほどの巨大な火の玉が放たれる。
「ぬるい！」
ラウドが二刀で火炎球を切り払った。焔が辺り飛び散る。ラウドは服が少し焦げた程度でま

るで無事だ。
ラウドの側にボールスが歩いてくる。ラウドが体はトゥオンに向けたまま、目だけをラウドに向ける。
「ボールス殿、貴殿の力を借りるほど事ではない」
「そういうな。私にも少し楽しませろ」
ボールスはそう言って笑った。
「出でよ、闇の獣」
ボールスがそう言うと、床に伸びたボールスの影から六匹の黒い狼の姿をしたモノが飛び出した。地を駆けてトゥオンに襲い掛かる。トゥオンが大鎌を振る。一瞬で五匹の獣が切り払われたが、残りの一匹がトゥオンの肩に噛み付いた。
「くっ……」
トゥオンが苦痛に顔をしかめる。片手で獣の首を掴む。ゴキッという音をさせて獣の首の骨がへし折れた。そのまま肩から引き離す。トゥオンの肩から血が吹き出でた。地に投げ捨てられた獣はそのまま床に消えていく。
「ふふふ、諦めろ、多勢に無勢だ。どうあがいてもお前達に勝ち目はない」
ボールスの余裕の笑み。
「黙れ！」
トゥオンが肩から流れる血も気にせず、大鎌を構え直した。

ヴァシュラと対峙しているメレアガンスがちらりとトゥオンの方を見る。まずい状況だ。トゥオン一人ではボールスとラウドの二人を一度に相手できようもないし、加勢に行きたくてもヴァシュラを相手しているメレアガンスにそんな余裕はない。ヴァシュラは片腕を怪我しているようだが、片手だけといえその豪腕はあなどれない。おまけにまだモードレッドとネヴィーナも控えているのだ。ネヴィーナはどうかわからないが、モードレッドはずっとメレアガンスを攻撃する機会をうかがっている。メレアガンスがヴァシュラとの戦闘中に一瞬でもモードレッドから注意を逸らせば、モードレッドの魔法にやられるだろう。

ヴァシュラがまたファルシオンを唸らせ襲いかかる。再びメレアガンスとヴァシュラの壮絶な剣劇が始まった。

モードレッドは機をうかがっていた。メレアガンスはまるで隙を見せないが、トゥオンの方はボールスとラウドを相手にして傷を負い、モードレッドに向ける集中力を失いつつある。攻撃するなら生半可な攻撃などでなく、一撃でトゥオンを殺してしまわなければならない。そろそろ頃合だろう。トゥオンを殺す千載一遇のチャンスだ。モードレッドが呪文の詠唱を始めた。

その時、不意に部屋の窓の外から目が眩むばかりの光が押し寄せた。爆発する円卓の間。炎と煙が部屋を満たした。視界を失うモードレッド。視界が戻った頃にはトゥオンとメレアガンスの姿は消えていた。部屋に残っていたのはネヴィーナ、ラウド、ボールス、ヴァシュラ。部屋は無残なまでに破壊されていたが、モードレッドを含めた十三使徒のメンバーにたいした傷はないようだった。

「何が起こった！」
冷静なモードレッドに似合わず怒鳴る。崩れた壁から外を見ても誰もいない。
「わからんが、外から何者かの魔法攻撃を受けたようだな」
ボールスが言う。
「ちっ！　せっかくいいとこだったのによ」
低く唸るヴァシュラ。
部屋の外から兵士達が走りこんできた。
「トゥオンとメレアガンスを探し出せ。まだ遠くには行っていない筈だ。生きてこの魔王城を出すな。それとこの攻撃を行った奴もな！」
兵士に怒鳴るモードレッド。モードレッドに怒鳴られ再び部屋の外に走り出す兵士達。円卓の間に残された十三使徒達。
「くだらない……来るだけ時間の無駄だったわね。私は戻るわ」
ネヴィーナがそう言って部屋の外に消えた。
「ふふふ、とんだ会談になってしまったな、モードレッド。おそらく探してもトゥオンとメレアガンスは見つからんだろう。奴らの発見を待つだけ時間の無駄だ。私は帰るぞ。これからトゥオン達との戦争になるだろうが、私の力が必要なときはいつでも言ってくれ。いくらでも力になる。では失礼する」
霧のように消えるボールス。

「では我が輩も失礼する」
モードレッドに一礼して部屋の外に消えるラウド。
「しらけたぜ。俺も帰る」
そう言って窓の外に飛び出すヴァシュラ。地上まで数十メートルあるが、頑丈な彼には大丈夫なのだろう。
一人瓦礫と化した円卓の間に残ったモードレッド。無言で円卓を殴りつける。モードレッドの一撃でなんとか原形を保っていた円卓は粉々に砕かれた。そのまましばらく立ちつくすモードレッド。
「……激昂するとは私らしくもない……まあいいさ。トゥオンとメレアガンスの抹殺には失敗したが、これで戦いの口実ができる。戦さえ始まれば、軍略で私が負ける事など考えられんからな。会談は十分に成功だった。だが気になるのは誰が私の邪魔をしたかということだ。大体の見当はついているがな。私とトゥオンを争わせて得をするものなどそう多くはない……」
静かにそう言うと、モードレッドは円卓の間を後にした。

ボールスの居城。一室にボールスとラウド、それにルーテネが座っていた。
「大成功だったな。トゥオンとメレアガンスはうまく逃がせたし、これでモードレッド軍とトゥオン軍の激突は避けられん」
「でしょ、でしょ。ルーテネうまくやったでしょ。魔法攻撃も誰にもばれなかったし」

ボールスの声に反応するルーテネ。
「これで両者の戦力はいやが上にも削られることになる。もっともすぐにトゥオン達が負けてしまわぬように気をつけておかねばらぬが。あとは……」
「ああ。アルテオムにミルチアの軍の掌握を急ぐように言っておけ。機甲蟲の生産もな。モードレッドとトゥオンが戦力をすり減らしている間に彼等以上の戦力を保有しなければ意味がないからな。後は我々の研究が完成すれさえすれば、我等の念願は達成される」
ラウドに続いてモードレッドが言った。
「ルーテネ、お前はエレインの捕獲を急げ。あれこそ私の研究の最も大事な要因の一つだからな。ラウド、君は引き続きミルチアでのアルテオムの輔佐と監視を頼む。奴は目を離しておくと何を企むかわからん奴だ。そういう意味ではモードレッドに似ているな。私はモードレッドとトゥオンの間でうまくバランスをとっておこう」

31

コーデリアはミルチアの街を歩いていた。相変わらず漆黒の鎧を身に纏い、ガチャガチャと音を立てて歩いている。街の中でも少し大きい一軒の家の前に立ち止まり、扉を開ける。
「モリスン、いる？」
コーデリアの声を聞き、中年の男が部屋の奥からゆっくりと歩み出てくる。
「あぁ、コーデリアか。入りなさい」
そう言われ、コーデリアは中へと入り、扉を閉める。
「さ、掛けなさい。今何か入れてあげよう。最近調子のほうはどうかね？」
「うーん……私は全然いいんだけど」
ソファーに腰を掛けながら言うコーデリア。しばらくして、紅茶を持って出てきたモリスンは、紅茶をテーブルの上に置き、コーデリアと対面になるように腰を落とす。
「私は、とは？」
「あの子がね……」
出された紅茶を口に含み、静かに口を開くコーデリア。

「あの子……キミの馬かい？」
「うん、あの子ももう歳で……さすがにこれ以上乗り続けるのはちょっときついわ」
遠い目をして言うコーデリア。その話を聞きながら、モリスンは黙って紅茶を飲んでいる。
「ねぇ、いい子いない？」
「ミルチアが鎖国となってからは、馬も徴兵される時代になった。なかなか見つかるものではないぞ……」
「そっかぁ」
少し寂しい顔つきで、ゆっくりと腰を上げるコーデリア。何気に窓から、モリスンの家の庭を見る。すると、そこには黒い馬が一頭、何本もの鎖につながれて佇む馬の姿があった。
「モリスン、あの子は？」
「あぁ、あの馬はだめだ。あの馬はな……」
言いかけて言葉を失うモリスン。コーデリアがモリスンの言葉を聞く前に、庭に出ていたからである。
「いかん、コーデリア！　その馬に近づいては……！」
モリスンは、慌ててコーデリアを追う。黒い馬に近づくコーデリア。そのコーデリアの気配に気づき、コーデリアを睨む馬。
（止むをえまいか……！）
右手を前方に翳すモリスン……だったが、目の前の行動に驚き、その動きを止める。コーデ

リアはその馬の頭を優しく撫でていた。馬も、コーデリアを慕うように大人しくなり、自分の頬をコーデリアの頬に当てたりしていた。
「信じられん……」
モリスンは、ただただ感嘆の声を上げるしかなかった。

「あの馬は、吸血馬なんだ」
モリスンは、コーデリアを部屋に連れ帰り、そう告げた。
「え……」
驚きの声を上げるコーデリア。
「私の作ったこの血清で、人の血を欲す事はないが……決して人を寄らせず、自分の背に誰も乗らすことのない凶暴な馬なんだ」
「きゅ、吸血馬……」
「十三使徒ボールスを知っているだろう?」
「えぇ……話には聞いたことがあります。十三使徒の中でも知、剛を持ち合わす吸血鬼という話をきいたことがあるわ」
「もともと、この世に吸血鬼なんていなかったのだよ」
モリスンはそう言うと、椅子から立ち上がり、窓の方へと歩いていく。
「ボールスという男は、知は確かに優れていた。だが、力は十三使徒の中でも一、二を争うほ

どの弱さであったのだ。だが、彼は研究に研究を重ね、ついに吸血鬼という種族を作り出すことに成功した。吸血鬼の力を手に入れたボールスは、弱点であった豪を克服し、現在の地位にまで登りつめたのだ……」
「じゃあ、あの子は研究材料ってこと？でも、それは何百年も前の話じゃ……」
「いや、その研究が、このミルチアで再び行われておるのだ……」
「まさか……アルテオム！」
「あの男には気をつけるのだ。何かを企んでおる。奴がきてから、ミルチアがよくない方向に進んでおる。奴からは目を離さないほうがいい」
「えぇ、そうね……ねぇ、あの子もらっていいかしら？」
コーデリアは吸血馬の方を見ながら言う。
「しかし、あいつは……」
「大丈夫、私は乗せてもらえそうだし、他の人を襲わないようにしてみせるわ」
「……わかった、いいだろう」

……薄っすらと戻ってきた意識に、割れるような頭痛の洗礼。ネッコは開きかけた瞼をきつく閉じて、思わず顔を歪めた。

「気が付きました？」

メルフィナの声が反響している。おまけに、妙に肌寒い。ここはどこだろう？

ネッコがゆっくり目を開けると、そこは洞窟の中だった。天高くにぽっかりと空いた穴から、まばゆい光が差す。自分があそこから落ちてきたことが、まだはっきりと意識が戻っていない彼にはなかなか理解できなかった。

ゆっくりと体を起こそうとして、また頭痛。激しく打ち付けた体の節々も痛む。おまけにあちこち擦り傷だらけだ。ネッコは体をゆっくりと倒し、割れそうな自分の額に手を当てた。もう少し安静にしておくようにとメルフィナが制す。エレインも心配そうにネッコを覗き込んでいた。少し離れて、崩れた岩に腰をかけているロア。ライオネルはゆっくりと洞窟内を監察しながら歩き回っている。そしてもう一人、見慣れない顔があった。ゼム・ロックの娘、悪魔の瞳をもつ少女である。彼女は壁に背をもたれさせ、無表情にネッコを見ていた。

「……どうしてここにいるのか覚えていますか？」
メルフィナがネッコに訊ねる。ネッコは苦痛に顔を歪めながら、二、三度頷いた。額に当てていた掌を見ると、まだ乾ききっていないぬるぬるした血がついていた。嫌な鉄臭いにおいが吐き気を催す。
「まったく、やってくれたぜ」
ロアがゼムの娘に向かって冷たく言い放つ。聞こえなかったかのように、娘は視線をなにも無い床に向けただけだった。

――数時間程前に、時は遡る。
カーノスメルテを出発して数日、ようやく精霊の樹海にたどり着いた五人。そこは想像していたよりはずっと平和な場所だった。生い茂る草木はまっすぐと天に向かって並び立ち、その隙間からこぼれる日の光は、小鳥の鳴き声と調和し、冒険者を祝福しているかのように美しい。取り立てて魔物の気配もせず、彼らの旅はすこぶる順調であった。
「ずっとこんな風景なら、樹海も悪くねーのにな」
ロアがそう言ってから、まるで嫌味のように、その景観はどんどん酷いものになっていった。直立していた木々は汚く曲がりくねって、複雑に絡み合い、通り抜けるための道を探し出すのに精一杯なほどとなる。魔物が息を潜めて人間の首を狙っているのが、木々の陰からひしひしと感じられた。

途中、巨大な食人植物を見つけ、否応無しに遠回りをさせられる。人一人をものの数分で平らげるという食人花だ。花弁の中心に生え揃う牙を、いきり立つサルのように剥き出しにして獲物を待ち構えるその姿は、おぞましいの一言以外のなにものでもない。魔法でさっさと片付ければいいのにというネッコの案は、他の魔物を刺激しないという点で却下された。

他にも、歩くと足元からくぐもった反響が返って来る不思議な地面があった。メルフィナは、下に巨大モグラの通り道があるのだろうと説明すると、地面が抜けてそのまま穴に落ち、帰らぬ人となる冒険者がまれにいることを付け加えた。地面を蹴飛ばして「こーん」という反響を楽しんでいたエレインが、慌てて神経質に爪先立ちで歩き始める。

しかし、冒険者の妨げとなるそれら樹海の悪辣さも、途中で見つけた二人の冒険者に比べれば、五人……とりわけネッコにとってはマシな方だったのかもしれない。

宿命、または運命。そんな迷信めいた考えを当のネッコが持っていたのかどうかは知らないが……兎角、運命とはいつだって可能性を無視して、人と人を引き合わせる。

ゼム・ロックとその娘は、少し開けた場所で休憩をしていた。コンパスと地図を見比べ、これから進むべき方向を確認しているらしい。

「……ゼム！」

ネッコが憎々しげな声で一言彼の名前を呟くと、コンパスで方向を確認していた娘がちらりとネッコのほうを見た。しかし、ゼムは聞こえていないように、そのまま地図から視線を離さない。その態度がネッコの癪に障った。

「……くっ！」
悔しそうにするネッコを、ライオネルが心配そうに眺めている。
「さあ、行こうネッコ君。私たちが戦うべきは、遥かなる魔界の魔王だ。あのゼム・ロックが君のお爺さんの敵なのは分かるが……今はよそう。まだ機は熟していない」
ライオネルがネッコの背中を押す。が、しかし、ネッコは歩きはじめようとはしない。
「機は熟していない……？」
ネッコがライオネルに向かって言った。
「それって、ライオネル、僕が未熟だって言いたいのか？」
ライオネルは厳しい顔で言った。
「……そうだ！」
「なっ……！」
もはや何もかもが気に入らない。自分を認めようとしないライオネル、相手にもならないと言った顔つきのゼム、そして力足らずの自分。ネッコはすっかり冷静な判断力を失っていた。彼は元々、穏やかな気性の持ち主ではなかった。
「……おい、ゼム・ロック」
ネッコが言った。やはり、ゼムは取り合おとはしない。あちゃ、という顔をするロア。メルフィナとライオネルが顔を見合わせて、慌ててネッコを制そうとする。
「ネッコ君、よせっ」

「向こうに戦う意思はありませんわ」
しかし、そんな二人の言葉も空しく、ネッコはこう叫んだ。
「貴様、僕を舐めているのか！　ヴァンシュタインの名をかけて決闘を申し込む！　ゼム、相手をしろ！」
そこで初めて、ゆっくりとゼムはネッコの方を振り向いた。
メルフィナはこれから起こるべく無為な戦いを思い、苦虫を噛み潰したような顔をした。決闘となれば、どちらかが死ぬ（それもおそらく、ネッコの方が）まで、ことはおさまらないだろう。そして、それは誰にも止める権利は無い。
「ヴァンシュタインの名をかけて、だと？」
ゼムが口の端をゆがめる。憎さとおぞましさが相まって、ネッコは思わず身震いした。
「……ヴァンシュタインの血、か。なるほど、面白いかもしれん。マリアの子……ルドヴィヒと私の……どちらが……」
ゼムは一人でブツブツと何事かを呟き、ちらりと自分の娘に視線をやった。
「ならばこちらも、ロックの名をかけて……わが娘が相手をしよう」
やれるな？とゼムは一言、娘にたずねた。娘は静かに頷く。
「おい、待てよゼム。僕は貴様と……」
「どうぞ、先に進んでいて下さい。すぐに追いつきます」
娘がゼムに向かって言った。それが意外で、少し驚くネッコ。

「……わかった。早く終わらせて来るように」
娘がゼムを下がらせるのを見て、向こうは完全にやる気なのだとネッコは悟った。
「……ふん。そっちがその気なら、やってやるさ」
ネッコの方をちらりと見ると、ゼムはそのまま娘を置いて先に進み始めた。忌々しげにその背中をにらみつけるネッコ。
（待ってろよゼム……この子を大人しくさせて、すぐにお前も……）
ネッコはきっと少女の方を睨んだ。少女は自分の頭の後ろにきている結び目を解いて、眼帯の役割をしている布切れを取った。露わになった深紅の瞳。ふと、ネッコの脳裏に禁術のことがかすめた。別段たじろぎも、怖気づきもしなかったが、手加減のできない相手だということを肝に銘じたのだった。
「……ゼムの娘、死んでも恨むなよ」
「ちょ、ちょっとお待ちなさい！」
エレインが叫んだ。
「どういう因果なのかはわかりませんが、あなた達二人が決闘だなんて……私の前でそんなことは許しません！」
ゼムの娘はおろか、ネッコすらもエレインの言葉に耳を貸そうとはしない。
「……エレイン様、ムダですよ」
ライオネルが呟くと、エレインは驚き、彼の顔を見た。

「なぜです！？」
しかし、ライオネルはなにも言わず、じっとネッコと少女の方を見つめていた。決闘など、王室育ちの自分には理解のできない次元の話であるというのに……生え抜きの兵隊であるライオネルは、自分の知らない世界を見知った、どこか諦観に似た表情を湛えていた。エレインは悔しかった。
「ライオネル……」
甘やかされて育った自分に腹が立ち、エレインは眉をひそめる。
（でも、それでもこんな若い血同士が……殺しあうなんて！）
次の瞬間、ネッコと少女は同時に杖を振りかざした。
「ファイアーボール！」
ネッコは炎の初級魔法を少女に対して放つ……否、放ったはずなのだが、杖は虚しく空を切って火の粉一片すら落ちない。
「……あ、あれ？」
魔法を習って最初に覚えるような、こんな初歩の魔法を失敗するはずがない。ネッコは慌てて第二弾を放とうとするが、火炎球はやはりでてこないのである。
一方、杖を構え、黙々と詠唱を続ける少女。この詠唱時間からすると、かなりの高度な魔法らしい。五段階ある魔法ＬＶのうち、ＬＶ３にまで至る詠唱の長さだ。恐らくまともに食らえば即死だろう。慌てて防御魔法を唱えるネッコ。しかし、振りかざす杖はまるでただの棒切れ

のように、魔法を発動しようとしない。
「なんだ……おかしい、おかしいぞ……！」
「どうした、ネッコ君！」
ライオネルの声。誰かが術を妨害しているのかとゼムの姿を探すが、彼は本当に娘をおいて先に進んで行ったようだ。
「焦らないで！」
メルフィナの言葉。
「くっ……魔法結界！　……ならば、ファイアーボール！　……どうして発動しないんだ！？……そうだ、魔石！　魔石なら……」
ネッコが腰の魔石を取り出そうとしたその瞬間、少女は自分のすぐ足元に杖を突き刺した。ネッコの血の気がひく。
「……地裂衝」
冷ややかな声で唱えられたそれは、まさしく魔法ＬＶ３の大魔法だった。杖の刺さった地面から豪快な音を立てて、地面の裂け目が広がり始める。ネッコは逃げようとしたが、もはや遅すぎた。大地の裂け目に足をとられて……。

（そうだ。それで気がつくと、僕はこんな洞窟の中に……しかし、どうしてまた洞窟の中なん

だ？）
　ネッコは起き上がり、キョロキョロと洞窟内を見回す。多少の眩暈がしていたものの、もうそのころは意識も随分とはっきりしていた。
「恐らく、以前に話した巨大モグラの通り道ね」
　メルフィナが、ネッコの疑問を察して答えた。
「あの子が地裂衝を唱えたすぐ下に、偶然にもモグラの掘り進んだ、この洞窟があったんだわ」
「そうか……みんな無事だったのか？」
　ネッコが訊ねると、ロアは偉そうに笑った。
「ふふん、俺がこんな高さから落ちて怪我すると思うか？エレインはライオネルがかばったし……そういや、メルフィナも無傷だな。運動神経良いんだ、司祭のクセに」
　ロアの言葉に、メルフィナは照れ隠しに笑みを浮かべた。
「……しかし、俺たちを巻き込むならまだしも、自分まで落ちてしまうなんざ、ドジな野郎……じゃなかった。ドジな娘だな」
　ロアが言った。少女はやはり、無関心な表情だ。
　ネッコは考えた。
（うっかり自分も落ちてしまったって……自分で唱えた魔法なのに？そんな馬鹿な！　マヌケにも程がある。一体どうして……まさか自分で飛び降りたのか？）

しかし、すぐにどうでも良い事だと思い、ネッコは気にしなくなった。
「さーて、どうする？この高さじゃ、ちょーっと登れねーぜ」
全員が天井に空いた穴を見上げる。建物三階ほどの高さだ。
「ゼム・ロックは？あれからもう随分たつ。娘を心配して戻ってくるだろうから、彼にロープを下ろしてもらうか……」
「ムダよ」
ライオネルの言葉を遮るように、少女が言った。
「もうとっくに先に進んでるわ」
「娘をほったらかしてか？」
ロアが少女に言った。
「……あの男は私が負けないのを知っているし、そこの彼に負けるようなら私はあの男に捨てられて終わり。それだけ」
「随分な言い様だな。自分の父親に向かってあの男、だなんて……」
「……」
少女は冷たい視線をどこへともなくそらす。
「それに、ネッコに勝てるって、えらい自信だな。こいつもなんだかんだで、まー大した魔法使いだ。お前が唱えた規模の魔法ぐらい……」
「いや、僕は負けただろう」

ネッコが言った。
「魔法を唱えられない魔法使いが、どうして勝てるんだ？」
ネッコは膝をつき、ゆっくりと立ち上がった。まだ足元が多少フラフラしているので、危なっかしい。メルフィナが慌てて支えようと立ち上がるが、ネッコはそれを遮った。
「……やはり、魔法が唱えられなかったのか？」
ライオネルが聞き返す。ネッコは頷いた。
「どんな小細工か知らないが……正々堂々と戦ったらどうなんだ？」
ネッコは冷たく少女に向かって言った。少女はどこへともなく視線をやって、彼を相手にしない。彼女の赤い瞳が日の光にあたってぎらつく様子は、思わず身震いしてしまいそうなほどの残酷さを醸し出している。果たして、なにを考えているのかも窺えない。
「……ふん」
ネッコは腹立たしげに少女の瞳から顔を背けた。
「……とにかく、そういうことなら進むしかないだろう。モグラが地上に顔を出す穴が、きっとどこかにある」
ライオネルが言った。四人は彼に同意の様子だ。少女だけは、どっちという意思表示もしていない。
「……ゼムの娘、名はなんと言う？」
ライオネルがたずねると、少女は彼のほうを見ずに答えた。

「……無いわ、そんなもの」
「おいおい、からかってんのか？」
ロアが言う。
「……無いものは無いもの。あの男は私を自分の娘だなんて思っていない。ゼム・ロックにとって、私はルドヴィヒ・ヴァンシュタインを倒すための単なる道具だから」
少女は事も無げに言う。
「道具だぁ？」
ロアが聞き返す。
「ええ、そうよ。あの男は、私を自分の娘と認めないことで、私を復讐の道具へと改造したの。だから私は、名前なんてつけてもらってない。あの男にとって、私は羊飼いにとっての羊、蛇使いの蛇以上の存在じゃないのよ。名前なんて必要ないわ」
「そんな……」
メルフィナが驚嘆する。
「たしかに、あの父親ならありうるな」
ロアが続いた。
「……お前はそれを許せるのか？」
ネッコが少女に訊ねる。
「関係ないわ。私はルドヴィヒを倒すために生まれた。物心ついた時からそう教えられたから、

私はそうするだけ」
ルドヴィヒの名前が出て、眉をひそめるネッコ。
「……ならば、特に我々の敵、というわけでは無いのだな」
ライオネルが訊ねる。
「ええ、あなたたちに戦意は無いわ」
少女はちらりとネッコの方を見る。
「……ルドヴィヒの孫がどう思うか、それは知らないけど」
全員の視線がネッコに注がれる。当のネッコは複雑な気持ちだった。彼にとってこの少女は哀れむべき相手のようであり、また憎むべき相手でもある。
「……今はいがみ合ってる時じゃないんだろう」
ネッコが言うと、ライオネルは頷いた。
「そうだ。一刻も早くここを出なければならない。気温は低いし、食料もいつまで持つかわからないからな」
「どのぐらい持ちそうですか？」
メルフィナがライオネルに訊ねる。
「ゼムの娘をいれて六人分……節約して、十日持てばいい方だ」
「洞窟の規模が分からない分、きついな」
ロアが言うと、少女は自分の荷物を抱える。不思議そうにそちらを見るエレイン。

「……いいわ。私は数の内じゃないから。さよなら」
少女は無愛想にそう言うと、そのまま踵を返して洞窟の奥を目指し始めた。
「え……ちょっと」
とと……と駆け寄り、少女の肩にそっと手を沿わせるエレイン。
「そんな事おっしゃらないで、一緒にここを出ましょう。ね？一人じゃ危ないわ」
エレインが優しい笑顔で言った。心持ち意外そうな顔をする少女。
「……」
少女がなにかを言おうとするのを遮るように、メルフィナが続いて言った。
「そうそう、こうして危機をともにすることになったのも、きっと何かの縁……ただ、一緒に行動するに当たって“ゼムの娘”ではあまりにそっけない感じがするわ」
「と言っても、お名前が無いんでしょう？名前は、生きていくのに、きっと必要ですよ」
エレインが少女に促す。
「……必要ないわ」
「必要ですよ」
エレインは食い下がらない。
「……」
少しの沈黙の後、少女は「それで？」とでも言いたげな視線をエレインに送った。
「ですから、ご迷惑でなければ、ここで私たちにあなたのお名前をつけさせて頂けません

か？」
「おいっ、ペットじゃねーんだぞ」
すかさずロアがつっこむ。しかし、エレインには聞こえていない様子だった。
「……」
黙ったままの少女。
「どうです？」
エレインが改めて訊ねると、少女はどうでもよさそうにこう言った。
「……どうでも」
「まあ素敵！」
ゼムの娘本人から承諾らしきものを得ると、顔を見合わせほころばせるエレインとメルフィナ。ロアたち男三人には、一体なにが素敵なのか今一つよく分からなかった。
「しかし突然言われても、迷いますね」
「それではエレイン様、マーガレットというのは如何です？」
「ええ、悪くないですね。でも同じ花の名前なら、フリージアなんていうのも」
「フリージア……花言葉は純潔でしたっけ」
「まあメルフィナさん、花言葉にはお詳しいんですか？」
「少しだけなら。ラヴィーンには百花繚乱の庭園がありますから、自然と覚えました」
「でしたらアマリリスというのはどういう意味ですか？」

「内気、だったかしら」
「あ、結構そんな感じ」
（内気っつーよりは陰気の間違いだろ）
ロアがゼムの娘を眺めつつ、心の中で呟く。
「でも少し重たい感じがしますね。リリィなんていうのも……」
「マリーゴールドは……」
「意外性をもたせてチューリップとか……」
「たんぽぽ」
「銀杏」
しばらくは花の名前を出し合っていたエレインとメルフィナだが、やがてお互いのもちネタが尽きると次に神話に登場する女神の名前や有名な女優の名前、果ては知人や町で見た表札の名前を言い合い、いっこうに決定する様子がなかった。うんざりするロアとネッコ。ライオネルは楽しそうなエレインの姿をほほえましい表情で見ていた。ゼムの娘は相変わらず、どうでもよさそうだった。少なくとも傍からはそう見えた。

メルフィナが腕を組んで、うーんと唸っている。
「……えーと、それではセーラというのは？有名な貴族の娘の名前で……」
「なんでもいいから早く決めろよ」

ロアが腹立たしげに言うと、困った表情で顔を見合わせるエレインとメルフィナ。
「それでは、いままで出た中で気に入った名前を本人に決めてもらうとか」
「あ、それがよろしいわ。どうですか？ゼムの娘さん」
全員の視線が少女に注がれる。
少女は壁を背にもたれたまま、視線を宙へとやっている。
「……どうでもいいことだから、私にとっては」
彼女を除く全員が、がっくりとうな垂れる。
「あ……そうだわ、アムリタよ！　アムリタというのはどうかしら？」
「アムリタ？」
「ええ。私の飼っていたネコの名前なんですが、昨年死んでしまって……その子、神様みたいにいい子でしたの」
エレインが言った。そのアムリタというネコの事を思い出したのか、少し表情が曇る。
「アムリタというと……あのオッドアイの」
ネコの存在を知るライオネルが言った。
「そう！　この子の赤目と黒目とは違うけど、同じオッドアイには変わり無いわ。ああ、なにか引っかかっていると思えば、それだったのね！」
エレインが少女の色違いの瞳をまじまじと見つめる。少女はついと顔を背けた。
「あー！　じゃあもうそれで決定だ！　お前らに任せてるときりがねーよ。これからこのゼム

の娘はネコのアムリタだ。それで決まり！　さ、急ぐぜ。じっとしてると寒くて仕方がねーよ」
ロアは岩から腰を上げると、高く伸びをした。
「……いいのね？」
自分が名付け親になれなかったメルフィナは、少し残念そうにアムリタに訊ねた。
「……」
やはり、何の興味も無さそうな少女……アムリタの表情。メルフィナは困った顔をしていたが、やがて心持ちにっこりと微笑む。
自分の名前なのに、どうしてこうも無関心になれるのだろう？……ネッコは不思議に思った。もし自分が同じ立場なら、こんな態度をしていられるだろうか。
（……あるいはこの子は……自分に価値を感じていないのかもな。しかし、どうして……？）
エレインは飼い猫に名前を覚えさせるかの如く、少女にアムリタと連呼している。当のアムリタはエレインから目をそらし、何か別のことを考えているようだった。あるいは、何も考えていないのかもしれない。他人に何事をも悟らせない顔を、アムリタは心得ているようだった。
（……親が親だから、人に大事にされたことが無いのかもしれないな。人に大事にされない子供は、自分に価値を感じない）
ネッコは思った。
かくして、五人はゼムの娘、アムリタを連れたって、モグラの穴を抜け出すために歩を進め

た。

33

味気のない地下の道を行くエレイン達。先頭を足早に歩いていくアムリタ。そのアムリタに無理やりにでも話しかけているエレイン。その後ろを影のようについていくライオネル。ネッコ、ロア、メルフィナは最後尾をのんびり歩いていた。ネッコの持つランプが暗い洞窟の道を薄暗く照らす。

「しっかし長い洞窟だな。昔を思い出すぜ」

「昔？」

ネッコがロアの方をランプで照らした。

「ああ、俺はトレジャーハンターって事は言っただろ。昔は財宝目当てによく地下の遺跡に潜り込んだもんさ」

「まあ、古代の財宝なんてロマンチックですね」

メルフィナが声を上げる。

「そうでもないぜ。俺って方向音痴だろ。一番最悪だったのは財宝見つけたのはいいけど、帰り道わからなくなって半年ぐらい地下の迷宮さまよってた事かな。いやー吸血鬼の俺でもあの

時はお天道様が恋しくなったぜ」
「お前、馬鹿だろ。どうやって半年も食料食いつないだんだよ？」
「俺は吸血鬼だから二、三週間食わなくてもなんとかなるのさ」
「その割には毎日ガツガツとよく食うな。人の三倍は食ってるぞ。で、残りの五ヶ月間とちょっとは？」
　ネッコがロアに聞く。
「あとはその辺にいたネズミとかコウモリとか食ってたかな」
「うわ……」
　聞こえたのかエレインが気持ち悪そうに口を押さえる。
「ロアさん、コウモリは共食いですね」
　メルフィナがニコニコした顔で言う。
「あー、しかし道のりがこうも単調だと退屈で死にそうだぜ。なんかトラブルでも起こらねえかな」
　欠伸をするロア。もう半日近く歩いているはずだ。もっとも空が見えないので正確な時間はわからないが。
「同感だね。たまには強いモンスターでも出てくれないと困る」
　ロアに賛同するネッコ。その時、ロア達の後ろから高笑いが聞こえてきた。
「あーはっはっは。やーっと見つけましたよ。やはり、あの虫騒動の黒幕はあなた達でしたか。

ここであったが百年目。これも神のご加護でしょう。さあ、大人しくその首差し出しなさい、ロア！」
嫌な予感がして振り返るロア。予想通りそこにはリュネットが一人で立っていた。
「よかったですね。強いモンスターが現れましたよ。さあ、あなた達二人でなんとかしてください」
メルフィナが笑ってロアとネッコに言う。
「……遠慮しとく」
「……僕もだ」
げんなりとした顔で言う二人。
「誰がモンスターですって！　モンスターなのはそこの吸血鬼でしょう！」
「なあ……どうやって俺を追ってここまで来たんだ？」
当然の疑問を口にするロア。
「勘です」
「は？」
「言い換えれば天の声です。私とおまえは運命の赤い糸で結ばれてるんです。だから何処に逃げようと無駄です。神がおまえの居場所を私に教えてくれるのですから」
観念しろとばかりに剣をロアに向かって突きつけるリュネット。
「おおかた偶然我々の足跡を見つけて、それを辿って来たのだろう。訓練されている者ならそ

う難しいことではない。それにお主、赤い糸の意味を履き違えているぞ」
ライオネルが冷静に言う。
「ギクッ……な、何を根拠にそんなことを。神を信じぬ罰当たりどもめ。それに神の使徒たる私の言葉のあげあしを取るとは、もう許せません！　全員ここで神の裁きを受けなさい！」
リュネットが怒鳴って魔法を放つ。リュネットの剣の先から雷がほどばしる。
「うわっ」
回避行動をとるロア達。雷は洞窟の壁に当たり、いたるところで火花を散らす。地響きを立てて上から岩が降ってきた。
「こらっ！　やめろ。洞窟が崩れるだろうが」
雷から逃げながらロアが怒鳴る。
「あーっはっはっはっは。逃げろ、逃げろ。すぐに黒焦げにしてあげるわ」
リュネットは聞いていない。笑いながら雷を放ち続けている。
「……赤霊砲」
雷を避けていたアムリタが呟いた。
アムリタの手から放たれた赤い光線がリュネットに当たり派手に爆発する。数メートル吹き飛ばされてそのまま動かないリュネット。とたんに静かになる洞窟内。
「……今のは死んだんじゃないか？」
ロアがアムリタを見て言う。

「……攻撃されたから反撃しただけ」
アムリタが静かに言う。
「だけど今のはちょっとやりすぎ……」
メルフィナも心配そうにリュネットを見る。しかし、その顔が引きつる。リュネットが立ち上がったのだ。見るところたいした傷もなさそうだ。さすがのアムリタもこれは意外だったようだ。わずかだが驚いた顔をしている。
「こ……こ、この神の敵どもが……こんなことしてただで済むと……」
よろけながらもこちらに向かってくるリュネット。
「あのレベルの魔法をまとめにくらって立ち上がるなんて、本当にモンスターですわね……」
メルフィナが呆れた様に言う。
「……見てなさい……今に天罰が下るわよ……」
リュネットが言う。その時、リュネットの真上の天井から岩が落ちてきた。グシャッという音とともに岩の下敷きになるリュネット。
「なるほど……天罰が下ったな」
ロアが言う。
「……すごい、まだ生きてる」
アムリタが呟く。なるほど岩の下から出ているリュネットの手がピクピク動いているのが見える。

「でもさすがに気絶してるみたいだな。で、こいつどうする？」
ネッコが言う。
「ほっときゃいいさ。これぐらいじゃ死なないってことが今さっき証明されたばかりだろ」
ロアの答え。
「でも、一応回復魔法かけときましょうか？」
「やめておきなさい。そんなことしたらまた起き上がって襲い掛かってきます」
メルフィナの同情を遮るエレイン。エレインもリュネットは嫌いらしい。
「そのほうがいい。さて、無駄な時間くったな。さっさと先急ごうぜ」
そう言ってロアは歩き出した。他の者も歩き出す。しばらく歩いたところでライオネルが立ち止まった。
「どうしたのです？」
エレインがライオネルを振り返る。
「いや、先ほどのところで少し落し物をしたようです。エレイン様達は先にお進みください。私もすぐに追いつきますから」
「そうですか。迷路みたいな洞窟なのですから迷わないようにしなさいよ」
「ご心配なく」
そう言うとライオネルは先ほど来た道を戻っていった。

洞窟の中を歩くロット、ガウェイン、ルーシィ。リュネットと行動を共にしていたはずのこの三人が辺りに気を配りながら進んでいた。
「しかし、リュネット殿はどこまでいったんでしょうな？」
ガウェインが呟く。つい先ほどまで一緒に行動していたのだが突然、『見つけた！』と叫んでリュネットは走り去ってしまったのだ。もちろん三人はすぐに追いかけたが結局見失ってしまった。
「ロット様。道は本当にこちらでよろしいのですか？」
ルーシィが心配そうに聞く。
「ああ、リュネット殿の足跡を追っている。間違いない」
ロットは下を向いて地面を注意深く見ながら歩いている。
「足跡？そんなの残っておりますか？」
ガウェインが不思議そうに地面を見る。そこには足跡など見つけられない。
「あるよ。慣れている者でないと見つけられないような微かなものだがな。気になるのはリュネット殿の足跡とは別の足跡があることだ。五人、いや六人だな。六人とも人間または人型の種族、おそらく女性も混じってる。おそらくリュネット殿はこれを見つけて走り出したのだ。たいしたものだ、私でも彼女の行動がなければこの足跡には気付かなかった」
ロットは感心したように呟く。その時、洞窟がひどく揺れた。激しい轟音が洞窟内を共鳴して鳴り響く。

「爆発音がしたようだが」
ガウェインがのんびり言う。神経が図太いのだろう。ルーシィなどはびっくりして震えている。
「リュネット殿が心配だ。急ぐぞ」
ロットは走り出した。
しばらく行くとひどく荒れている場所に行き着いた。ロットが辺りを見回す。岩の下に押しつぶされているリュネットを発見する。ロットはリュネットに駆け寄った。
「リュネット殿！　大丈夫か！」
岩の下のリュネットに返事はない。
「すぐに岩をどけます。私にまかせてください」
そう言うとガウェインは人よりも大きいその岩を抱え上げた。人間としては信じられない怪力だった。そのまま岩を道の端に投げ捨てる。ロットがリュネットを揺り動かす。
「駄目だ、完全に気を失っている。誰がこんな酷い事を……ルーシィ、回復魔法を頼む」
「は、はい」
ルーシィがリュネットの側で魔法を唱え始めた。
ロットが腰の剣に手をかけ、岩場の陰になっている所を睨んだ。
「誰かは知らぬがそこにいるのはわかっている。出て来い」
ロットが言う。すると岩場の影からライオネルがゆっくりと姿を現した。ライオネルを見て

驚くロット。ガウェインは腰の剣を抜いて構え、ルーシィはライオネルとロットの両者を心配そうに見ている。
「誰かと思えば珍しいところで会うものだな、英雄騎士ロット。このような所で何をしている？」
ライオネルが静かに言った。立ち姿に微塵の隙も無い。
「何だ。ロット殿の知り合いでしたか」
ガウェインが構えた剣を降ろす。
「ライオネル殿、王女近衛隊長のはずのあなたこそ、このような所で何を？」
「ライオネルだって！？　あのダイ＝シャンか」
ガウェインが驚いた声を上げる。
ライオネルはかつて北方の境界地域でレオデグランス軍の指揮官の一人として魔族として戦っていた。二十年前に境界地域で起こった大規模な魔族侵攻。数年にわたる壮絶な戦いの末、ライオネルの部隊は魔族を撃退した。ライオネルはその時の戦功によってアヴァロン王から、かつてアトロと共に戦った偉大なる戦士ラーデゥイがアトロから与えられた栄光の戦士という意味の古語、ダイ＝シャンの称号を授かった。
「英雄騎士ロット、なぜ貴公がリュネットと行動を共にしておる？」
「一緒にダルフェンディアで起こった虫騒動の調査をしています。どうやら、虫達はこの道を通ったようです」

「そうか。これは虫達の通った穴か」
「しかし、ライオネル殿。リュネットはいったいどうしたのです？なぜこんな酷い事に？」
「私の連れの一人にリュネットが目の敵にしておる者がいる。そのためにひと悶着起こってな」
「そうでしたか……」
「ちょうどよい。あの謎の虫の事は私も気になっていたところだ。貴公らと私達は別の道を行こう。その方が虫たちが何処から来たかを突き止めることのできる可能性も高くなるだろう。リュネットが目覚めて、またお互い鉢合わせになったら困るしな」
「そうしたほうがいいみたいですね」
ロットがまだ意識を失ったままのリュネットを見て言う。
「虫の事が何かわかったら、レオデグランスのアヴァロン王に使いを出して虫の事を知らせてくれるように頼む」
それだけ言うとライオネルは歩き出した。その姿を見送るロット。

「ライオネル、落し物は見つかりましたか？」
エレインがライオネルに聞く。
「はい。うまく見つかりました」
「そう、よかったですね。でも、落し物などしないよう気をつけてください」

「以後気をつけます」

34

第一ミルチア城地下、そこでアルテオムは水晶を眺めていた。その水晶を見ながら、にやりとする。
「何をニヤニヤしておるのだ？」
「またお前か。暇な輩だ」
背後から現われたラウドに、アルテオムが言う。
「相変わらず玩具ばかりであそびおって……準備の方はどうなっておるのだ？」
「フ……表立って行動するのは控えなければならんのでな。なかなか動きにくいのだよ。だが、その問題も解消されそうだがな」
そう言いながら、アルテオムは再び水晶の方へと向き直る。
「これを見てみろ」
ラウドがアルテオムに言われ、水晶を覗き込む。
「ほう、透視の術か……」
「あぁ、術の魔力を封じた玉を、小型の蟲に取り付け、こちらから魔法で遠隔操作しているの

だ」
　水晶にはリュネット達と、メルフィナ達が別々に映し出されていた。
（ほう、あのドラゴンか……）
「して、これが何か関係あるのか？」
「フフフ……これであの老いぼれを始末できるのだよ」
　そんなことかとばかりに、ラウドは水晶の方へと視線を戻す。そこに、エレインの姿が映し出された。
（こやつは……！　なるほど、こやつがここへ向かっているとは……ククク、これは好都合だ）
「どうかしたのか？」
「なんでもない。我が輩は少し用を思い出したので、これにて失礼する。しばらくの事は貴様に任せるとする」
　そう言って、ラウドは闇に姿を消す。
（……ふん、まぁいい）
　アルテオムは小部屋をでて、地上へと上がる。
「誰か、第二ゲートにお客様だ。城の王の間へ案内しろ。大事なお客様だ。丁重にお連れしろ。わかったな」
　言われた二人の兵士が、慌てて第二ゲートへと向かった。

「これでいい……後は簡単だ」

リュネット達が洞窟を進むと、そこには鉄でできた大きな扉があった。

「扉……ですわね」

リュネットが鉄の扉を見上げながら言う。

「ダメです。びくともしません」

ガウェンが扉を押しながら言う。四人がうーんと唸っていたその時、地を引く音と共に扉が徐々に開いていく。

「虫か！？」

ロットが剣に手をやる。扉が開ききると、そこには二人の兵士が立っていた。

「お待ちしておりました。王がお待ちです」

その二人の兵士の丁寧すぎる態度に、唖然とする一向。

「ささ、我々に着いてきてください」

そう言うと、兵士達は歩き出す。四人は顔を見合わせるが、とりあえず兵士達の後に続く事にした。

「ここはどこですの？」

リュネットが、歩きながら前を行く兵士に問う。

「ここはミルチア国第一ミルチアです」

「ミルチア？あの穴はミルチアに繋がっていたのか」
ロットがなるほどとばかりに言う。
「では、あの虫たちを送り込んできたのはミルチアということになりますわね？」
「虫？さぁ、我々は何も……」
「あの穴は、無数の出口と繋がっております。その一つが、たまたまここと繋がっていただけでしょう」
兵士二人が交互に話す。
「では、何故王が我々をまっているのだ？」
「我々は何も聞かされていないのです。ただ、貴方達が大事なお客様であるということ以外は何も」
「ふむ……」
考え込む三人。ルーティだけは、のんきにロットの後をついているだけだった。しばらく歩き続け、一向はミルチア城へと辿り着いた。

「失礼します」
アルテオムはそう告げ、王の間へと入る。
「アルテオムか。何用だ？」
「閣下に大事なお話があります。できれば二人にさせていただけないかと……」

アルテオムの言葉に、しばらく考えるクラモリ。
「いいだろう。他の者は下がっておれ」
クラモリの言葉に、近衛、大臣達が王の間を退室する。
「さて、話とはなにか？」
アルテオムはその問いに答えず、腰の剣を抜く。それを見たクラモリは、背に隠してある短剣に手をやる。その時、アルテオムは剣で自分の肩を貫いた。
「な……」
驚愕の声をあげるクラモリ。アルテオムは剣を肩から抜き、投げ捨てる。そして、おもむろに小型のボウガンを取り出す。
「これ以上老いぼれに用はない。死んでもらおう」
そう言って、ボウガンを発射する。放たれた矢は、あっさりとクラモリの額に突き刺さった。言葉なく崩れ落ちるクラモリ。
「閣下、お客様をお連れ―」
入ってきた兵士がそこまで言って、アルテオムに矢を放たれ、崩れ落ちる。
「な、なんですの……」
一緒に入ってきたリュネットが、その光景を見て声をあげる。そのリュネットにボウガンを投げるアルテオム。リュネットは反射的にそのボウガンを受け取る。
「誰か、おらぬか！」

アルテオムが声を上げる。そこに、数人の兵士達と、大臣が駆け込んでくる。
「どうなさいました……！　お、王が！」
「こやつが、王に矢を放ったのだ！　私は閣下を守ろうとしたが……」
アルテオムが、負傷した肩に手を当てながら言う。
「どうかなさったか、リュネット殿」
そこへ、ロット達が駆け込んでくる。
「仲間も居るのか、こいつらを捕らえよ！」
アルテオムの言葉で、リュネットたちを取り囲む兵士達。
「私が王をですって？冗談じゃない。退きなさい。退かないと、どんな目にあっても知りませんわよ……！」
「待て、リュネット殿。ここは大人しくしたほうがよさそうだ」
ロットがリュネットを制止する。
「濡れ衣を着せられて、黙ってろって言うのですか！」
「ここはミルチア城だ。我々が抵抗したところで逃げ切れはしない……今は、大人しくしておいたほうがいい……」

ミルチア城地下二階。ここにある地下牢の一室に、リュネットたちは入れられていた。武器だけでなく、着ているもの以外はすべて奪われていた。

「なんですの……きて早々……一体どうなっているんですか！」
「どうやら、我々は罠にはめられたらしいですね」
ロットが言う。
「罠とは？」
「暗殺者に仕立て上げられたってことですよ」
ロットが静かに言う。それを聞いて、事を察したリュネットは何も言わなくなる。
「あの兵士にのこのこと付いて行った我々が馬鹿だったな……」
ガウェインが嘆くように言い放つ。
「私達はどうなるんでしょうか？」
ルーシィが心配そうに聞いた。
「このままだと、公開処刑だろうな。我々が王を殺したという事実を、国民に知らしめることが必要だろう」
「何故必要なのです？」
「我々を暗殺者にするからには、徹底的にやるだろう。それには、そういった公開処刑みたいな方法が一番早くて、やりやすいものだ」
「なんにせよ、助かる方法を考えねばな」
ロットに続いて、ガウェインが言う。
「方法か……」

ロットが誰に言うでもなく、天井を見つめながらそう言った。

「レキ隊長！」
一人の兵士が兵御所に駆け込んできた。
「レキ隊長！　王が殺されました！」
「なんですって！」
コーデリアが驚きの声を上げる。
「異国の四人組がきて……その四人組が殺したと」
「誰がいって言っているんだ？」
「アルテオム様です」
その名前を聞き、疑問の表情を浮かべるコーデリア。
「状況はわかっているのか？」
「はい、王とアルテオム様が王の間で話をされていたとき、急に異国のものが入ってきて、王を暗殺したと」
「それは、アルテオム殿が言っているのだな？」
「はい、ご本人も負傷されたようで」
「負傷……か」
少し考え込むコーデリア。

（正面から入ってくる暗殺者……？しかも四人組である必要は？そして、王と二人だったアルテオム……）

「……少し城の方へ行ってみる。皆は待機していてちょうだい」

考え込んだ後、コーデリアそう言って、馬を走らせ、第一ミルチア城へと向かった。

黙々と洞窟を歩きつづけるロア、ネッコ、メルフィナ、エレイン、ライオネル、そしてアムリタの六人。エレインのペースに合わせて休憩を入れていたため、それほど疲労が溜まっていたわけではなかったが、延々と土くれが続く光景はとにかく退屈だった。ひょっとして、出口など永遠に見つからないのではないかという危険が彼らの脳裏をかすめることもあったが、いまはただ前に進むしかなかった。

しばらく歩きつづけると別れ道に遭遇した。ぽっかりと左右に開けた通路。ロアが一歩前に出る。

「ど、ち、ら、に、し、よ、う、か、な……」

「まてまて、そんな安直な……」

ライオネルがロアに言った。ロアが振り返る。

「俺の勘は当たるんだよ」

（思いっきりクジ運任せだったじゃない……）

メルフィナは思った。

「……左手法を提案するわ」
最後尾、エレインの隣にいたアムリタがぽつりと言った。全員の視線が集まる。
「なんだそりゃ」
ロアがアムリタに訊ねる。代わりに答えたのは、ライオネルだった。
「左手法というのは、常に自分の左側を壁伝いにして進む迷路探索の方法だ。そうすれば、複雑なダンジョンや迷宮でも堂堂巡りしたりせず、確実に進むことができ、必ずいつかは脱出できる」
「おお、なるほど。そいつはいいな！」
ロアが大げさに感心した。
「よく知ってるもんだ、そんなこと」
ネッコがアムリタに言う。
「……冒険者なら、知っておいて当然の知識の一つだと思うけど」
アムリタの厳しい一言。ネッコとロアはお互いの顔を見て、苦笑いを浮かべた。
（……へえ……）
そんなアムリタを尊敬の眼差しで眺めるエレインだった。

それから、地形はやや複雑になっていった。似たような曲がり角や袋小路などが幾度となく続くところを見ていると、同じところを何度も巡っているような錯覚を覚える。しかし例の左

手法に準拠して進むうちは、確実に前には進みつつあるのだろう。ライオネルとアムリタが居なかったらと思うと、少しぞっとするネッコ達であった。
退屈紛れにロアが口を開いた。
「……ところで、ここってモグラの穴なんだよね」
「そのはずですよ」
メルフィナが答えた。
「こんな馬鹿でかい穴を掘るモグラを見てみたいもんだが……ちっともいねぇんだな」
「見てみたくなんてありませんわ。恐ろしい」
メルフィナがそっけなく言葉を返す。
「なんでだよー。こんだけデカけりゃ、捕まえりゃ食料にも困らないぜ」
「食料！」
エレインが思わず声を上げる。
「……巨大モグラはとうの昔に絶滅しているわ」
アムリタがぼそりと言った。普段あまり口をきかない彼女の言葉は、特に全員の気を強くひく。その中でもエレインは、アムリタから一体どんな話がきけるのか興味深々といった様子だった。
彼女はアムリタに強く惹かれる何かを感じていた。王室育ちの自分とはまるで逆の境遇、同じ性、近い年齢、いや、それ以上になにか引っかかるものがアムリタから感じられた。ただ、

それが何なのかはエレイン自身にもまだよく分からなかった。
「……じゃあ、この穴はモグラがまだ生息していた、ずっと昔のものなんですか？」
エレインがアムリタに訊ねた。
「モグラが掘ったのは、そのきっかけになる穴。もともとはこれほど大きく無かったはずよ。もしこれほど巨大な穴を、それだけの大きさのモグラが掘り進んでいったら忽ち地盤沈下を起こすわ」
「じゃあ、どうしてこんなにデカい穴になったんだ？」
ロアが訊ねる。アムリタは壁の一部を引っかいて、土くれを掌に取った。
「樹海の豊富な地下水が、長い年月を経てモグラの穴を溶食してできた洞窟、と考えるのが妥当ね。土に含まれている水分と、この気温の低さが何よりの証拠だわ。ひょっとするとどこかに地底湖もあるかも知れない」
「地底湖……」
メルフィナがぽつりと呟いた瞬間、先頭を歩いていたライオネルが突然立ち止まる。
「どうしたライオネル？」
ライオネルのすぐ後ろにいたネッコが訊ねる。
「見ろ……」
ライオネルが促すと、全員が彼の前方を覗いた。通路の先は巨大な空洞になっていて、壁に沿うように半月状に道が続いている。その頼りない道を埋め尽くしてしまいそうな勢いで、空

洞の床に広がるのは巨大な水溜り。即ち、アムリタの言ったとおりの地底湖があったのだ。
「ほ、本当だ……！」
まるで預言者のようなアムリタの言葉に、驚きを隠せないネッコ。
「ちなみに、この水は飲めるわ。土が雨をろ過して溜まったものだから、清潔そのものよ」
アムリタが言った。
「……すごいわ、アムリタ！」
自分よりも年下の少女が、自分の到底知りえない知識を披露するのを見て感激するエレイン。思わず感嘆の声を上げる。
しかし、アムリタは不愉快そうに彼女を睨みつけた。
「……前々から言おうと思っていたけど、洞窟内であまり大きな声を出さないこと。反響で地盤が崩れて生き埋めになりたい？」
「う……」
「それで無くとも、よく響く洞窟内で大きな音を立てると、その反響が鼓膜を破ったりする事だってあるわ。ここはあなたの城のお庭じゃないのよ？お姫様が享楽のために旅をしているなんて思われたくなければ、自分の置かれた状況をよく調べ、よく知ること。わかった？」
「う、うん」
エレインが申し訳無さそうにしているのをみて、ライオネルが渋い顔をした。
「……アムリタ、君の言いたいこともわかるが、すこし言葉が……」

「あ、いいのですよ、ライオネル」
アムリタを嗜めようとするライオネルをエレインが止めた。
「本当の友人こそ、厳しい言葉をかけて下さるもの。お父様がそう言ってました。ありがとうアムリタ、これから気をつけるわ」
叱られたというのに、エレインはなぜか頬を紅潮させ、アムリタに微笑みかける。
彼女の唯一の肉親である父、アヴァロン王は、幼くして母親を亡くしたエレインを不憫に思い、どちらかというと甘やかせて育てた。おまけに、その身分の高さ故に彼女を叱る者もおらず、エレインは自由気ままに成長していった。また、生まれつき分別に恵まれた彼女だから、言われたことはきちんとこなせるし、他人の気持ちを思いやる優しい心の持ち主であったから、つまりとりたてて周りが叱る必要も無かったのだ。
しかしエレインは、そんな彼女自身の幼少時代に、なにか一種の物足りなさのようなものを感じていた。それが何なのかは彼女自身にもまだよくわからない。しかしその物足りなさを埋めてくれる何かが、いまアムリタという自分よりも小さな少女が放った言葉の、その節々から感じられたような気がしたのだった。エレインは不思議な高揚感を感じた。
「アムリタ、これからも私に至らないところがあれば、是非教えてくださいね」
エレインがアムリタに言った。相変わらず、特に反応らしい反応も見せないアムリタ。
一方ネッコは、エレインとアムリタのやり取りを妙な気持ちで見ていた。
（アムリタって、こういう面もあるんだな。いっつも仏頂面で、他人を見下しているような雰

囲気だったけど、意外だな……でもエレイン様以外にそういう素振りを見せるつもりは無さそうだ。一応アムリタも、エレイン様には心を許したってことか）

ふと、気に入らない事が頭に浮かんで、さらにネッコは考えつづけた。

（……てことは、彼女はエレイン様以外の僕たちの事を信用していないんだな。ふん、それなら別に構やしないさ。構やしないが、ただ、気になるのは……僕が最初にアムリタに会ったとき、あの自然公園で……彼女はこんな態度だったかな？あれはなにかの嘘か冗談だったのか？）

アムリタと目が合い、思わず視線をそらすネッコ。どうでもいいことだと思い、考えるのもやめた。

一行は地下水のほとりでしばらく休憩した後、少し進んだ場所にいくつもの小さな袋小路を見つけた。中心の広場を基点に、間隔や方向をデタラメに七つ、八つの通路が広がっていて、その一つ一つがちょっとした空間になっている場所だ。近くに地底湖……即ち、水があるし、休むには最適の場所だった。

「よし、もう今日はここで休もう。まだ歩けるが、ここよりいい環境はそう見つからないだろう。休めるときに休むのがいい」

全員が賛同する。

「ここなら全員に個室を与えることができるが、各部屋に火を持っていって、くれぐれも消さ

ないこと。そして何かあった時にはすぐに中央の広場に集合だ」
ライオネルが言うと、全員が了解の返事をした。
「よし、では解散だ」

なかなか寝付けないでいたネッコはぼんやりと松明の炎を眺めていた。
（うーん、どうしたんだ。体は疲れているのに、無闇に神経が昂ぶっている。顔でも洗うか）
ネッコはふらふらと立ち上がると、水を求めて歩き始めた。部屋を出て、広場を通ってしばらく道を戻ると例の地底湖がある。ネッコはそこへ向かった。
地底湖のある巨大な空洞の手前まできたとき、ぴちゃぴちゃと水の音が聞こえた。
「ん……？おい、誰かいるのか？」
通路を影にして、声をかける……しかし、返事は返ってこない。
気のせいか、と思いつつ地底湖のある空洞に出ると、やはりそこには人影があった。アムリタである。
「……む」
アムリタはネッコに気を止めず、湖の水をすくって顔を濡らしていた。彼女と二人と言うのは、なんとなくネッコにとって気まずかった。
（爺さんやゼムを巡っての関係もある。まだ決着のついていない決闘に関しても、なんとなく

うやむやになっているだけだ。しかし……）
　ネッコはちらりとアムリタの方を見た。彼女は、持ってきていた水筒を湖の中につけると、水筒の中に水を補給した。水筒の中からこぽこぽと泡が浮き上がる。
（……でも、この子との間にそんな諍いが無かったとしても、きっと苦手だろうな。なにしろ、なにを考えているのかさっぱり分からないもんだから……）
　アムリタから少し離れた場所に、黙って腰を下ろすネッコ。持っていた手ぬぐいを濡らしてまず顔を拭いた。次にうなじを濡らすと、もやもやしていた気分がいくらか晴れた。
「訊かないの？」
　ふいに、アムリタがネッコに訊ねた。
「……何をさ？」
「私と戦ったときに魔法が唱えられなかった事。知りたくないの？」
「ん……別に」
　そういえばすっかり忘れていたな、とネッコは思った。
「ばらしちゃっていいのかい？秘密主義者さん」
　ネッコは彼女の無表情を皮肉って言ったのだが、アムリタに全く動じた様子はない。むしろ、なんとなく言い過ぎたような感じがして気が引けたのはネッコの方だった。
「……あれはこの瞳の力よ」
「……へ？」

「この瞳に睨まれた者は、魔法が唱えられないの。対処法もあるわ。私の目を見ない、即ち、自分の目を瞑れば魔法を唱える事ができるわ。もっとも、視界ゼロじゃ照準を合わせるのに苦労するでしょうけど」

「……！」

思いがけず彼女があっさりと自分の大切な秘密を、それもその対処法まで話したことに驚くネッコ。自分に話すと言う事は、すなわち彼女の目標であるルドヴィヒに話す事と大きな違いは無い。宿敵に対する自分の優位（それこそ、瞳の魔法封じは魔法使いであるルドヴィヒに対して、絶対的な優位であったはず）を捨て去って、いったいどうしようと言うのだろう？思いがけない彼女の告白に、ネッコはただ当惑するばかりだった。

「……それを話す意味がわかっているのか？」

ネッコが訊ねる。アムリタはちらりとネッコの方を見た。

「ルドヴィヒぐらいの魔法使いになれば……悪魔の瞳の対処法ぐらい知っているはずよ。わざわざ私がバラさなくてもね。私がこのことを話したのは、ただ私があなたの敵じゃないことを分かってもらおうと思って」

「敵じゃない？僕の爺さんを狙う限りお前は敵だ、あたりまえだろう？」

ネッコは冷たく言った。

アムリタはまっすぐ湖を隔てた向こうの壁を眺めていた。心持ち高い鼻と落ち着いた黒い瞳、横顔ならば普通の少女以外のなにものでもない。ネッコの側からは赤い左眼は見えなかった。

「ただ……」
ネッコが口を開く。
「……」
「……」
「……」
「……む……まーいい」
悪魔の瞳について話してくれたことは嬉しい、と言おうとしたネッコだが、つい口をつぐんでしまう。彼はこういうことに関してほとほと苦手だった。
「……素直にならないと、他人とは思うように付き合えないわよ」
アムリタの言葉に、ネッコは真っ赤になった。自分が見透かされている気がしたからだ。
「ふ、ふん！　よりによって君に言われたくは無いな。第一……」
ネッコは一息入れて、続けた。
「第一、素直に喜べないのは、君が僕に悪魔の瞳について話す理由がないからだ。いちいち謎めいたことをするその態度が気に入らないな」
「信用してほしい、って言わなかった？」
「信用してほしい理由が謎めいてる」
「他人に信用してほしいのに、理由なんている？」
「ああ、いるね！　特にアムリタ、お前のことだ。また何を隠しているんだ？」

アムリタは黙ったまま腕を組んで、片手を自分の口元に当てがった。何か考え込んでいる様子だが、ネッコにはそれが何なのか見当もつかなかった。
「……ほら、やっぱり隠してるんだろ。秘密主義もいい加減にしたらどうなんだ？」
「気になる？」
「すごくね！」

（……話し声？）
気分転換に散歩をしていたエレインが話し声を聞きつけ、地底湖の手前の通路で立ち止まった。こっそり中を窺って、すぐに顔を引っ込める。そこにいたのは、あのアムリタとネッコだった。エレインは不思議に思った。とりわけ犬猿の仲であるはずのあの二人が、どうしてこんなところで腰を並べているのだろう？
「……そうだ。この際だから訊ねるけど……あのときの自然公園の言葉の意味を教えてくれないか？あの接吻の意味は何だったんだ？」
壁に身を潜めてじっと聞き耳をたてるエレイン。しかし、声が洞窟内に反響していて、彼らの会話をはっきりと聞くのは難しかった。
ただ、この単語だけはしっかりと耳に入った。
（接吻、ですって！？）
エレインはまるで自分の心臓が口から跳ね上がってくるのではないか、そんな錯覚を覚える

ほどに高く胸を打ち、驚いた。
　エレインはこの頃になると、アムリタをもうすっかり自分のものだと思いこんでいた。特殊な環境に育った彼女に対して自分が一番の友人だと信じていたし、実際、この洞窟を出るときに何としてでも自分の旅に同行させるつもりでいた。果ては自分の城につかえてもらおうとすら考えていたほどだ。エレインはアムリタのことを、天からの授かりものだと思っていたのだった。
　だから、ネッコとアムリタが肩を並べて二人きりで話していたのを見ただけで、エレインは軽いジェラシーを感じた。さらに追い討ちをかけるかのようにネッコの口から接吻という言葉を聞いたときには、そのショックは並大抵のものではなかった。理不尽な感情とは知りつつも、アムリタが自分を裏切ったようにまで思えたのだった。
（接吻？接吻って？アムリタとネッコが？なんで？）
　怒りや焦燥感にもにた感情を持って、エレインはじっと聞き耳を立てる。
「……ふう」
　アムリタは溜息をついた。
「あなたが私の思うような人間かどうか、はっきり見極めてからこの話をしたかったんだけれど……どのみち私には選択肢は無いわ」
（……僕の人間性を見極めようとしていたのか、まったく）
　ネッコはむっとした。しかし、いちいち突っかかっても始まらないので、彼女の言葉を待っ

た。
「……あなたはあの時、初めて私と会ったと思っていたんでしょうけれど、私の方は随分と探したものよ」
「……僕がルドヴィヒの孫だからか？」
「いいえ。あなたがマリア・ヴァンシュタインの息子だから」
彼女の言葉に自分の母の名前があらわれ、少し驚くネッコ。
「母さん？母さんがどうかしたのか？」
「マリアは……あなたの母親は生きているわ」
「……母さんのことを知ってるのか！？」
思わず叫び声をあげるネッコ。会話の内容まではわからないものの、立ち聞きをしていたエレインが、その声の大きさに驚いて体をびくつかせた。
「あなたが生まれた直後に……マリア・ヴァンシュタインは姿を消した」
「ああ、そうだ！　ルドヴィヒ爺さんに迷惑をかけないように……母さんは爺さんと父さんの元から姿を消したんだ……生まれたばかりの僕を置いてね。母さんは、自分さえ姿を消せば、ルドヴィヒ爺さんがゼムと戦うことなんて無いと思ったんだろう。ゼムが狙っていたのは他でもない、僕の母さんだったからな」
アムリタはこっくりと頷くと、言葉を続けた。
「……その後、マリア・ヴァンシュタインはどこに行ったと思う？」

「分かれば苦労しないさ」
「考えてみて」
ネッコはしばらく考えたが、それは形だけのものだった。母親がどこへ行ったかなど、生まれてから幾度となく考え、その都度出るはずの無い答えにうんざりしていたからだ。全ては憶測の域をでない。
「分かりっこないさ。しかしアムリタ、どうしてお前がそんなこと……」
ネッコの言葉なんて聞いてないかのように、アムリタは言葉を続けた。
「再三に渡って憎みあい、殺しあってきたゼムが、そんなことでルドヴィヒを許すと思う?ただ娘のマリアが彼の元を去ったというだけで」
「……いや、思えないな。現に、まだゼムは僕の爺さんを狙っているんだろ」
「どうすればゼムの怒りを収めることができると思う?」
「もはや因縁さ。不可能に近いよ」
「可能性はあるわ」
「……」
「ゼム・ロックは心底、マリア・ヴァンシュタインを愛していたのよ」
そのときネッコは、複雑に絡み合った事情や彼女の提供する情報に、一本の薄い糸が見えたような気がした。嫌な考えが彼の背中を突き刺し、思わずギクリとする。
「……まさか、まさか!」

「つまり、マリア・ヴァンシュタインは……自分の家族を救いたい一心でゼムのもとへ嫁いだのよ」
「そんな、嘘だ！」
ネッコは立ち上がって叫んだ。
「本当よ」
「証拠が無い！　憶測だ！」
「本当よ。私はマリアの居場所を知っているわ」
「なに？言え！　どこだ！」
ネッコは乱暴にアムリタの胸倉を掴んだ。
「……っ！」
その手を不愉快そうに払うアムリタ。その拍子に、彼女は持ってきていた水筒を落としてしまった。からからと転がる水筒の音。
「ちょっと！　ネッコ！？」
背後から、予想外の声。ネッコが振り向くと、辛抱溜まらずに影から飛び出してきたエレインがそこにいた。
「え、エレイン様！？」
呆気にとられるネッコ。
「……自分よりも小さな女の子に、乱暴はおよしになったら！？」

「乱暴……？別にそんな……」
何事かを言おうとしてもじもじしているネッコをじっと睨みつけるエレイン。彼らをよそに、アムリタは乱れた自分の服装を整え、立ち上がった。アムリタはネッコに一瞥を送ると、そのまま踵を返してその場を立ち去ろうとした。
「お、おい、待てよアムリタ。話は……」
「話なら私が聞きます！」
アムリタを追いかけようとするネッコの前に立ちふさがるエレイン。腰に手を当て、仁王立ちでネッコを睨みつける。
「いや、エレイン様……そうじゃなくて……その……」
もたもたしているうちに、アムリタはとっくに姿を消してしまっていた。
「……はぁ」
ネッコは大きく溜息をついた。ふと、足元に転がっているアムリタの水筒を見つけて、それを拾う。
「一つ聞いていいかしら？」
エレインは少し不安そうに訊ねた。
「……アムリタは、あなたの何なのです？」
「こっちが聞きたいぐらいです、エレイン様」
ネッコはそう言うと、とぼとぼと自分の部屋へ向かって歩き始めた。

松明の揺らめきをぼんやりと眺めながら、ネッコはアムリタとの会話を思い返した。
（そうか……母さんはやはり生きていたんだ……しかし、ゼムのもとに嫁いだなんて……善良な人だったんだろうな。家族を助ける一心なんだろうけど、僕たちにとってはそんなの、よっぽど辛いよ……どうしてあんなやつの妻なんかに……）
いろいろあった一日だが、その頃にはさすがに意識もまどろみはじめていた。
（……しかし、ゼムの娘のアムリタが、どうしてわざわざそのことを教えてくれるんだ？一体彼女になんの関係が？……ん、というか、ゼムの娘ってことは、やつの妻である僕の母さんの娘ってことで……）
そうこう考えているうちに、ネッコは深い眠りについていた。
目を覚ましたとき、彼はアムリタが自分の父親違いの妹に当たること、また、マリアがルドヴィヒの直接の娘であることから、アムリタもれっきとしたヴァンシュタイン家であることを悟ったのである。

「さーて、出発だ。出口は近いぞ！」
ロアが元気に先陣をきる。
「出口って、どうしてわかるのですか？」

「勘だ。俺の勘はあたるんだよ。賭けるかい？」
「賭け事！」
メルフィナが大げさにびっくりする。
「おいロア、司祭様にむかってそれはないだろう……」
ライオネルがロアをたしなめたるように言った。
「む、知らないのかお前達？神は賭博を禁止しちゃいねーぞ」
「してます！」
メルフィナが怒ってロアに言った。
賑やかな前の三人とは対照的に、その後ろを歩くネッコ、アムリタ、エレインの三人は、実に複雑で微妙な雰囲気を作り出していた。なんとかきっかけを作って、アムリタに昨日のことを、さらには本当に自分の妹かどうかを訊ねたいネッコだったが、アムリタはエレインに独占されていた。
「……ですから、今の男尊女卑の構図を打ち捨てて、男と女は釣り合う天秤のような関係こそが望ましいのです」
ジェンダー論をふっかけるエレイン。アムリタは相槌も打ってなかったが、一応耳を傾けてはいるようだ。
「いままで戦いは男の仕事でしたが、魔物たちが総力をあげて人間界に攻め入ろうとしているこの時代こそ、女も剣を持って立ち上がる時代なんですよ。私は王女として、その第一人者に

なりたい。しかし、王女という立場から周りはなかなか許してくれません。だからあなたやメルフィナのような強い女性を見ると、私は嬉しくて、そして羨ましくて仕方ありませんの」
「……男女の釣り合う関係というのは、別に女が男の真似をすることじゃないわ」
アムリタがエレインに反論する。
「ですけど、男は女の良い所なんて、ちっとも見ようとしませんもの」
「あなたを見ていると、女も同じね」
「そんなことありませんよ。まず男に知らしめる必要があるのは、女にも男の仕事ができるってことを……」
「無理よ」
「そんな……！」
きっぱりと言い放つアムリタに、エレインは思わず絶句した。
「現実を見て、現実を考え、現実に対処する。理想を掲げるのも結構だけれど、ただ理想に溺れて現実を直視しないものに時代なんて動かせないわ」
「い、いいえ。私は、男を含めてあなたほど理知的な人は見たことがありません。アムリタ、あなたは嫌がるのかもしれないけど、女にとって、あなたは英雄ですもの！」
「私は理知的なんかじゃないし、英雄でもない」
「あのさ……」
ネッコが二人の会話に割ってはいると、エレインは心持ちむっとした表情で彼を見た。

「昨日、水筒忘れてたろ。ほらこれ」
ネッコがアムリタに差し出す。それは、紛れも無く彼女が昨日、地底湖の近くで落としていった例の水筒だった。
「……ありがとう」
礼を言って、それを受け取るアムリタ。本当にこのアムリタが、自分の妹なんだろうか……？そう考えると、たったこれだけのやりとりに、ネッコは妙に緊張した。
「それと、昨日の話の続きなんだけどさ……」
アムリタは眉をひそめて、ネッコにしか分からないほど微かに首を横に振った。理由はわからないが、どうもエレインが隣にいることが、彼女にとってあまりいい状況ではないらしい。
「ねえ、アムリタ？さっきの話の続きですけど……」
まるで子供のおもちゃの取り合いのように、エレインがアムリタを自分の話に引き戻す。昨日の一件があってから、エレインはアムリタを独占しようとネッコを遠ざけようとするのだった。
（うぐ……まいったな）
ネッコは自分の頭をぽりぽり掻くと、そのまま黙って歩きつづけた。

彼らが巨大な鉄の扉にたどり着いたのは、それから数時間後だった。立ち止まり、様子を窺う。

「こりゃなんだ？あかねーぞ」
ロアが鉄の扉を押したり引いたりするが、ビクともしない。
「……洞窟が途中から、人工のものに変わっていたのに気が付いた？」
アムリタが言った。
「そうなのか？」
「ええ。おそらく、ここはこのモグラの洞窟を利用して作られた巨大な地下通路だったのね。歩いてきた方角からすると、ミルチアのものかしら」
「おいおい、ちょっとまてよ。ずっと洞窟の中にいて、どうして方角が分かるんだ？」
「穴に落ちる前に確かめたわ」
ロアが訊ねると、アムリタは何でもなさそうに言った。
（おいおい、それを今まで頭の中で計算しながら、延々と洞窟の中を歩いてやがったのかよ……）
ロアは感心するというよりも、アムリタのその才覚に、もはや空恐ろしいものを感じた。
「しかし、もしミルチアがそんなものを極秘裏に用意していたとすれば、大問題ですわ。何と言っても、あの国は鎖国を決め込んで他国との交流や交易を一切シャットアウトしていたはずなのに……」
メルフィナが真剣な表情で言った。ライオネルも腕を組んで、何事かを考えている。
「……とにかく、きっとここが出口なんだろう。ここから出ない手は無い」

ネッコが一歩前に出る。
「僕が魔法で扉をぶっ飛ばすから、みんな下がっていてくれ」
ネッコがそう言った瞬間、なにをすることも無くあっけなく扉は開いた。呆気にとられるネッコ達。
「あれ、開いたな」
一番前にいたネッコが扉をくぐろうとした時、扉の影になにかの気配をライオネルは感じた。
「いかん、ネッコ君！　何か居るぞ！」
「え？」
ネッコの額に鋭い刃が迫る。ライオネルは咄嗟に、肩でネッコを突き飛ばした。刃は間一髪のところでネッコの頬をかすめる。ネッコの頬から一筋の赤い血が流れた。二人はどさりと地に落ちる。
そこに立っていたのは、二本の剣を持った老人だった。
「おっと……こりゃまた、元気なじじいだな」
ロアが腕を鳴らしながら一歩前に出る。
「……我が輩は使徒、ラウド。貴様らに用は無い」
「使徒だと！？　……うおっ」
ロアが使徒と言う言葉におどろき、隙を見せた瞬間、ラウドは目にもとまらぬ一閃をロアに放つ。それを何とか紙一重でかわせたのは、ヴァンパイアの動体視力のお陰であった。

しかし、ロアがひるんだ隙にラウドは最後尾……エレインのもとにまで走っていった。
「エレイン王女、一緒にきてもらおうか！」
「きゃあっ！」
ラウドはエレインを抱え込むと、狭い通路の中を一瞬で跳ね、また扉の向こう側に戻った。ラウドは両開きの扉の片方を足蹴にして強引に閉める。そしてすぐさま、もう片方の扉も足蹴にすると、扉はぴったりと閉まってしまった。
「エ、エレイン様ーッ！」
ライオネルが叫ぶ。自らの主人を助けようと、立ち上がろうとするが……。
「ぐうっ！」
ラウドの最初の一閃が彼の足を鋭く切りつけていたために、彼は自力で立ち上がることが困難でいた。
「結界を張って！」
杖を構えたアムリタが叫ぶ。メルフィナは彼女が何をしようとしているのかを、とっさに理解した。
「魔法結界！　全員、伏せなさい！」
メルフィナが結界を張るのとほぼ同時に、アムリタは叫んだ。
「赤霊砲っ！」
目の前の扉に火炎の光線がぶつかった。その爆風で、近くで倒れていたライオネルとネッコ

が吹き飛ばされそうになったが、結界がなんとか爆風を防いでいた。
まばゆい閃光とともに、激しい熱蒸気をあげる扉。鉄の溶ける悪臭が辺りに充満する。
衝撃が収まると、扉はどろどろに溶解して、その役目を果たさなくなっていた。
「これなら通れる！」
「……私はいけない、誰かエレイン様を！」
ライオネルが叫ぶと、ロア、ネッコ、アムリタの三人が溶けた扉を飛び越えてラウドを追いかけていった。突然、目の前に日の光が差し込む。
「出口だ！」
ロアが叫ぶと、三人は出口から飛び出した。しかし、辺りは何も無い平原で、少し離れたところに城が見えたが、ラウドの姿はもはやどこにも見受けられない。代わりに居たのは、彼らを包囲する数十名の兵士達であった。
「貴様ら、抵抗するな。大人しくしろ！」
兵士隊長が叫ぶ。
「……畜生、やられた！」
悔しそうにつばを吐くロア。
「……あなた達、使徒とグルなの？」
アムリタの問いかけに、兵士隊長は答えない。
「全てはアルテオム様の命令、それだけだ。抵抗しなければ危害は加えない！」

そのとき、メルフィナの肩を借りて、やっとのことで出口から這い出てきたライオネル。
「アルテオム……アルテオムだと……！？　エレイン様をさらったのは、あいつの仕業なのか！」
憤怒の形相で兵士達を睨みつけるライオネル。あまりの恐ろしさに、兵士たちは思わず後ずさる。
「て、抵抗するか！？　大人しくするんだ！　貴様らに逃げ場は無い、ここはミルチアの領地のど真ん中なのだぞ！」
兵士隊長が叫んだ。
その時、一頭の大きな馬に乗った、黒い甲冑を着こんだ女性の騎士が兵をかきわけて躍り出た。彼女の方へ全員の視線が集まる。
「よせ！　その者どもを解放するのだ！」
女性が叫ぶ。彼女の顔を見て兵士達が一斉に身を引くところを見ると、相当身分の高い騎士らしい。
「こ、コーデリア様、しかし……これはアルテオム様の……」
兵士隊長が弱弱しい声で女性騎士に言う。すると、コーデリアと呼ばれた女性騎士は一喝した。
「この者たちに何の罪状があってか！　ここはブラックナイツの管轄下、勝手なマネはやめてもらいたい！　さあ退け！」

コーデリアは次に、ロア、ネッコ、ライオネル、メルフィナ、アムリタの五人を見回して、こう言った。

「……貴公らがなにものかは知らぬが、ひとまず我が隊のもとへ来てもらおう。それが、貴公らの身のためだ……ついでに異国の者として見受け、最初に言っておくが、この国はいま王の急死とともに大いに荒れている！　もし面倒に巻き込まれたくなければ、大人しくついて来ることだ」

第二章　完